

粕屋町文化財調査報告書第 59 集

部木原遺跡

2022

粕屋町教育委員会

はじめに

本書は、物流倉庫建設工事に伴い、令和2(2020)年度に粕屋町教育委員会が実施した部木原遺跡の発掘調査の記録であります。

調査地は、福岡市・藤栗町・久山町との行政区境に近く、各市町区域でも遺跡が確認されています。また、福岡県指定史跡である大隈石棺に近く、調査地周辺は弥生時代終わり頃の拠点地域であったと想定される地域です。

今回の調査では、51棟もの竪穴建物を発見し、大規模集落の存在が確認されました。粕屋町内の調査で最多の発見となります。本遺跡は、弥生時代から古墳時代への過渡期の遺跡であり、調査成果が古墳時代移行期における在地集落の様相を解明する一助になることを願います。

本書が郷土の歴史に誇りを持ち、文化財に対する理解を深める上で広く活用されるときともに、研究資料としても貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました関係者の方々をはじめ、近隣住民の皆様から心から謝意を表します。

令和4年3月31日
粕屋町教育委員会
教育長 西村 久樹

目次

| | |
|------------|------------|
| 5 経過・位置と環境 | 61 掘立柱建物 |
| 6 調査に至る経過 | 62 土坑 |
| 6 調査体制 | 68 溝状遺構 |
| 6 地理的環境 | 75 不定形土坑 |
| 7 歴史的環境 | 78 SP出土遺物 |
| | 83 その他出土遺物 |
| 9 調査成果 | 84 おわりに |
| 10 遺跡の概要 | |
| 16 竪穴建物 | 89 図版 |

| | |
|-----------------|------------------------------------|
| 発行 | 粕屋町教育委員会 |
| 調査起因 | 物流施設建設工事 |
| 現地調査 | 令和2(2020)年7月20日～令和3(2021)年1月26日 |
| 整理調査 | 令和3(2021)年2月1日～令和4(2022)年3月31日 |
| 使用方位 | 座標北(国土座標第Ⅱ系[世界測地系])。真北に対して0°17'西偏。 |
| 遺構・遺物実測、製図、資料整理 | 株式会社島田組九州支店 |
| 遺物撮影 | 株式会社写真調エンジニアリング(牛嶋茂)、高橋幸作 |
| 遺構撮影 | 朝原泰介、株式会社島田組九州支店 |
| 執筆 | 福島日出海 |
| 編集 | 高橋幸作 |

本書に関わる遺物・記録類は、粕屋町立歴史資料館にて収蔵・管理し、公開する予定である。

経過・位置と環境

経過・位置と環境

調査に至る経過

部木原遺跡の調査は、福岡県糟屋郡粕屋町大字上大隈字部木原758において、福岡ロジスティック特定目的会社より令和元(2019)年12月26日に物流倉庫建設工事に伴う埋蔵文化財事前審査願書が提出されたことに起因する。敷地面積20,526.00㎡、建築範囲10,767.51㎡と大規模な計画内容であった。

当該計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地である部木原遺跡に位置していたため、令和2(2020)年1月8日～10日に確認調査を実施したところ、縄文時代から奈良時代にかけての遺構、遺物を検出した。この調査結果に基づき協議を重ねたが、工法計画の変更は難しく、記録保存の発掘調査実施後に工事を着手することとなった。確認調査の結果により、発掘調査対象範囲は約6,000㎡である。

ただし、令和3(2021)年1月に工事着工を予定した緊急を要する開発事業計画であったが、粕屋町教育委員会は他の開発に伴う約1,300㎡に及ぶ別件の発掘調査(以下、「別件発掘調査」という)を予定しており、さらに約6,000㎡と大規模な調査に対応できる体制が整わなかった。このことから、福岡ロジスティック特定目的会社は行政機関単独では対応できないものと判断され、民間調査会社である株式会社島田組に調査支援を依頼することで調査期間の短縮を

提案した。これを受けて、粕屋町教育委員会は福岡県教育委員会と協議を行い、別件発掘調査に従事する職員2名のうち、1名を部木原遺跡担当に変更し、粕屋町教育委員会職員が調査担当となることを条件として、調査支援を活用することとした。この変更によって生じる別件発掘調査職員の減員補填及び部木原遺跡調査期間短縮を目的とする調査支援を福岡ロジスティック特定目的会社が株式会社島田組へ委託・費用負担することで合意し、粕屋町、福岡ロジスティック特定目的会社、株式会社島田組の三者で協定を締結した。

発掘調査は令和2(2020)年7月20日～令和3(2021)年1月26日において実施した。発掘調査にかかる遺構掘削業務は粕屋町教育委員会が株式会社島田組九州支店へ委託した。

発掘調査報告書作成に係る遺物整理作業は、三者協定により、資料整理、遺物の実測・製図・撮影、遺構製図は株式会社島田組が担当し、令和3(2021)年2月1日～令和3年7月31日の期間において実施した。発掘調査報告書の執筆及び編集、印刷製本にかかる業務は粕屋町教育委員会が担当し、発掘調査報告書の執筆及び編集にかかる業務は令和3(2021)年4月1日から開始し、印刷製本にかかる業務は令和4(2022)年3月7日～令和4年3月31日の期間で行った。出土遺物及び図面・写真等の記録類は粕屋町歴史資料館にて保管している。

また、地域住民の方々をはじめ、関係者の皆様には調査の趣旨にご理解を得るとともに、多大なご協力を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

調査体制

令和2(2020)年度
調査主体 粕屋町教育委員会
教育長 西村 久朝
社会教育課長 新宅 信久
同課文化財係主幹 西垣 彰博
同課同係主任主事 高橋 幸作
同課同係会計年度任用職員
朝原泰介(調査担当)、上田津由美、
福島日出海、毛利須寿代、松永メイ子

令和3(2021)年度
調査主体 粕屋町教育委員会
教育長 西村久朝
社会教育課長 新宅信久
同課文化財係主幹 西垣彰博
同課同係主任主事 高橋幸作
同課同係会計年度任用職員
常盤津由美、尾方濱利、福島日出海(報告書担当)、毛利須寿代、松永メイ子

地理的環境

福岡県糟屋郡粕屋町は、福岡市の東に隣接し、粕屋平野の中央に位置している。町域は14.13km

1. 部木原遺跡
2. 大隈石棺(県指定)
3. 真覚寺古墳
4. 上大隈小浜遺跡
5. 大隈栄松遺跡
6. 大隈丸山古墳
7. 西尾山古墳群
8. 江辻遺跡第1地点
9. 江辻遺跡第2・3地点
10. 江辻遺跡第5地点
11. 江辻遺跡第6地点
12. 天神森古墳
13. 部木古墳群
14. かげ塚遺跡
15. かげ塚古墳群
16. 蒲田部木原遺跡群
17. 蒲田水ヶ元遺跡
18. 蒲田原遺跡
19. 原石棺群
20. 原古墳群
21. 和田部木原遺跡
22. 松浦古墳
23. 松浦横穴墓群
24. 鬼ヶ花横穴墓群

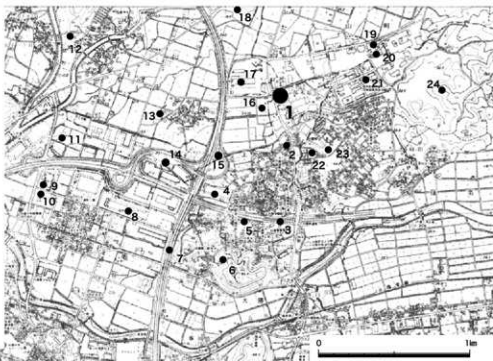


図1 部木原遺跡周辺図(1/2,500)

と狭く、大半が平坦な地勢である。

粕屋平野の西は博多湾に面し、南側は四王寺丘陵部によって福岡平野と区別される。東側の三郡山地を源とする3本の河川が平野を貫流し、北から多々良川、須恵川、宇美川の順で博多湾へ注いでいる。平野の北側には立花丘陵部があり、博多湾に面して周りを山地で囲まれた小さな平野である。東の三郡山地から舌状に派生する低丘陵が多く、平坦な地勢の潮に沖積地は河川流域に限られている。

部木原遺跡が位置する博多湾沿岸は、多々良川・須恵川・宇美川が河口付近で合流し、古代においては入江状の内海を形成していた。部木原遺跡は、河川地域から離れた、三郡山地から伸びる舌状丘陵上に位置する。

歴史的環境

粕屋町周辺は、博多湾東岸に位

置するという立地環境もあり、早くから大陸・朝鮮半島との交流が認められる地域である。多々良川流域には、松菊里型住居で構成された渡来系稲作集落である江辻遺跡が弥生時代早期に登場する。

弥生時代には青銅器生産が知られる地域でもあり、多々良川対岸の上井遺跡群(福岡市)、多々良大牟田遺跡群(福岡市)では青銅器類型が出土している。粕屋町域でも、内橋坪見遺跡と内橋登り上り遺跡で青銅製鋤先、戸原鹿田遺跡で銅鏃、阿恵古屋敷遺跡では銅矛中子が出土している。青銅器生産を基盤とした集落展開の様相が明らかになりつつある。

弥生時代中期の甕棺墓群が内橋鏡遺跡や新大間池遺跡、戸原堀ノ内遺跡、辻畑遺跡、蒲田水ヶ元遺跡(福岡市)などで発見されている。その後、弥生時代後期の石蓋土坑墓、木棺墓などが内橋登り上り遺跡、原石棺群(久山町)で、弥生時代終末期の墳丘墓が大隈石棺(福岡県指定史跡)で、方形周

溝墓が内橋カラヤ遺跡、蒲田水ヶ元遺跡(福岡市)で発見される。大隈石棺周辺では大隈栄松遺跡で弥生時代中期末から後期前葉の集落が確認されており、蒲田部木原遺跡群(福岡市)や蒲田水ヶ元遺跡(福岡市)では弥生時代後期後半から古墳時代にかけての集落が確認されている。

このような地域的まとまりを背景に、古墳時代になると多々良川流域に前期前方後円墳である戸原王塚古墳、内橋カラヤ古墳、名島古墳(福岡市)が築造される。その後、中期には首長系譜が途切れるが、後期になると推定全長75mほどの前方後円墳である鶴見塚古墳が須恵川流域に築造される。現況は宅地化が進んで半壊状態であるものの、近世地誌『筑前国統風土記拾遺』に江戸時代当時の鶴見塚古墳の状況が詳細な計測値とともに記されており、周溝を含めた全長約86m、後円部南側に横穴式石室が開いて内部に石屋形が安置されていることをはじ

め、墳丘形態・石室規模なども克明に読み取れる。これは那津官家の管掌者といわれる東光寺銅塚古墳（福岡市）と同規模・同主体部であり、『日本書紀』継体22年の糟屋屯倉との関連が示唆される。

また、戸原寺田遺跡では、6世紀後半から7世紀前半の鍛冶関連遺構のほか、紡いだ糸を巻き取る棒の腕木が出土するなど、手工業に関わる集落が確認されていて、それに隣接する戸原御堂の原遺跡では同時期の倉庫群も見つかっている。ミヤケの時代の拠点的な集落の状況も明らかになりつつある。

粕屋町は、古代において筑前国糟屋郡に属し、須恵川下流域の阿恵官衙遺跡で糟屋評面・郡衙が発見され国史跡に指定されている。

阿恵官衙遺跡は、7世紀後半から8世紀後半にかけて、政庁と正倉という地方官衙の主要施設の全体像を捉えながら、評価の出現

から郡衙の最盛期に至るまで地方官衙の変遷を追うことができる国内でも稀な遺跡である。さらに、698年の京都妙心寺梵鐘銘「糟屋評造春米連廣國」により、評造名が判明している。まさに、阿恵官衙遺跡の政庁において「春米連廣國」が評造として政務をおこなっていたことが特定された。

8世紀前半に阿恵官衙遺跡の政庁が移転した後（正倉は8世紀後半まで残る）、郡衙の移転先はいくつか候補地がある。谷を隔てた北側の微高地上にある阿恵原口遺跡は、阿恵官衙遺跡の政庁と同じ方位の官衙建物が直交に配置されている。周辺にも官衙建物が展開している可能性がある。また、阿恵官衙遺跡の東方約0.9kmの地点に1町四方の区画があり、『筑前国統風土記拾遺』では「長者の屋敷跡」と記されている。遺構は確認できていないが、区画の方位

が阿恵官衙遺跡の政庁と同じであり、有力な候補地の一つである。さらに、「長者の屋敷跡」の南約100mにある原町平原遺跡では、大型の建物跡が発見されている。建物の主軸方位が正方位をとり、阿恵官衙遺跡の正倉群と同じであることから、8世紀後半の郡衙関連施設である可能性が高い。

また、阿恵官衙遺跡は官道が交差する箇に立地することが明らかで、そのうちの駅路は大宰府と都を結ぶ大路であり、この駅路沿いに内橋坪遺跡が位置する。大宰府式鬼瓦、赤色顔料が付着した間切軒平瓦など多量の瓦が出土し、大型の建物群と圍繞施設をともなうことから、駅家（真守駅）の可能性が高いと考えられる。

粕屋町周辺は、郡衙、駅家、官道、港、寺院などがあり、古代史を考えるうえで鍵となる重要な要素をもつ地域である。

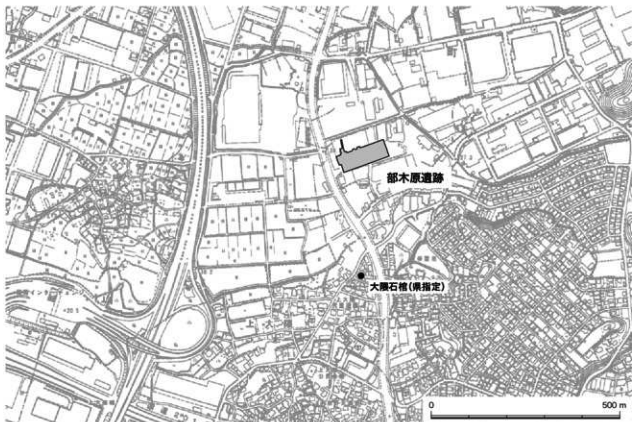


図2 調査地周辺図 (1/10,000)

調査成果



調査地全体写真(北から)

調査成果

遺跡の概要

当遺跡は、標高約28～29mの丘陵上に立地し、弥生時代後半から末頃を中心に、一部古墳時代中期から後期に至る集落遺跡である。調査面積は6,097.12㎡であり、粕屋町内の調査としては広くまとまったものと考えられるが、遺跡の半分は旧建物の基礎や建築の際の削平によって失われており、明確な形状の遺構は極めて少なく、多くの遺物が失われたと想像する。

調査区は、立地する丘陵の長軸に沿って東西に長く設置されており、遺構は全体に及ぶものの過去の建設工事等による攪乱が著しく、全体の様相を把握することは困難と考えられる。そのような状況下においても、遺構の中心となる竪穴建物群を観察すると、西端と中央部の南側に集中する状況が窺えよう。ただし、それら両地点間、かなり広い上に帯状に長く攪乱が入っているため捉えづらいが、概ね2つの竪穴建物群と考えられる。また、調査区の東側は東端に移行するほど削平が著しく、竪穴建物群の存在については不明と言わざるを得ない。

当遺跡の位置は、糟屋郡粕屋町、久山町、福岡市東区の境界付近にあって、篠栗町の金出・高田方面から和田を經由し、福岡市の東区へと延びる丘陵地の先端付近に相当しよう。また、その丘陵の先端には、福岡市東区蒲田の水ヶ元遺



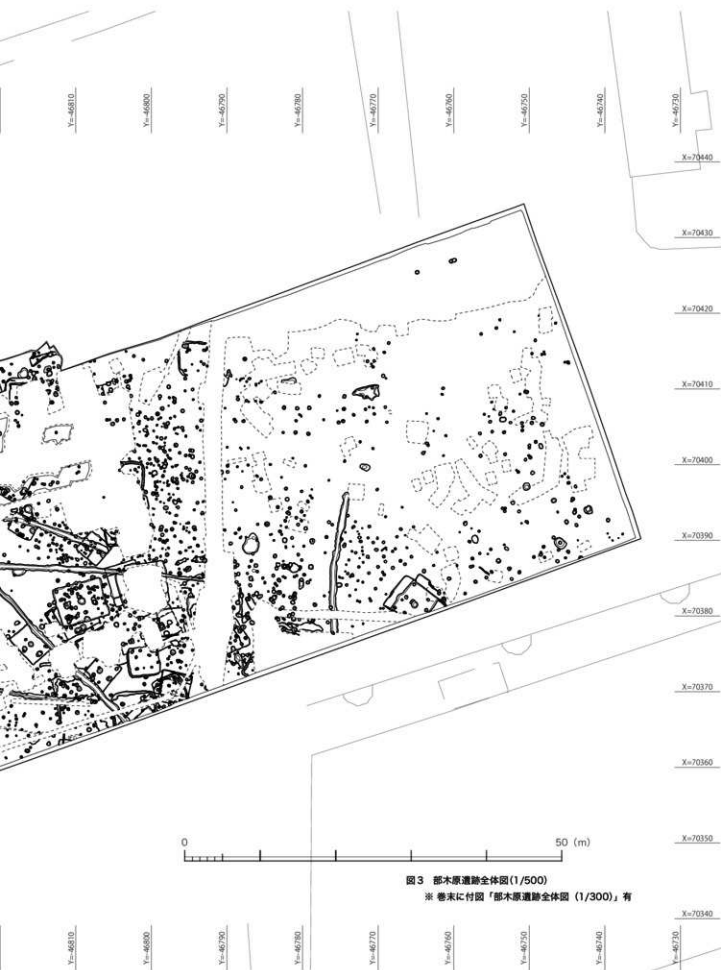


図3 那木原遺跡全体図(1/500)

※巻末に付図「那木原遺跡全体図(1/300)」有

部木原遺跡



図4 部木原遺跡全体図(西)(1/200)



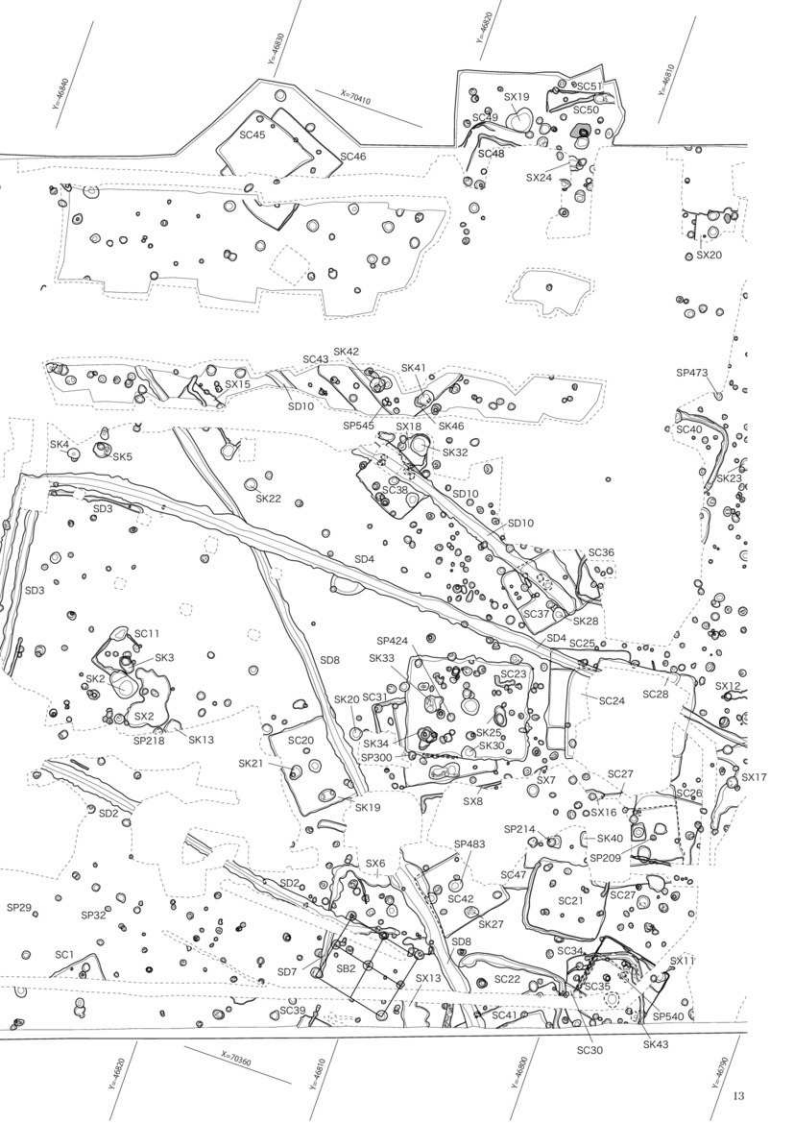






図5 部木原遺跡全体図(縮1/200)

跡⁽¹⁾や部木原遺跡群・部木古墳群⁽²⁾が存在し、当遺跡はその東側に隣接することから、蒲田の遺跡群とは連続する関係にあると考えられる。なお、当遺跡の東側には、久山町の原古墳群と原石棺群⁽³⁾、さらに、その東には篠栗町の和田部木原遺跡⁽⁴⁾、蒲田池⁽⁵⁾及び鬼ヶ浦横穴墓群⁽⁶⁾が位置する。

■ 竪穴建物 (SC)

SC1 (図6)

北側コーナー部分のみ検出。平面形は方形を呈すと考えられる。柱穴はP1 (SP60)の可能性が高く、その位置から4本柱構造と想定される。規模は、長さ2.7m以上、幅1.5m以上、深さ0.2mを測る。

SC1 出土遺物 (図7)

1 弥生土器甕。口縁部はくの字状を呈し外反する。頸部の直下に三角突帯を貼付け、胴部は長胴気味となろうか。口径24.7cm、残高5.0cmを測る。胎土3mm以下の茶色、茶褐色の砂粒を大量に含む。また、3～5mmの白色不透明な角張った粒を含む。焼成：良好。色调：黄橙色。

SC2 (図8)

建物の南側のみ検出。平面形は方形を呈すと考えられる。柱穴はP1、P2 (SP68)と考えられ、その配置等から4本柱の構造と想定される。規模は、長さ1.5m以上、幅3.5m、深さ0.15mを測る。

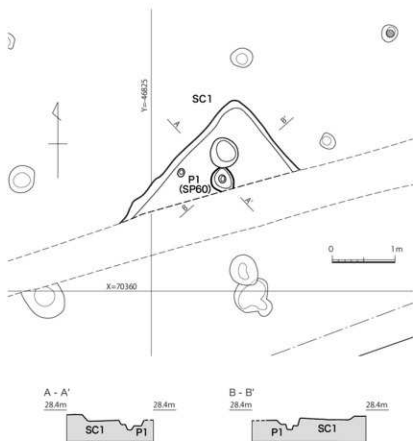


図6 SC1平面図、断面図(1/60)

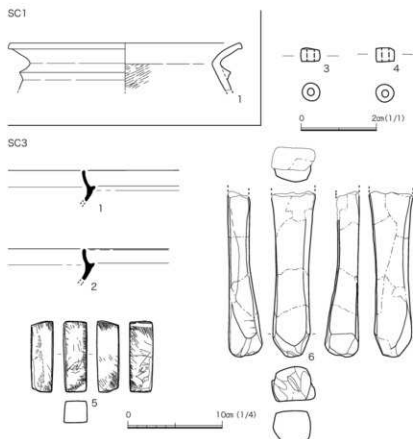


図7 SC1、SC3出土遺物実測図 (SC3-3、4:1/1) (その他:1/4)

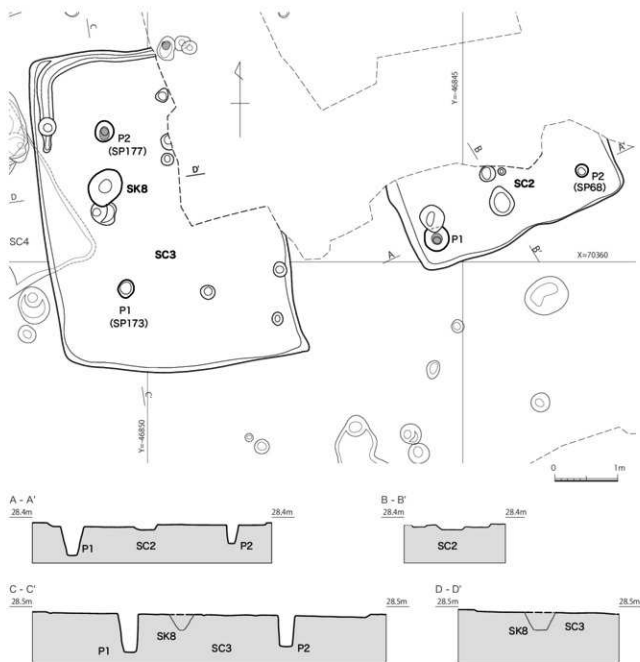


図8 SC2, SC3, SK8 平面図、断面図 (1/60)

SC3 (図8)

建物北東のコーナー部分を削平されている。平面形は方形で、北西コーナー付近に周溝が存在する。柱穴はP1 (SP173)、P2 (SP177)と考えられ、その配置から4本柱の構造と想定される。屋内が等は不明。規模は、長さ5.15m以上、幅3.8m、深さ0.1mを測る。

SC3 出土遺物 (図7)

1 須恵器杯身。直立する口縁部は端部を丸く納め、内面が屈折する。残高3.3cm、立ち上り高0.7cmを測る。胎土:1mm以下の黒色粒子を含む。焼成:良好。色調:灰色。外面に降灰による自然軸が付着する。2 須恵器杯身。直立する口縁部は端部を丸く納め、内面が屈折する。残高3.3cm、立ち上り高0.8cmを測る。胎

土:1mm以下の黒色粒子を含む。焼成:良好。色調:灰色。3 滑石製白玉。長さ0.35cm、幅0.5cm、厚さ0.5cmを測る。4 滑石製白玉。長さ0.3cm、幅0.5cm、厚さ0.3cmを測る。5 砥石。褐灰色の泥岩を使用。長さ7.5cm、幅2.5cm、厚さ2.25cmを測る。6 砥石。褐灰色の泥岩を使用。長さ17.5cm、幅4.6cm、厚さ3.7cmを測る。

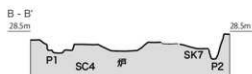
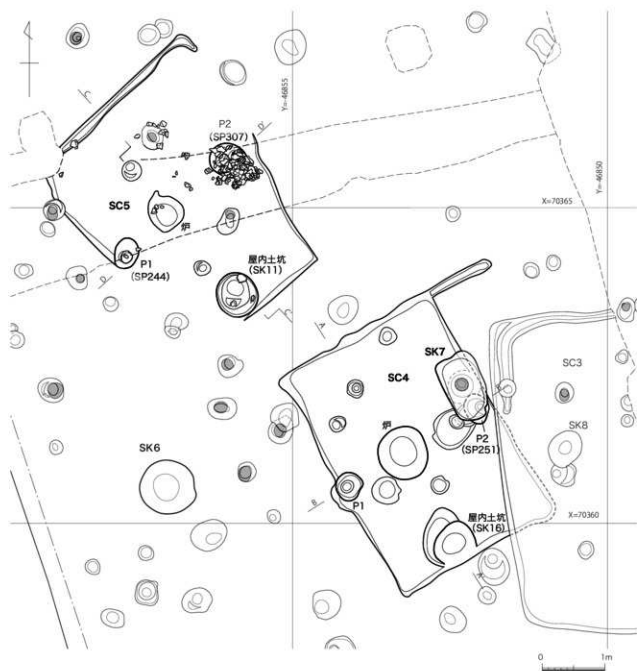


図9 SC4, SC5, SK7 平面図、断面図 (1/60), SK6 平面図 (1/60)

SC4 (図9)

SC3に切られる。平面形は方形を呈す。柱穴はP1とP2(SP251)で、2本柱の構造を示す。床面の中央付近には、円形の屋内炉が位置する。長方形の竪穴構造や柱穴と屋内炉とのバランス、さらに、北東コーナー周溝部の形状等を観察すると、本来、東西の両壁面側には、ベッド状遺構の存在が想定される。また、南壁付近には屋内土坑(SK16)が位置する。規模は、長さ4.0m以上、幅3.8m、深さ0.1mを測る。

SC4 出土遺物 (図10)

1 弥生土器甕。口縁部はくの字状を呈し外反する。頸部の直下には、三角突帯を配し、口径35.8cm、残高6.2cmを測る。胎土:1mm以下の白色、赤色の粒子を含む。焼成:良好。色調:にぶい黄色。

SC5 (図9)

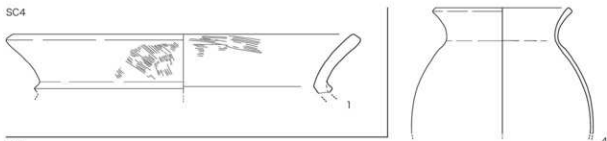
北壁及び西壁面の一部を検出。平面形は方形を呈す。P1(SP244)とP2(SP307)の2箇所が柱穴で、2本柱構造の建物と考えられる。中央付近には、円形の屋内炉が位置する。長方形の竪穴構造や柱穴と屋内炉の位置関係、さらに、北東コーナー付近の周溝が、SC4と同じ構造を示していることから、東西の両壁面側にベッド状遺構の存在が想定される。また、南壁付近には屋内土坑(SK11)が位置しており、P2上面の土器集積は、建物の廃棄後に堆積したものである。規模は、長さ4.1m以上、幅3.4m、深さ0.15mを測る。

SC5 出土遺物 (図10、図11)

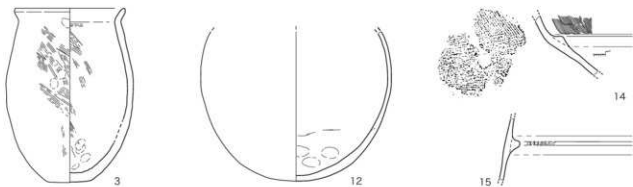
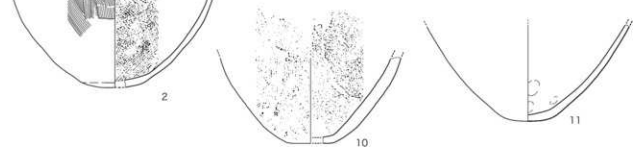
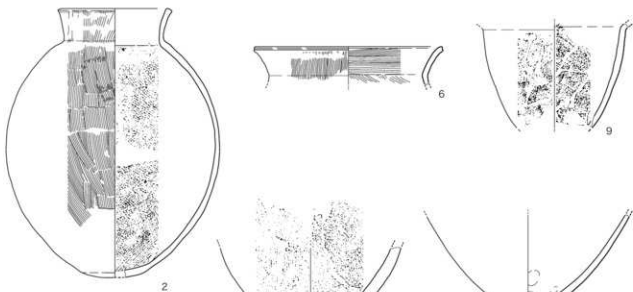
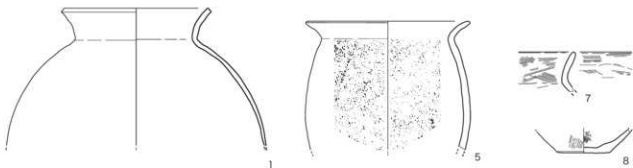
1 弥生土器壺。口縁部は外反し、胴部が丸味を持って大きく膨らむ。口径15.2cm、残高14.5cmを測る。胎土:1~2mmの石英粒を含む。焼成:普通。色調:明黄褐色。2 弥生土器壺。口縁部は少し外反するものの直口縁に近く、胴部がわずかに膨らむ長胴形で、底部は丸みを帯びたレンズ状を呈す。調整は外面に縦位のハケメ、内面には斜位のハケメを施す。口径11.2cm、器高28.4cm、底径6.2cmを測る。胎土:1~2mmの黒色、褐色の砂粒を含む。焼成:良好。色調:灰黄褐色。3 弥生土器壺。口縁部は緩やかに開き、胴部は長胴気味で、底部は丸みを帯びながらわずかにレンズ状に張る。調整は、内外両面ともに斜位のハケメで、一部に指オサエが観察される。口径11.8cm、器高18.4cm、底径4.5cmを測る。胎土:1mm以下の黒色、茶色の砂粒を含む。焼成:良好。色調:明黄色。4 弥生土器壺か。口縁部は外反し、全体に間のびしたS字状を呈す。口径14.0cm、残高13.3cmを測る。胎土:2mm以下の白色粒、5mm以下の灰色粒を含む。焼成:不良。色調:にぶい黄色。5 弥生土器壺。口縁部は大きく開き、胴部の張りは弱く長胴を成す。口径17.3cm、残高13.7cmを測る。胎土:1mm以下の白色、黒灰色、肌色の砂粒を含む。焼成:良好。色調:明黄褐色。6 弥生土器壺。口縁部は緩やかなくの字状で、長胴を成すと考えられる。調整は外面に縦位のハケメ、内面には横位のハケメを施す。胎土:1~2mmの砂粒を少量含む。焼成:良好。色調:にぶい黄褐色。7 弥生土器

壺。口縁部は緩やかなくの字状を呈す。調整は内外両面ともにハケメを施す。胎土:1~2mmの砂粒を少量と赤褐色粒とを含む。焼成:良好。色調:褐色。8 弥生土器壺か。平底状の底部は上部が大きく開く。底径5.6cm、器高2.4cmを測る。調整は内外両面ともにハケメを施す。胎土:1mm以下の淡橙色、褐色の砂粒を含む。焼成:良好。色調:にぶい赤褐色。9 弥生土器壺。くの字状で頸部から胴部下半へと緩やかにすぼまる。残高10.9cmを測る。胎土:赤褐色の粒子、石英粒を含む。焼成:良好。色調:褐色。10 弥生土器壺か。底部は小さく丸味を帯び、胴部が張る。底径4.6cm、残高9.1cmを測る。胎土:1mm以下の淡橙色、乳白色の粒を含む。焼成:良好。色調:灰黄褐色。11 弥生土器壺か。小さな底部は丸底に近く胴部が張る。調整は底部内面付近に指オサエが観察される。底径4.5cm、残高10.5cmを測る。胎土:2mm以下の黒色、乳白色の粒を含む。焼成:良好。色調:褐色。12 弥生土器か土師器の甕。土器集中箇所の最下層出土。全体が球体状を呈すが、丸底部分の一部に平坦面が残る。調整は、底部内面の指オサエのみ観察される。残高15.8cmを測る。胎土:1~2mmの赤褐色粒、石英粒を含む。焼成:良好。色調:にぶい黄褐色。13 弥生土器壺。口縁部は緩やかに外反し、頸部にコ字状突帯を1条配す。肩部の張りは弱い。調整は外面に縦位のハケメ、内面には横位のハケメを施す。残高21.5cmを測る。胎土:2mm以下の白色粒を含む。焼成:良好。色調:明褐色。14 弥生土器壺。頸部に三角突帯を1条配す。調整は頸部から肩部にかけて斜位

SC4



SC5



0 10cm

圖 10 SC4, SC5 出土遺物実測図 (1/4)

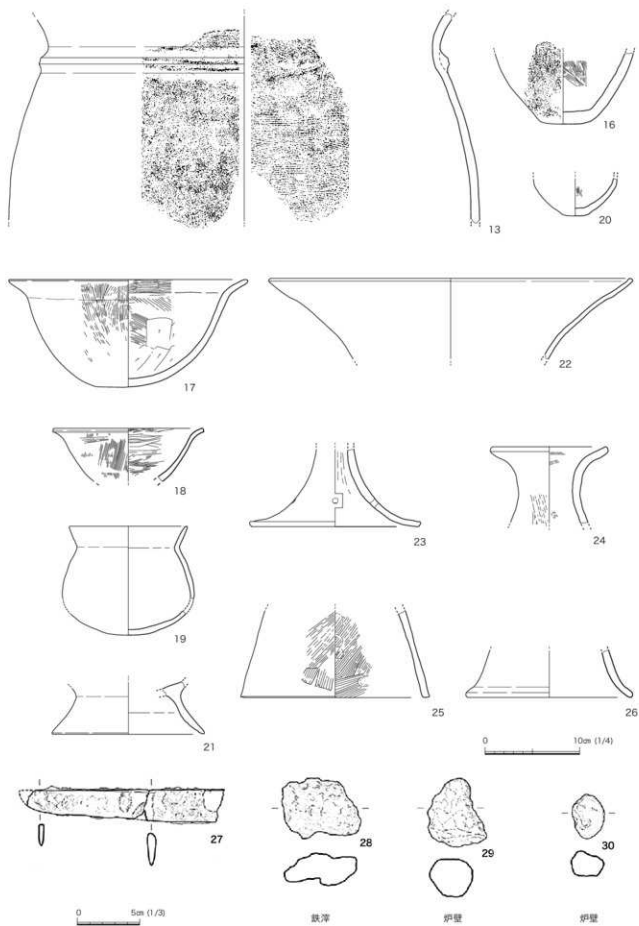


図 11 SC5 出土遺物実測図 (26～29：1/3) (その他：1/4)

や縦位のハケメを施し、内面には横位のハケメを加える。残高8.4cmを測る。胎土:4mmほどの石英粒を含む。焼成:普通。色調:橙色。15 弥生土器甕、あるいは壺。胴部には、キザミメを施す1条の赤帯を配す。残高6.1cmを測る。胎土:1mmの白色粒子を含む。焼成:普通。色調:浅黄橙色。16 弥生土器甕。底部はやや厚手のレンズ状を呈す。調整は内外面に縦位のハケメを施し、底部付近はナデによって仕上げる。残高7.4cm、底径5.3cmを測る。胎土:4mmほどの石英粒を含む。焼成:普通。色調:橙色。17 弥生土器鉢。口縁部は外反するが頸部の屈折は弱い。底部は丸底状であるが、わずかに平底部分を残す。調整は外面に縦位のハケメ、内面には斜位のハケメとハラケズリを施す。口径25.4cm、器高11.4cmを測る。胎土:3mm以下の黒色、乳白色、白色の砂粒を含む。焼成:良好。色調:灰黄色。18 弥生土器鉢。口縁部は外反するが、頸部の屈折は緩やかである。口径16.0cm、残高5.6cmを測る。胎土:1mmの赤色粒を多量を含む。焼成:やや不良。色調:にぶい褐色。19 弥生土器鉢か。口縁部の開きは弱く、下膨れ状の胴部とレンズの状底部が特徴的である。口径12.2cm、器高11.5cmを測る。胎土:1mm以下の灰色、肌色の粒子を多量を含む。焼成:良好。色調:にぶい黄褐色。20 弥生土器小形壺か鉢。胴部が張り出し、底部はレンズ状を呈す。調整は内面にわずかにハケメが残る。底径2.0cm、残高4.0cmを測る。胎土:1mm以下の角のある褐色、不透明な白色の粒子を含む。焼成:良好。色調:明赤褐色。21 弥生土器脚付鉢。外方に開く

脚部で、先端は尖り気味となる。残高5.5cm、底径16.2cmを測る。胎土:2mm以下の砂粒を含む。焼成:良好。色調:橙色。22 土師器高杯。形状はラッパ状に大きく開き、薄手で中心に近づくにつれ傾斜が強くなり立ち上る。口縁端部の内面はやや段状を呈しており、内面全体の仕上げは粗雑である。口径38.0cm、残高8.5cmを測る。胎土:2~3mmの白色、黒色の砂粒を多量を含む。焼成:良い。色調:にぶい褐色。23 弥生土器高杯。形状はラッパ状に大きく開く脚部で、円形のスカシ孔が4箇所に存在する。調整は外面にナデ、内面にはシボリの後にナデを施す。底径17.7cm、残高8.2cmを測る。胎土:1mm以下の黒色粒子、石英粒子を含む。焼成:良好。色調:淡黄褐色。24 弥生土器器台。受部がラッパ状に大きく開き、端部がやや角張る。調整は内外面ともにハケメの後にナデを施す。受部径12.0cm、残高8.0cmを測る。胎土:2mm以下の黒色、茶褐色の砂粒を多量を含む。焼成:良好。色調:褐色。25 弥生土器器台。ハの字状に開く脚部で、端部は角張る。調整は内外両面ともにハケメの後ナデを施す。残高9.2cm、底径19.6cmを測る。胎土:褐色、灰色の砂粒を含む。焼成:良好。色調:にぶい黄褐色。26 弥生土器器台。脚部先端が緩やかに屈折しており、端部を丸く納める。残高5.0cm、底径19.2cmを測る。胎土:2mm以下の褐色、白色半透明の角礫状の粒を多量を含む。焼成:良好。色調:橙色。27 鉄刀。身の先端付近から上半部にかけての資料で、切先が欠損している。残長15.6cm、身幅1.7~2.6cm、身厚0.4~0.7cmを測る。28 鉄滓。表面に

凹凸が激しく、全体に錆がよく出ており、磁石の反応が強い。長さ6.1cm、幅4.8cm、厚さ7.0cmを測る。29 釘壁。紡錘形の破片で長さ5.5cm、幅4.7cm、厚さ3.2cmを測る。30 釘壁。投弾状の破片で長さ3.6cm、幅2.6cm、厚さ2.0cmを測る。

SC6 (図 12)

北壁の周溝部のみ検出、SC7を切る。平面形は方形と考えられ、柱穴や屋内炉等は不明。規模は、長さ4.15m、幅0.9m以上を測る。

SC6 出土遺物 (図 13)

1 須恵器高杯。台形状のスカシ孔を3箇所に配した脚部で、端部は三角形状を呈し、内面がやや窪む。外面にはカキメを施し、端部はココナデで仕上げる。残高4.8cm、底径8.4cmを測る。胎土:3mmの石英粒、1mm以下の黒色、白色、赤色粒子を含む。焼成:良好。色調:灰白色。

SC7 (図 12)

SC6に切られる。平面形は方形と考えられるが、柱穴、屋内炉等は不明。規模は、長さ2.55m、幅1.6m以上を測る。

SC8 (図 12)

北壁、東壁の一部と内面のほとんどは削平されている。平面形は方形と考えられるが、柱穴や屋内炉等は不明。規模は、長さ4.35m以上、幅3.9m、深さ0.12mを測る。

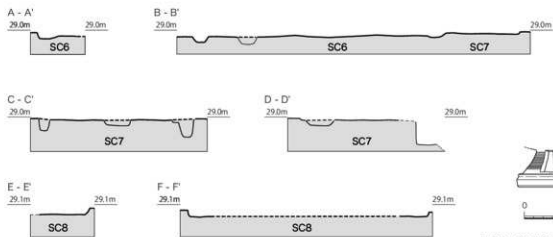


图 13 SC6 出土遺物実測図 (1/40)

图 12 SC6、SC7、SC8 平面図、断面図 (1/60)

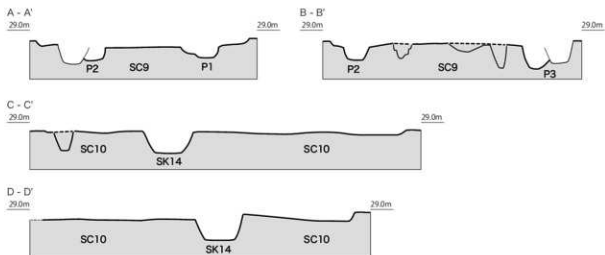
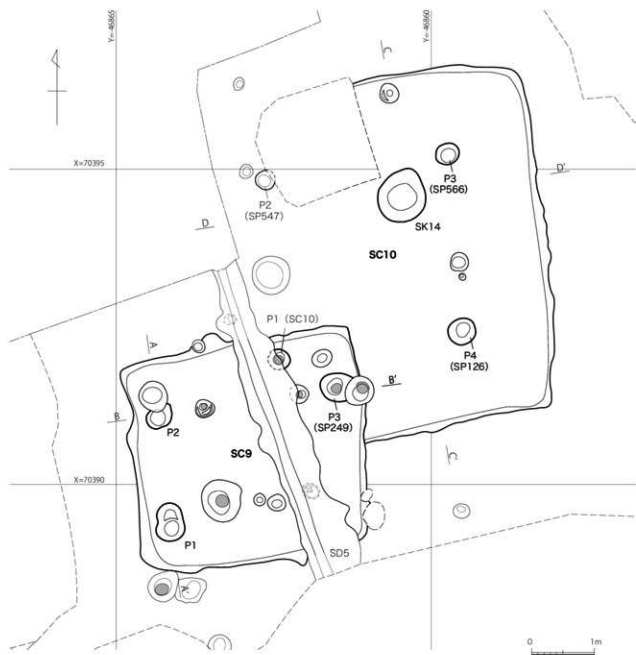


图 14 SC9、SC10、SK14 平面图、断面图 (1/60)

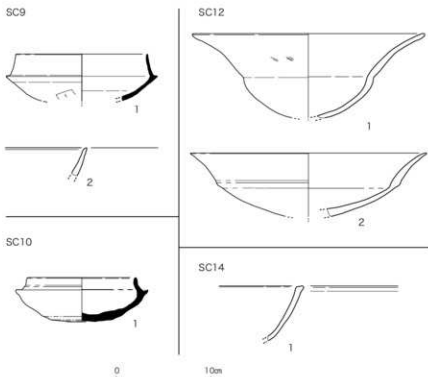


図15 SC9、SC10、SC12、SC14出土遺物実測図(1/4)

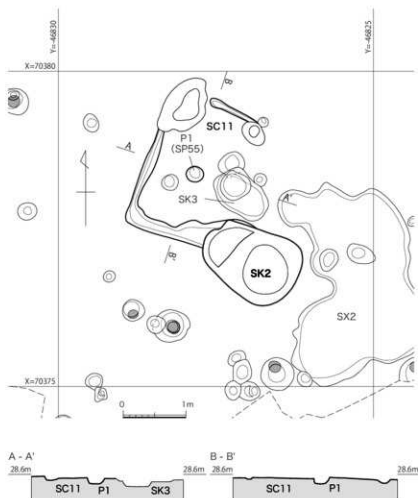


図16 SC11平面図、断面図(1/60)、SK2平面図(1/60)

SC9 (図14)

SC10を切るが、SD5に切られる。平面形は方形を呈し、柱穴はP1、P2、P3 (SP249)と考えられる。4本目はSD5に切られて不明であるが、4本柱の構造と想定される。屋内が等の存在は不明。規模は、長さ3.7m、幅3.45m、深さ0.15mを測る。

SC9出土遺物 (図15)

1 須恵器杯身か有蓋高杯。口縁部は内湾気味に直立し、立ち上り高が2.3cmと高く、受部内面には沈線状のラインが廻る。調整は全体に横ナデを施し、底部付近は手持ちのヘラケズリを加える。口径13.8cm、残高5.0cmを測る。胎土:3mmの石英粒、1mm以下の黒色、白色、赤色粒子を含む。焼成:良好。色調:灰白色。2 土師器杯。口縁部は緩やかに外反し、端部断面が三角形状を呈す。残高2.7cmを測る。胎土:1mm以下の白色、赤色の粒子を含む。焼成:不良。色調:赤褐色。

SC10 (図14)

SC9に切られ、北西コーナー付近は削平のため不明。平面形は方形を呈し、柱穴はP1、P2 (SP547)、P3 (SP566)、P4 (SP126)で、4本柱の構造をなす。SK14は屋内がの可能性有り。規模は、長さ5.6m、幅3.0m以上、深さ0.1mを測る。

SC10出土遺物 (図15)

1 須恵器杯身。口縁部は内湾気味に直立する。調整は横ナデを主体に、底部外面は回転ヘラケズリ、底部内面はナデを施す。口径11.4cm、器高4.7cmを測る。胎

土:1~3mmの白色粒を多量に含む。焼成:良好。色調:灰白色。

SC11 (図16)

SK2に切られる。全体に削平が著しく、北西部付近の周溝のみ検出。平面形は方形を呈し、柱穴はP1(SP55)の可能性が考えられ、その配置等から2本柱構造と想定される。規模は、長さ2.35m、幅2.1m以上を測る。

SC12 (図17)

全体に削平が著しく、南西壁の一部のみを検出。平面形は、直線的な壁面ラインから方形と考えられる。なお、屋内が¹は確認されるが柱穴等は不明。規模は、長さ2.0m以上を測る。

SC12 出土遺物 (図15)

1 弥生土器鉢か高杯。口縁部は大きく外反し、体部との接触面が屈折して段状を呈す。図面上は脚部の想定が困難であるが、復元時における底部付近の破片接合に違和感があり、それを除けば、口縁部から体部の形状は、高杯の可能性が高い。調整は、器面の磨減が著しく判然としないが、口縁部外面に斜位のハケメが残る。口径24.4cm、残高8.9cmを測る。胎土:2mm以下の黒色砂粒を多量に含む。焼成:良好。色調:赤色。2 弥生土器高杯。口縁部は大きく開き、体部との接触面が屈折する。口径24.8cm、残高6.7cmを測る。胎土:1mm以下の石英、赤色の粒子を含む。焼成:良好。色調:橙色。

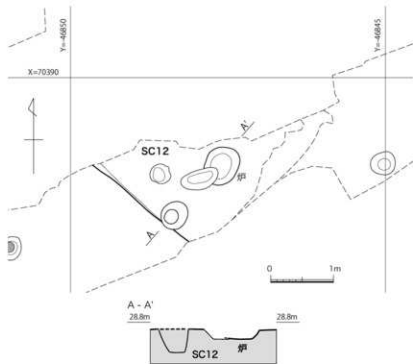


図17 SC12平面図、断面図(1/60)

SC13 (図18)

全体に削平が著しく、遺構の大半は調査区外にあるため、東壁の周溝のみ検出。平面形は方形と考えられるが、柱穴や屋内が¹等は不明。規模は、長さ2.8m、幅0.9m以上を測る。

SC14 (図18)

SC15の一部を切る。削平のため主に建物南半部分の周溝のみ検出。平面形は方形を呈し、柱穴はP1、P2、P3、P4で4本柱の構造である。屋内が¹等は不明。規模は、長さ4.2m、幅1.9m以上を測る。

SC14 出土遺物 (図15)

1 土器器鉢。口縁部は緩やかに内湾し、端部上面がやや窪む。残高5.8cmを測る。胎土:1~4mmの石英粒を含む。焼成:良好。色調:灰色。

SC15 (図18)

SC14、SC16、SD6に切られる。平面形は方形を呈し、柱穴はP1(SK15)とP2(SP260)の2本柱の構造である。屋内が¹は、2段掘り込みの構造を呈し、柱間の中央に位置する。その南東側には、楕円形の屋内が¹がもう一つ存在しており、2基のが¹が存在する状況である。規模は、長さ4.7m、幅4.65m、深さ0.06mを測る。

SC15 出土遺物 (図19)

1 弥生土器器鉢。口縁部はくの字状を呈し、球形の胴部に丸底で、わずかに平底が残る。外面調整はハケメ、口縁部内面がハケメ、胴部内面はナデが施される。口径12.8cm、器高13.5cmを測る。胎土:赤褐色粒や角閃石を少量含み、細砂粒と雲母が多量に含む。焼成:やや不良。色調:黄褐色から灰褐色。2 弥生土器器鉢。口縁部はくの字状で短く。胴部がやや膨らみ、底部は丸みを帯びた尖底気

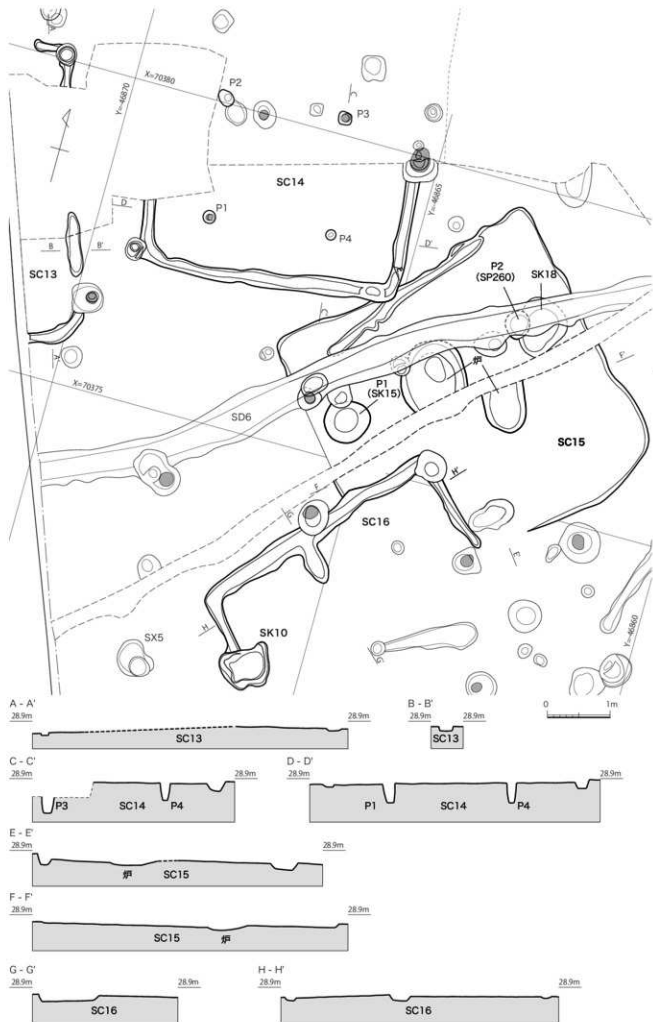


図 18 SC13, SC14, SC15, SC16 平面図、断面図 (1/60)、SK10 平面図 (1/60)

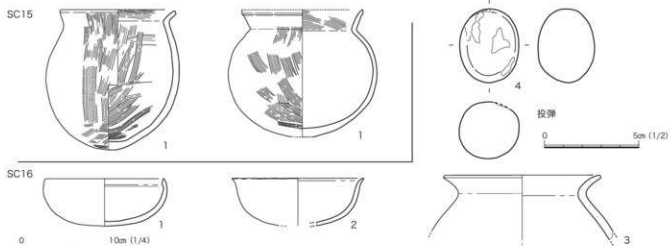


図19 SC15、SC16出土遺物実測図 (SC16-4:1/2) (その他:1/4)

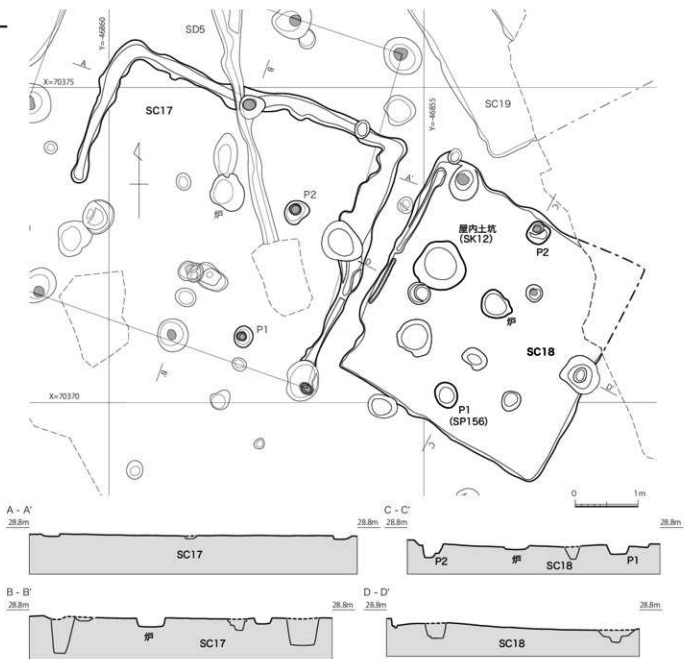


図20 SC17、SC18平面図、断面図 (1/60)

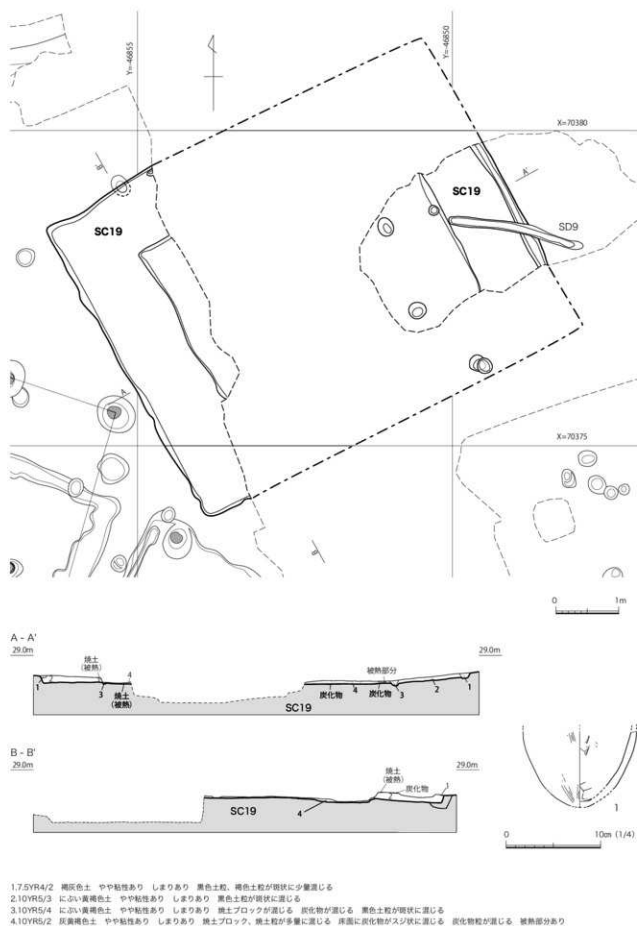


図21 SC19 平面図、土層図(1/60)、出土遺物実測図(1/4)

味となる。調整は、内外両面ともにハケメを施す。口径12.3cm、器高14.9cm、胴部径14.2cmを測る。胎土：赤褐色粒子を微量含む、細砂粒と雲母を多量に含む。焼成：良い。色調：にぶい橙色。

SC16 (図18)

SC15を切るが、全体に削平が著しく、北西部付近の周溝のみ検出。平面形は方形を呈すが、柱穴や屋内が等の存在は不明。規模は、長さ4.25m、幅1.8m以上を測る。

SC16 出土遺物 (図19)

1 土師器杯。口縁部は内湾し、内面のわずかな突出部は稜線をなしており、底部は丸底を呈す。口径12.6cm、器高5.0cmを測る。胎土：2mm以下の石英粒等を含む。焼成は良好。色調：橙色。2 土師器杯。口縁部は外反し、底部が丸底を呈す。口径13.9cm、器高5.0cmを測る。胎土：1mmの白色粒を微量含む。焼成：良好。色調：赤褐色。3 土師器甕。口縁部は大きく外反し、頸部のくびれが強く、肩部から下方は強く張ると想定する。口径16.6cm、器高6.9cmを測る。胎土：1～3mmの乳白色粒を含む。焼成：良好。色調：にぶい黄橙色。4 石製投擲。楕円形の球体に近く、表面は材質上気泡状の孔が多いが、全体に滑らかである。長さ3.9cm、幅3.2cm、厚さ3.0cm、重さ47.3gを測る。

SC17 (図20)

全体に削平が著しく、南壁部分には欠落するが、全体の3/4ほどの周溝部分を検出。平面形は方形を呈す。柱穴はP1とP2の可能性が高く、4本柱の構造と想定さ

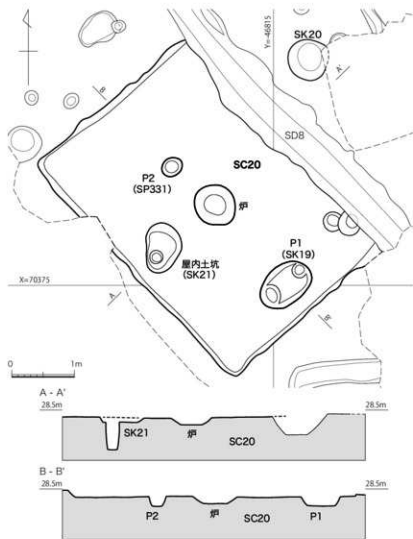


図22 SC20平面図、断面図(1/60)、SK20平面図(1/60)

れる。屋内がは、建物中央の北壁寄りには円形のものか位置する。規模は、長さ4.9m、幅3.8m以上を測る。

SC18 (図20)

平面形は方形を呈し、西壁部分に一部周溝が確認される。柱穴はP1 (SP156) とP2の2本柱の構造を示し、両者間の中央付近には、やや歪な円形の屋内がが位置する。柱穴や屋内がの配置から、SK12は屋内土坑と捉えられよう。規模は、長さ3.8m、幅3.75m、深さ0.1mを測る。

SC19 (図21)

削平が著しく、西壁と東壁の一部のみを検出。焼失家屋の可能性がある。平面形は方形を呈し、東西両壁面と北壁面で、コ字状のベッド状遺構が部分的に確認される。また、東壁面側には周溝も残されているが、柱穴や屋内が等は不明。規模は、長さ6.75m、幅5.3m、深さ0.12mを測る。

SC19 出土遺物 (図21)

1 弥生土器甕。長胴で尖底気味の底部を有す。調整は判然としないが、ハケメとナデが一部に残る。残高8.0cmを測る。胎土：1mm以下の白色、赤色の粒子を含む。

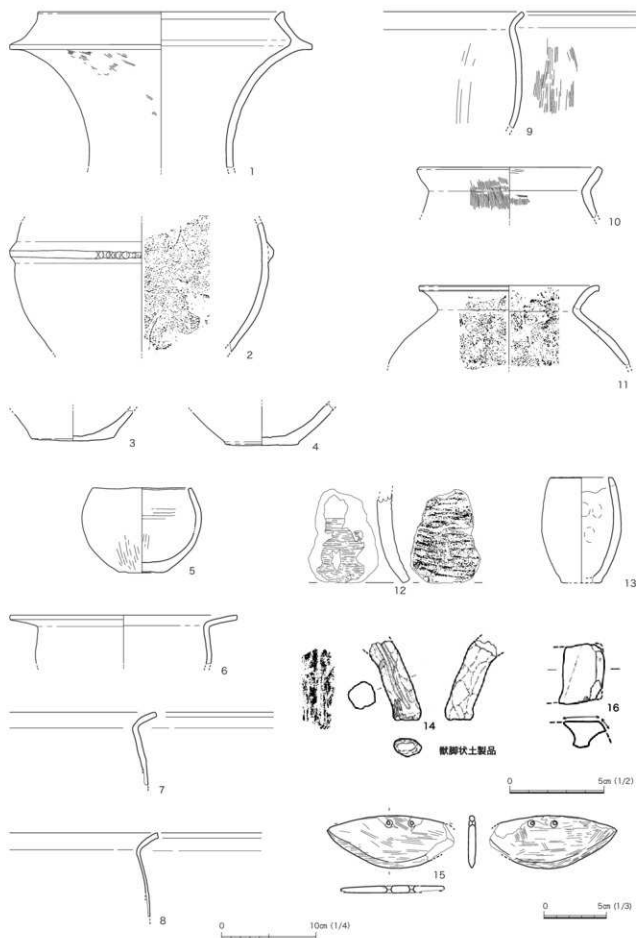


図23 SC20出土遺物実測図(1~13:1/4)(14,15:1/3)(16:1/2)

焼成：良好。色調：にぶい橙色。

SC20 (図22)

東壁部分をSD8が切る。平面形は方形を呈し、柱穴はP1(SK19)とP2(SP331)の2本柱の構造で、両者の中間付近には、円形の屋内かが位置する。その西側に当たるSK21は、壁面より中央寄りではあるが、屋内土坑の可能性がある。規模は、長さ4.6m、幅3.1m、深さ0.11mを測る。

SC20出土遺物 (図23)

1 弥生土器壺。口縁部が内傾する複合口縁で、端部が肥厚する。調整は内外の両面ともにナデを施し、屈折部はユビオサエの痕跡が見られる。口径26.0cm、残高16.5cmを測る。胎土：2mm以下の白色、赤色の砂粒を含む。焼成：良好。色調：にぶい黄橙色。丹塗りの痕跡有り。2 弥生土器壺。頭部は球形を呈し、キザミメを施すコ字状突帯を1条配す。残高13.6cm、胴径26.8cmを測る。胎土：2mm以下の赤色粒を含む。焼成：良好。色調：橙色。3 弥生土器壺。底部はレンズ状の平底を呈す。調整は内面にナデを施す。残高3.2cm、底径8.6cmを測る。胎土：1～2mmの白色粒を含む。焼成：良好。色調：橙色。4 弥生土器壺。底部は平底を呈す。調整は判然としなが、内外両面ともにナデを施す。残高4.4cm底径6.4cmを測る。胎土：1～2mmの白色、黒色、赤色の砂粒を含む。焼成：良好。色調：橙色。5 弥生土器無頸壺。口縁部は内傾し端部がやや角張る。全体が半球形で、底部は平底でわずかに上げ底を呈す。調整は内外の両面ともにヘラミガキを施す。口径10.4cm、器

高9cm、底径5.0cmを測る。胎土：1～2mmの石英粒を含む。焼成：良好。色調：明赤褐色。6 弥生土器壺。口縁部は逆L字状を呈し、頸部の屈折が強い。肩部はわずかに張るが、直線的な胴部とも斜位の細かなハケメを施す。口径24.0cm、残高5.1cmを測る。胎土：1mm以下の赤色、白色粒子を含む。焼成：良好。色調：橙色。7 弥生土器壺。口縁部はくの字状を呈し、頸部の屈折が強い。肩部はわずかに張るが、直線的な胴部となろう。調整は増減のため不明。残高7.7cmを測る。胎土：1mm以下の茶褐色、黒色粒子を含む。焼成：良好。色調：にぶい黄橙色。8 弥生土器壺。口縁部はくの字状を呈し、頸部の屈折が弱く緩やか。肩部はわずかに張るが、直線的な胴部となろう。調整は増減のため不明。残高8.9cmを測る。胎土：1mm以下の白色、灰色粒子を含む。焼成：良好。色調：にぶい橙色。9 弥生土器壺。口縁部は緩やかなくの字状を呈し、全体に長胴気味となろう。調整は外面に縦位のハケメ、内面には縦位のナデを施す。残高12.3cmを測る。胎土：2mmの黒色、白色の砂粒を含む。焼成：良好。色調：にぶい橙色。10 弥生土器壺。口縁部はくの字状を呈す。調整は内外の両面ともに縦位のハケメを施す。口径19.0cm、残高5.4cmを測る。胎土：微砂粒を多量に含む。焼成：やや不良。色調：橙色。弥生土器壺。口縁部はくの字状を呈し、頸部の屈折が強い。肩部はわずかに張るが、直線的な胴部となろう。調整は増減のため不明。残高7.7cmを測る。胎土：1mm以下の茶褐色、黒色粒子を含む。焼成：良好。色調：にぶい黄橙色。

11 弥生土器壺。口縁部はくの字状を呈し、端部は角張る。胴部は球状に張るものと想定される。調整は、内外の両面ともに、斜位のハケメを施す。口径18.8cm、残高8.4cmを測る。胎土：2mmの赤色、黒色粒を含む。焼成：良好。色調：にぶい橙色。12 弥生土器器台。ハの字状に開く脚部で、やや厚手を示す。調整は外面に粗い横位の平行タタキメ、内面に横位のハケメが施される。残高9.4cmを測る。胎土：2mm以上の黒色、白色粒、1mm以下の赤色粒子を含む。焼成：良好。色調：にぶい橙色。13 壺か。口縁部は角張り、全体に厚手で胴部が緩やかに張る。底部は平底を呈すと考えられる。調整は外面に丁寧なナデ、内面上部にユビオサエ、下部には工具による縦位のナデが見受けられる。口径5.8cm、器高11.2cm、底径4.3cmを測る。胎土：1mm以下の白色、赤色粒子を含む。焼成：良好。色調：にぶい橙色。14 獣脚状土製品。仮に、馬脚であれば、右前脚部となろうか、足底部を水平にすると、やや傾斜して蹄や筋肉のほりが表現されているようにも見える。外側面には、複数の沈線状のラインを施した後に、ユビオサエにより丁寧に仕上げ、内側面にも丁寧にユビオサエを施す。また、足底部は蹄を表現するように、周囲は高くなり、中央が少し窪む。残長6.5cm、幅2.1cm、厚さ1.8cmを測る。胎土：1mm以下の黒色、白色、赤色の粒子を含む。焼成：良好。色調：橙色。15 磨製石刃。背面が外湾する杏仁形を呈す。オリブ灰色の砂岩製で、風化した表面は赤褐色をなす。孔は背面に近い上部に位置し、両面から穿つ。長さ10.0cm、幅4.2cm、厚さ0.6cmを測る。16

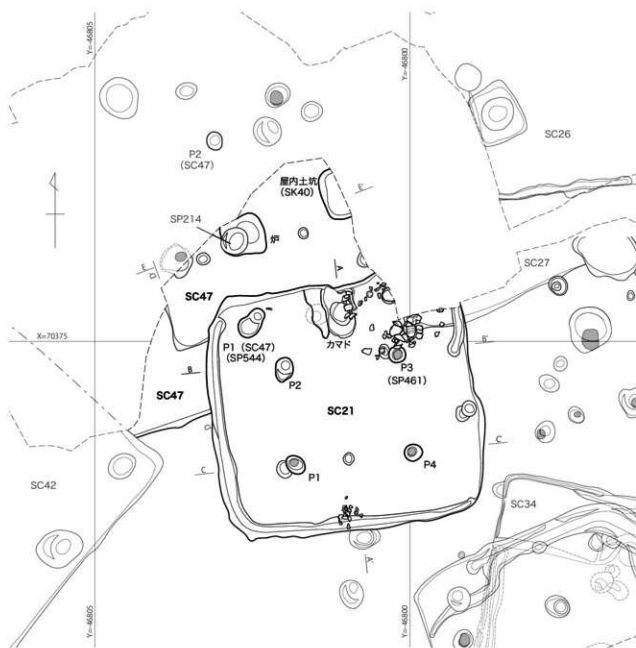
A - A'
28.4mB - B'
28.4mD - D'
28.4mC - C'
28.4mE - E'
28.4m

図24 SC21, SC47 平面図, 断面図 (1/60)

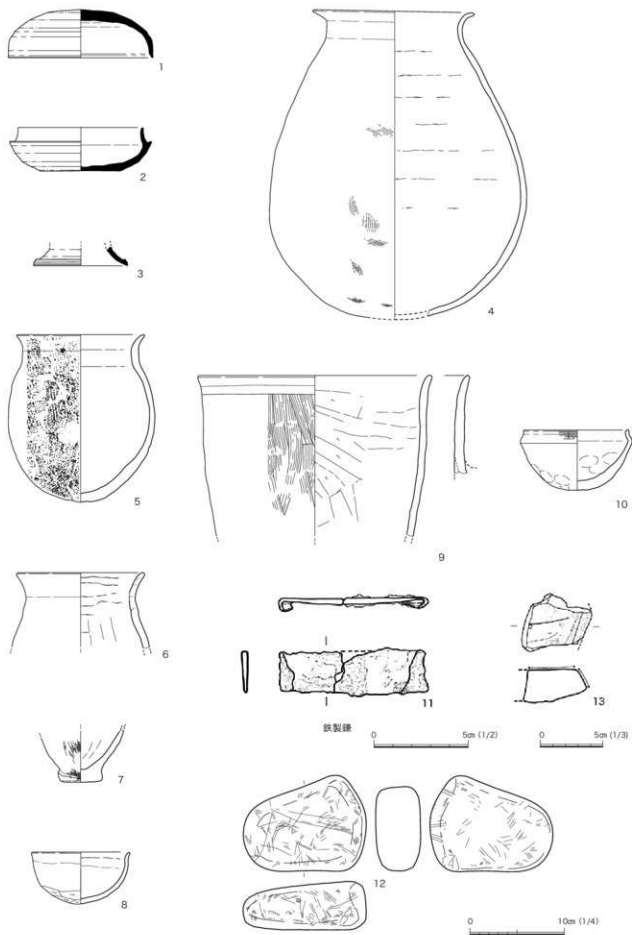


図25 SC21 出土遺物実測図 (11: 1/2) (13: 1/3) (1~10, 12: 1/4)

砥石。破片資料で褐色の泥岩を使用。長さ3.0cm、幅2.2cm、厚さ1.4cmを測る。

SC21 (図24)

北東コーナー部分を削平され、SC47を切る。平面形は、隅丸方形を呈し、北側壁面には右袖部分が失われたカマドが設置されている。柱穴はP1、P2、P3 (SP461)、P4の4本柱構造である。周溝は、西壁から南壁部分と東壁の一部に存在し、カマド右袖部とP3付近に土器が集中する。また、カマド西側より鉄器が検出された。規模は、長さ4.35m、幅3.9m、深さ0.2mを測る。

SC21 出土遺物 (図25)

1 須恵器杯蓋。器高がやや低く、口縁端部は外方にわずかに開き、内面の段は形骸化する。調整は外面上半部に回転ヘラケズリ、口縁部付近を横ナデ、内面は天井部をナデ、それ以外にはヨコナデを施す。口径15.2cm、器高5.1cmを測る。胎土:1~4mmの石英粒、乳白色粒を含む。焼成:良好。色調:灰色。2 須恵器杯身。直立気味の立ち上りは、高さ1.4cmとやや高く、底部は平坦に仕上げている。口縁端部は外方にわずかに開き、内面の段は形骸化する。調整は底部外面付近を回転ヘラケズリ、体部中ほどから上部を横ナデ、内面は底部付近をナデ、それ以外にはヨコナデを施す。口径13.2cm、器高4.6cm、底径8.8cmを測る。胎土:1~3mmの石英粒、乳白色粒を多量に含む。焼成:良好。色調:オリーブ灰色。3 須恵器高杯。脚部は強く外反し、端部は肥厚する。調整は内外の両面ともにヨコナデを施す。高さ1.4cm、

底径9.8cmを測る。胎土:1mmの乳白色粒を少量含む。焼成:良好。色調:灰色。4 土師器甕。口縁部は外反し、胴部は下膨れ状に張って、丸底を呈す。調整は外面にハケメ、内面にはナデを施す。内面の頸部付近から胴部下半にかけての輪積み痕が観察される。口径16.7cm、残高32.3cm、最大径26.4cmを測る。胎土:1~5mmの乳白色粒を多量に含む。焼成:良好。色調:にぶい橙色。5 土師器甕。口縁部は外反し、全体に卵形を呈す。調整は外面に斜位のハケメ、内面にはナデを施す。口径13.4cm、器高17.7cmを測る。胎土:1mmの黒色、赤色の砂粒を含む。焼成:良好。色調:赤褐色。6 土師器甕。口縁部は直口気味に緩やかに開き、なで肩の肩部で全体に長胴型となろう。調整は内外の両面ともにナデが施され、口縁部内面には輪積み痕が観察される。口径13.2cm、残高8.0cmを測る。胎土:1~5mmの白色粒を多量に含む。焼成:良好。色調:橙色。7 弥生土器甕。底部は貼付け状の厚底を呈し、底面がレンズ状に外湾する。調整は外面に縦位のハケメ、内面にはナデを施す。残高5.5cm、底径4.2cmを測る。胎土:1~2mmの赤色、乳白色の砂粒を含む。焼成:良好。色調:にぶい橙色。8 土師器鉢。口縁部が外湾し、丸底の底部はやや尖底状をなす。調整は内外の両面ともにナデを施す。口径10.4cm、器高5.5cmを測る。胎土:1~3mmの長石粒、1mm以下の黒色粒子を含む。焼成:良好。色調:明赤褐色。9 土師器甕。口縁部がわずかに外反し、胴部は直線的である。調整は外面に縦位のハケメ、内面には斜位のユビナデを施し、上半部に輪積み痕が観察される。

口径24.3cm、残高17.0cmを測る。胎土:1mmの石英粒、角閃石を含む。焼成:良好。色調:橙色。10 土師器鉢。口縁部は逆くの字状に屈折し、厚手の丸底を呈す。調整は、口縁部の外面に横位のハケメがされ、体部の内外両面には手摺のようなユビオサエが観察される。口径11.0cm、器高6.35cmを測る。胎土:3mm以下の乳白色粒を多量に含む。焼成:良好。色調:にぶい褐色。11 鉄製袖筒具(手鎌)。薄い鉄板(0.2~0.3cm)の両端を内側に曲げたもので、下部は本体に接し袋状となっており、上部より柄を差し込む形になっている。長さ7.9cm、幅2.1~2.2cm、厚さ0.2~0.3cmを測る。下方の刃部は直線的で、わずかに外湾する。12 磨石。斑晶の部分が残る変成岩製。全体に使用され研磨が進むものの、特に下部先端の使用が著しい。長さ13.0cm、幅10.1cm、厚さ5.1cm、重さ1,100gを測る。13 砥石。褐色の砂岩、もしくはシルト岩で亜角礫を使用か。長さ4.6cm、幅5.5cm、厚さ2.5cmを測る。

SC22 (図26)

全体に削平が著しく、北壁と東壁の一部が周溝のみとなっており、南側半分は調査区外となる。平面形は方形を呈し、SD8に切られ、SC41を切っている。北壁部の周溝内側には、カマドの両袖部の基部が残る。柱穴はP1とP2 (SP262)の可能性が高く、その位置から4本柱構造と想定される。規模は、長さ4.6m以上、幅5.85m、深さ0.25mを測る。

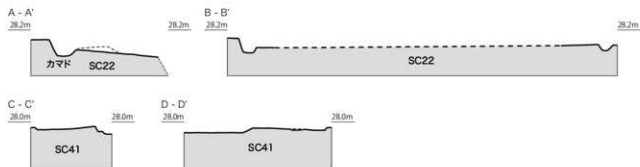
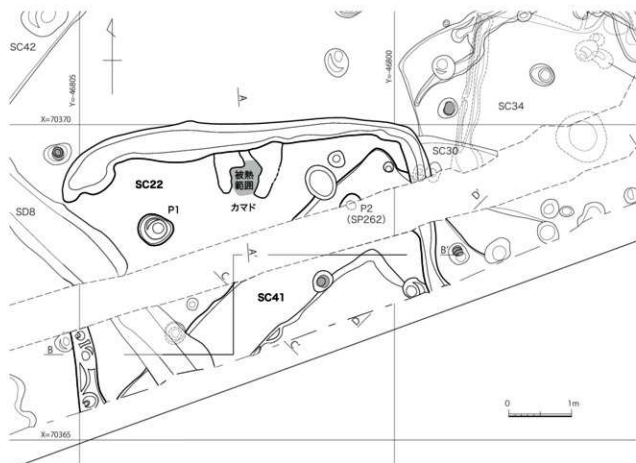


図 26 SC22、SC41 平面図、断面図 (1/60)

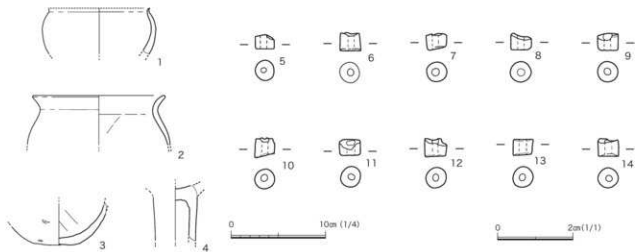
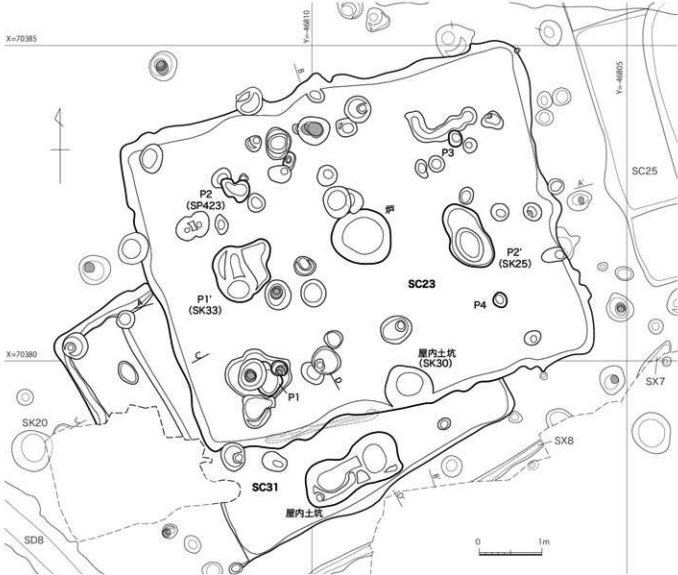


図 27 SC22 出土遺物実測図 (1~4: 1/4) (5~14: 1/1)

A - A'
28.6m

28.6m

C - C'
28.6m

28.6m

B - B'
28.6m

28.6m

D - D'
28.6m

28.6m

- 1.2.5Y5/3 黄褐色土 やや粘性あり しまりあり 褐色土が斑状に混じる 明黄褐色土粒、明赤褐色土粒が少量混じる
- 2.1.0YR3/2 黄褐色土 やや粘性あり しまりあり 褐色土が斑状に混じる 明黄褐色土粒、明赤褐色土粒が混じる
- 3.1.0YR5/3 にぶい黄褐色土 やや粘性あり ややしりあり 褐色土が斑状に混じる 黄褐色土粒が少量混じる
- 4.1.0YR5/3 にぶい黄褐色土 やや粘性あり ややしりあり 褐色土が斑状に混じる 明赤褐色土粒が少量混じる
- 5.1.0YR6/6 明黄褐色土 やや粘性あり しまりあり 褐色土が斑状に混じる 明赤褐色土粒が混じる(ベッド状残存か?)
- 6.1.5YR7/8 黄褐色土 やや粘性あり ややしりあり 褐色土が斑状に混じる にぶい黄褐色土粒が混じる 明赤褐色土粒が混じる
- 7.1.0YR6/8 明黄褐色土 やや粘性あり しまりあり 褐色土が斑状に少量混じる 黒色土粒、明赤褐色土粒が少量混じる
- 8.2.5Y6/4 にぶい黄褐色土 やや粘性あり しまりあり 褐色土が斑状に混じる 黒色土粒、明赤褐色土粒が少量混じる
- 9.2.5Y4/2 緑灰黄褐色土 やや粘性あり しまりあり 褐色土が斑状に多量に混じる 明赤褐色土粒が少量混じる
- 10.2.5Y5/2 緑灰黄褐色土 やや粘性あり ややしりあり 黒色土粒、明赤褐色土粒が少量混じる
- 11.1.0YR3/1 黄褐色土 やや粘性あり ややしりあり 褐色土が斑状に少量混じる 明赤褐色土粒が混じる(SK-33)
- 12.2.5Y5/2 緑灰黄褐色土 やや粘性あり しまりあり 褐色土が斑状に混じる 明黄褐色土粒、明赤褐色土粒が少量混じる(SK-33)
- 13.7.5YR6/3 褐色土 やや粘性あり しまりあり 褐色土が斑状に混じる(SK-33)
- 14.1.0YR5/2 にぶい黄褐色土 やや粘性あり しまりあり 褐色土が斑状に混じる
- 15.2.5Y5/2 緑灰黄褐色土 やや粘性あり ややしりあり 褐色土が斑状に混じる 焼土ブロックが混じる 黄色土粒、明赤褐色土粒が混じる(中央部か?)
- 16.1.0YR3/2 黄褐色土 やや粘性あり ややしりあり 黒色土粒、明赤褐色土粒が混じる(SK-25)
- 17.2.5Y5/2 緑灰黄褐色土 やや粘性あり ややしりあり 褐色土が斑状に混じる 焼土ブロックが少量混じる 明黄褐色土粒が少量混じる
- 18.2.5YR6/3 褐色土 やや粘性あり ややしりあり 褐色土が斑状に混じる 黒色土粒、明赤褐色土粒が混じる(住居跡床か?)
- 19.1.0YR4/3 にぶい黄褐色土 やや粘性あり ややしりあり 褐色土が斑状に混じる 明赤褐色土粒が混じる
- 20.7.5YR6/8 褐色土 やや粘性あり しまりあり 褐色土が斑状に少量混じる 明黄褐色土粒が少量混じる(住居跡床か?)
- 21.2.5Y6/4 にぶい黄褐色土 やや粘性あり しまりあり 褐色土が斑状に少量混じる ϕ 0.5cm ~ 1.0cm 大の明赤褐色土ブロックが混じる 明黄褐色土粒が少量混じる 明赤褐色土粒が多量に混じる
- 22.2.5Y3/2 黄褐色土 やや粘性あり しまりあり ϕ 0.5cm ~ 1.0cm 大の赤褐色土ブロックが混じる 明赤褐色土粒が多量に混じる
- 23.1.0YR6/2 灰黄褐色土 やや粘性あり しまりあり 褐色土が斑状に混じる 明黄褐色土粒が少量混じる
- 24.1.0YR3/3 緑褐色土 やや粘性あり ややしりあり 褐色土が斑状に少量混じる 明赤褐色土粒が少量混じる
- 25.1.0YR7/6 明黄褐色土 やや粘性あり しまりあり 褐色土が斑状に混じる 明赤褐色土粒が少量混じる

図28 SC23, SC31 平面図、土層図、断面図(1/60)

SC22 出土遺物 (図 27)

1 土師器無形壺。口縁部は短く外反し、球形の胴部を呈す。残高 4.8cm、最大径 12.0cm を測る。胎土: 1 ~ 2mm の赤色、乳白色の砂粒を含む。焼成: 良好。色調: 橙色。2 土師器壺。口縁部は強く外反し、肩部がやや張る。調整は内面にナデが観察される。口径 13.8cm、残高 5.2cm を測る。胎土: 1 ~ 3mm の乳白色、白色の砂粒を含む。色調: 橙色。3 土師器壺底部。底部は丸底を基本とし、一部に平坦面が存在する。調整は外面に斜位のハケメを施す。残高 4.2cm を測る。胎土: 1mm の乳白色粒を含む。焼成: 良好。色調: 橙色。4 弥生土器高杯。形状から長脚と考えられる。残高 5.8cm を測る。胎土: 1 ~ 2mm の赤色粒を多量に含む。焼成: 良好。色調: にぶい橙色。5 ~ 14 滑石製白玉。5 長さ 0.4cm、幅 0.5cm、孔径 0.15cm、6 長さ 0.5cm、幅 0.55cm、孔径 0.15cm、7 長さ 0.45cm、幅 0.6cm、孔径 0.2cm、8 長さ 0.45cm、幅 0.55cm、孔径 0.2cm、9 長さ 0.45cm、幅 0.55cm、孔径 0.2cm、10 長さ 0.5cm、幅 0.55cm、孔径 0.2cm、11 長さ 0.4cm、幅 0.6cm、孔径 0.15cm、12 長さ 0.45cm、幅 0.55cm、孔径 0.15cm、13 長さ 0.4cm、幅 0.55cm、孔径 0.2cm、14 長さ 0.5cm、幅 0.55cm、孔径 0.15cm。

SC23 (図 28)

SC31 を大きく切る。平面形は方形を呈し、床面には多くのピットが散在する。柱穴は P1、P2 (SP423)、P3、P4 の 4 本柱の構造、あるいは、P1' (SK33)、

P2' (SK25) を柱穴と考えるなら 2 本柱構造の可能性もある。中央には円形の屋内が位置し、南壁面中央には屋内土坑 (SK30) が設置されている。規模は、長さ 4.5 m、幅 5.75 m、深さ 0.25 m を測る。

SC23 出土遺物 (図 29)

1 弥生土器壺。胴部に 1 条の薄い方形突帯を配し、キザミメを入れる。残高 4.0cm を測る。胎土: 1 ~ 3mm の黒褐色粒、石英粒を含む砂粒と雲母の微粒子を含む。焼成: 良好。色調: 橙色。2 弥生

土器高杯。脚部は長脚である。調整は外面に縦位のミガキ、内面にはナデが施される。残高 12.3cm を測る。胎土: 1mm 以下の白色、赤色粒子を含む。焼成: 良好。色調: 明赤褐色。3 弥生土器器台。脚部はラッパ状に大きく開く。調整は外面にハケメ、内面にはユビナデ、ユビオサエが施される。残高 11.3cm を測る。胎土: 2 ~ 3mm の白色、赤褐色砂粒を多量に含む。焼成: 良好。色調: 明褐色。4 弥生土器器台。受部は短くラッパ状に大きく開く。調整は外面に縦位のハケメ、内面にはユビナ

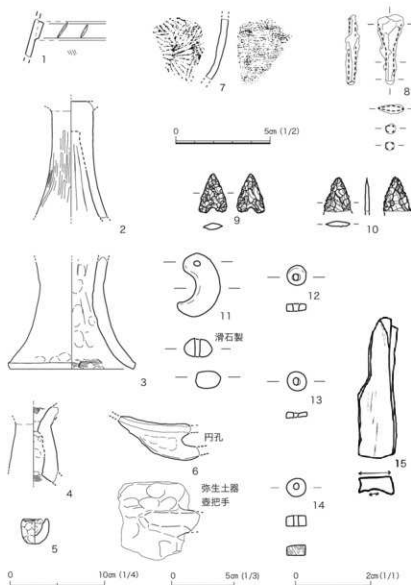


図 29 SC23 出土遺物実測図
(1 ~ 4、6: 1/4) (5: 1/3) (7 ~ 9、14: 1/2) (10 ~ 13: 1/1)

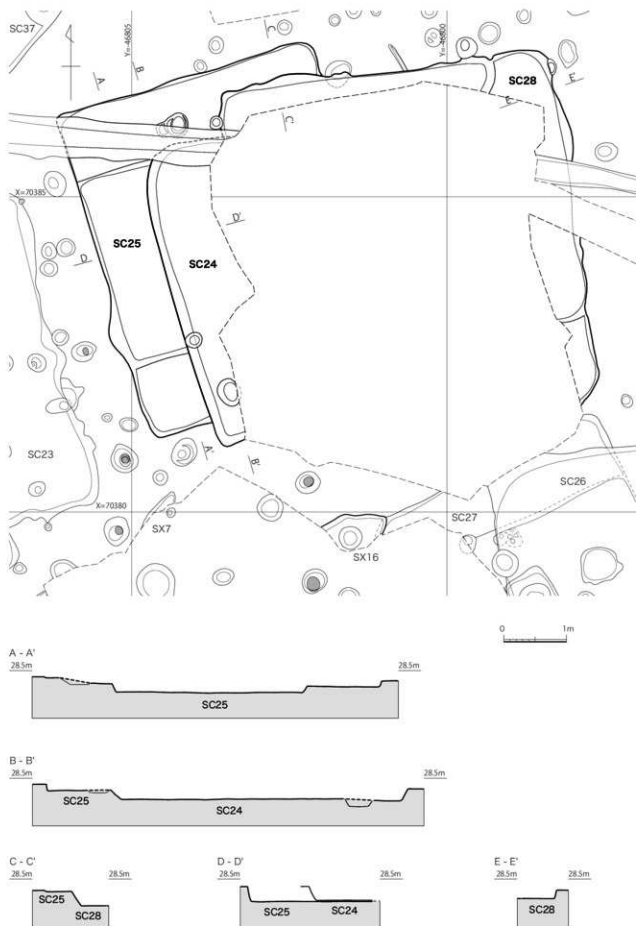


図30 SC24, SC25, SC28平面図、断面図(1/60), SX16平面図(1/60)

デ、ユビオサエが施される。残高7.8cmを測る。胎土:1~3mmの白色、黒色砂粒を含む。焼成:良好。色調:にぶい橙色。5 弥生土器手捏鉢。調整は全体にユビナデ、ユビオサエが施される。口径2.4cm、器高2.6cm、底径1.3cmを測る。胎土:1~2mmの白色、黒色の砂粒を含む。焼成:良好。色調:にぶい橙色。6 弥生土器壺の把手か。中央に1つの円孔を穿った、横長の把手を肩部付近に貼付したもので、器体に一対を単位として取り付けたものと考えられる。時間的には弥生時代後期末頃に属すもので、朝鮮半島系土器を模倣したものではないか。調整は外面にユビオサエ、内面の上部には4mm幅の粗いハケメ状の横線が観察されるが、下方の把手部内面付近はナデにより消されている。残高6.2cmを測る。胎土:1mmの石英粒を含む。焼成:不良。色調:橙色。7 須恵器甕。調整は外面にハケメ状の細い平行タタキメが施され、内面には菊花状の当具痕が観察される。なお、内面の当具痕は車輪文の一種と考えられるが、菊花状で珍しい例であろう。残高7.2cmを測る。8 刀子が鉄鍔。長さ3.7cm、幅1.4cm、厚さ0.5~0.8cmを測る。9 打製石鏃。黒曜石製で無茎。長さ2.03cm、幅1.5cm、厚さ0.4cmを測る。10 打製石鏃。黒曜石製で両面に素材面を残す。脚部は欠損。長さ1.85cm、幅1.4cm、厚さ2.0cmを測る。11 滑石製勾玉。形状はややコノ字状に近く、孔は両側から穿つ。内部に黒色の斑晶状のものが含まれており、粗悪気味の素材を使用する。長さ1.52cm、幅1.1cm、厚さ0.6cm、重さ1.2gを測る。12~14 滑石製白玉。12 長さ0.5cm、幅0.6cm、厚

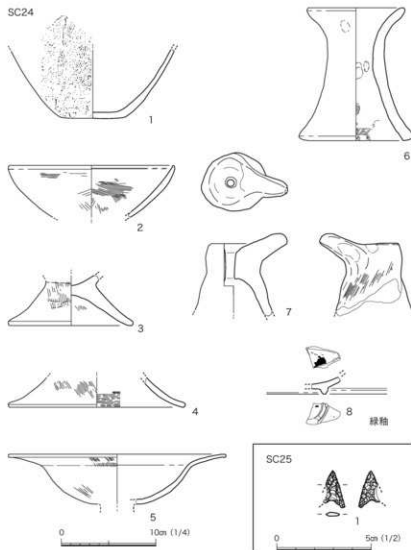


図31 SC24、SC25 出土遺物実測図 (SC24:1~8:1/4) (SC25:1:1/2)

さ0.17cm、13長さ0.5cm、幅0.5cm、厚さ0.18cm、14 滑石製白玉。径0.49cm、厚さ0.33cm、孔径0.18cmを測る。15 砥石。破片資料で褐灰色の泥岩を使用。長さ10.4cm、幅1.9cm、厚さ1.0cmを測る。

SC24 (図30)

攪乱によって遺構の大半が削平され、西壁部のみ検出。SC25を大きく切るが、SC28との前後関係は不明。平面形は方形と考えられるが、柱穴や屋内が等是不明。規模は、長さ4.7m以上、幅0.5m以上、深さ0.25mを測る。

SC24 出土遺物 (図31)

1 弥生土器甕。底部は広く少しレンズ状を呈す。調整は外面にナデ、内面にはハケメを施す。残高7.1cm、底径6.7cmを測る。胎土:3mm以下の砂粒を含む。焼成:良好。色調:黄褐色。2 弥生土器鉢。口縁部は大きく開き、端部が強いナデにより断面三角形形状を呈す。調整は内外の両面ともに横位のハケメを施す。口径17.2cm、残高5.5cmを測る。胎土:2mm以下の黒色、茶色、白色の粒を含む。焼成:良好。色調:にぶい橙色。3 弥生土器脚付鉢。裾広がりの短脚で、端部を丸く納める。調整は

内外の両面ともにハケメの後にナデを施す。残高5.3cm、底径13.0cmを測る。胎土:1mm以下の石英や黒色の粒子を含む。焼成:良好。色調:にぶい橙色。4 弥生土器高杯。外方に強く開く脚部で、端部が少し屈折する。調整は外面にハケメ、内面には横位のハケメとユビオサエが施される。残高3.1cm、底径18.3cmを測る。胎土:3mm以下の砂粒を含む。焼成:良好。色調:にぶい橙色。5 弥生土器高杯。口縁は大きく外反し、体部が半球状を呈す。調整は外面にハケメ、内面にはナデを施す。口径22.8cm、残高5.0cmを測る。胎土:1~3mmの黒色、赤色の砂粒を含む。焼成:良好。色調:橙色。6 弥生土器器台。受部は外反し端部を丸く納め、脚部は緩やかに外反して端部は方形状を呈す。調整は内外の両面ともにユビオサエとナデを施し、脚部下方の内面には横位のハケメが見受けられる。受部径10.2cm、器高14.1cm、底径12.2cmを測る。胎土:1mm以下の黒色、茶褐色の粒子を含む。焼成:良好。色調:黄橙色。7 弥生土器支脚(杵形)。受部は嘴状を呈し、中央に円形孔を1孔穿つ。調整は外面にハケメ、内面にはナデを施す。残高8.7cmを測る。胎土:1mm以下の黒色、白色の粒子を含む。焼成:良好。色調:にぶい橙色。8 緑釉陶器椀。混入資料。高台付で内面と底面の一部に軸が残る。残高1.8cmを測る。

SC25 (図30)

SC24とSC28に大きく切られる。平面形は方形と考えられ、北壁と南壁間にはそれぞれベッド状遺構が設置される。柱穴やガサ跡等

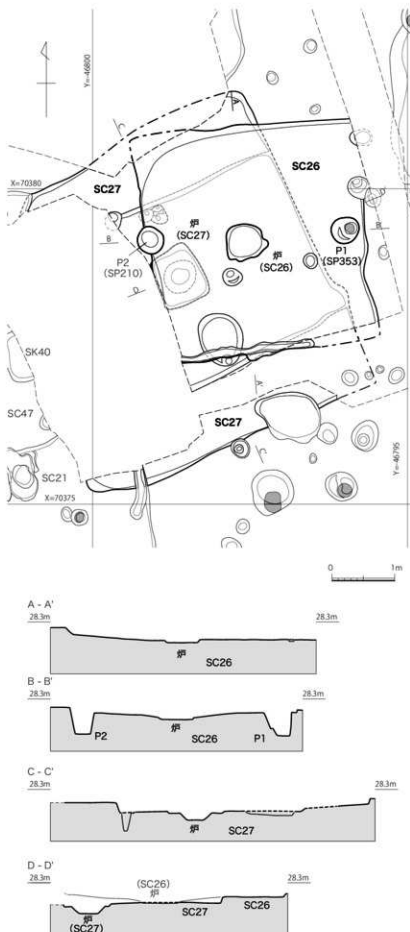


図32 SC26、SC27平面図、断面図 (1/60)

は不明。長さ4.25m、幅5.35m、深さ0.25mを測る。

SC25 出土遺物 (図 31)

1 打製石鏃。黒曜石製で無茎。長さ1.95cm、幅1.1cmを測る。

SC26 (図 32)

SC27を大きく切る。平面形は方形を呈し、柱穴はP1 (SP353)、P2 (SP210)の可能性が考えられ、2本柱構造と想定される。両柱間の中央付近には、円形の屋内部が位置し、両柱と東西両壁の位置から推定すると、建物内の両脇にベッド状遺構が存在した可能性が高い。特に、P2が壁面に食い込む状況は、ベッド状遺構を想定したSC4例と同様と考えられる。規模は、長さ3.6m、幅3.45m、深さ0.19mを測る。

SC26 出土遺物 (図 33)

1 弥生土器甕。口縁部はくの字状を呈し、端部は沈線状を呈して窪む。胴部は長胴で、底部は尖底状を呈すが一部レンズ状の平坦面をなす。調整は内外の両面ともにハケメを施す。口径17.4cm、器高24.3cm、底径2.6cmを測る。胎土:2mmの白色粒を含む。焼成:良好。色調:にぶい橙色。2 弥生土器甕。口縁部は大きく外反し、頸部に1条の三角突帯を配す。調整は内外の両面ともにナデを施す。残高8.9cmを測る。胎土:2mm以下の石英、赤色の粒を多量に含む。焼成:良い。色調:にぶい橙色。3 弥生土器壺か。底部はレンズ状の平底を呈す。調整は外面に縦位のハケメ、内面にはナデが施される。胎土:2mm以下の白色粒を多量に含む。焼成:良好。色調:赤色。4 弥生土器脚付鉢。脚部は

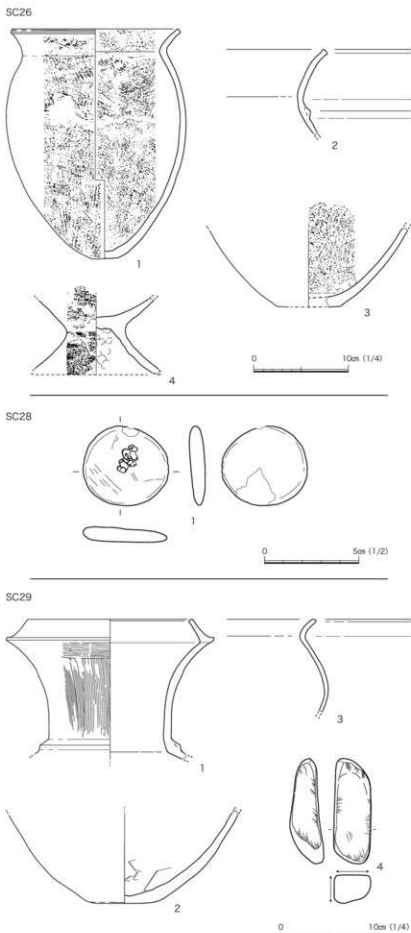
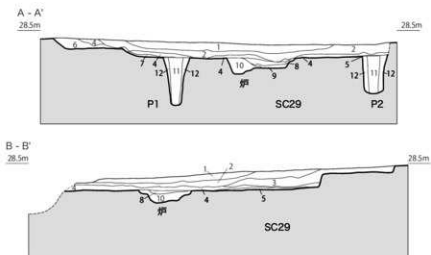
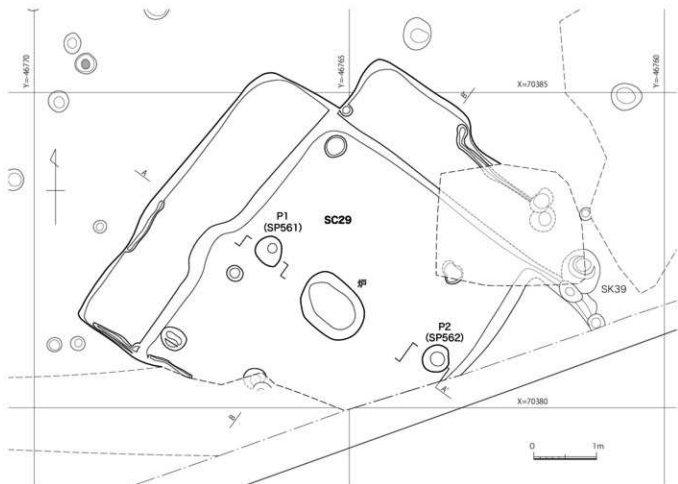


図 33 SC26、SC28、SC29 出土遺物実測図 (1/4) (SC28のみ:1/2)



- 1.2.5Y6/4 ぬい黄色土 やや粘性あり ややしまりあり 褐色土が斑状に混じる ϕ 0.5cm ~ 1.0cm 大の礫が少量混じる 焼土粒、明黄褐色土粒、黒色土粒が少量混じる
- 2.2.5Y5/4 黄褐色土 やや粘性あり しまりあり 褐色土が斑状に混じる ϕ 0.5cm ~ 1.0cm 大の礫が少量混じる 焼土ブロック、焼土粒が少量混じる
- 灰化物、黄褐色土粒が少量混じる
- 3.10Y5/4 にい黄褐色土 やや粘性あり ややしまりあり 褐色土が斑状に混じる 明赤褐色土粒、明黄褐色土粒、黒色土粒が少量混じる
- 4.10YR5/3 にい黄褐色土 やや粘性あり しまりあり 褐色土が斑状に混じる 焼土ブロック、焼土粒が多量に混じる 灰化物が混じる 明黄褐色土粒が混じる
- 5.7.5YR7/8 黄褐色土 やや粘性あり しまりあり 褐灰色土が混じる
- 6.2.5Y6/4 にい黄褐色土 やや粘性あり ややしまりあり 褐色土が斑状に混じる 黒色土粒が少量混じる
- 7.2.5Y7/5 明黄褐色土 やや粘性あり しまりあり 褐色土が斑状に少量混じる 黒色土粒が少量混じる
- 8.7.5YR2/1 黒色土 やや粘性あり ややしまりあり 焼土ブロック、焼土粒が混じる 灰化物が多量に混じる
- 9.5YR5/1 褐灰色土 粘性あり しまりあり 焼土ブロック、焼土粒、灰化物が混じる
- 10.2.5Y7/2 灰黄色土 粘性あり しまりあり ϕ 0.5cm ~ 2.0cm 大の礫が混じる 灰化物が少量混じる 明黄褐色土粒が混じる
- 11.1.0YR4/4 褐色土 粘性あり しまりあり 焼土粒、灰化物が少量混じる 明黄褐色土粒が混じる (柱状)
- 12.1.0YR5/2 灰黄色土 やや粘性あり しまりあり ϕ 0.5cm ~ 2.0cm 大の礫が混じる 明黄褐色土粒が混じる 明黄褐色土粒、黒色土粒が混じる (地山の埋土が混じる)

図 34 SC29 平面図、土層図 (1/60)

台形状を呈して大きく広がり、上部はやや細身の胴部と考えられる。調整は外面にハケメとユビオサエ、内面にはユビオサエとナデが施される。残高 8.2cm、底径 13.5cm を測る。胎土:3mm 以下の白色粒、石英粒を多量に含む。焼成:良好。色調:にぶい赤褐色。

SC27 (図 32)

全体に削平が著しく、北壁の一部と南壁部分が概ね確認される程度で、SC26 に大きく切られる。柱穴は不明であるが、中央には方形を呈した 2 段掘り込みの屋内が設置される。平面形は方形と考えられ、北壁と南壁側にはそれぞれベッド状遺構が設置されている。規模は、長さ 5 m、幅 4.9 m、深さ 0.15 m を測る。

SC28 (図 30)

全体に削平が著しく、北壁と東壁部分のみを検出。SC25 を大きく切っていて、柱穴や屋内等は不明である。南北両壁面には、一部ベッド状遺構の痕跡が見られる。規模は、長さ 5.72 m、幅 5.3 m、深さ 0.15 m を測る。

SC28 出土遺物 (図 33)

1 円盤状石製品。緑色片岩系の扁平な円盤を使用。長さ 4.2cm、幅 4.5cm、厚さ 0.75cm を測る。

SC29 (図 34)

南側を大きく削平される。平面形は方形で、柱穴は P1 (SP561) と P2 (SP562) であり、2 本柱の構造である。中央には楕円形の屋内が位置し、東西の両壁面にはベッド状遺構が設置されてお

り、一部には周溝も確認される。また、北東側に突出する部分は、断面で確認すると切り合いがなく、堅穴建物と一連のものと考えられることから、ベッド状遺構と判断される。この突出部を持つような形状は、あまり見受けられず、建物の重複も見受けられないことから、建物の一部を拡張した上でベッド状遺構を設けたとも考えられる。規模は、長さ 6.13 m、幅 6.7 以上、深さ 0.25 m を測る。

SC29 出土遺物 (図 33)

1 弥生土器壺。口縁端部は内傾しており、複合口縁を呈す。頸部には 1 条の三角突帯を配す。調整は外面にハケメを施すが、内面は磨滅のため不明である。口径 17.4cm、残高 14.8cm を測る。胎土:0.1 ~ 0.3cm の白色、赤色粒を含む。焼成:良好。色調:橙褐色。2 弥生土器壺。底部はレンズ状を呈す。調整は内外の両面ともに磨滅しており不明である。残高 9.6cm、底径 7.3cm を測る。胎土:0.4cm 以下の砂粒を含む。焼成:良好。色調:明褐色。3 弥生土器甕。口縁部はく字状を呈し、胴部が弓状に張り出すと想定される。内外の両面ともに磨滅が進む。残高 9.7cm を測る。胎土:1 ~ 3mm の白色粒を多量に含む。焼成:良好。色調:橙褐色。4 砥石。全体に薄い浅黄色できめ細かな材質で、1.5 ~ 2cm 間隔で明緑灰色の極めて薄い層がラミナ状に入る。砥石面は 2 面、それ以外は敲打痕が認められる。長さ 11.1cm、幅 3.9cm、厚さ 0.75cm を測る。

SC30 (図 35)

全体に削平と切り合いが著し

く、北壁の一部のみ検出された。SC34 を切るが、SC22 に切られており、柱穴や屋内が不明である。長さ 1.3 m 以上、深さ 0.15 m を測る。

SC31 (図 28)

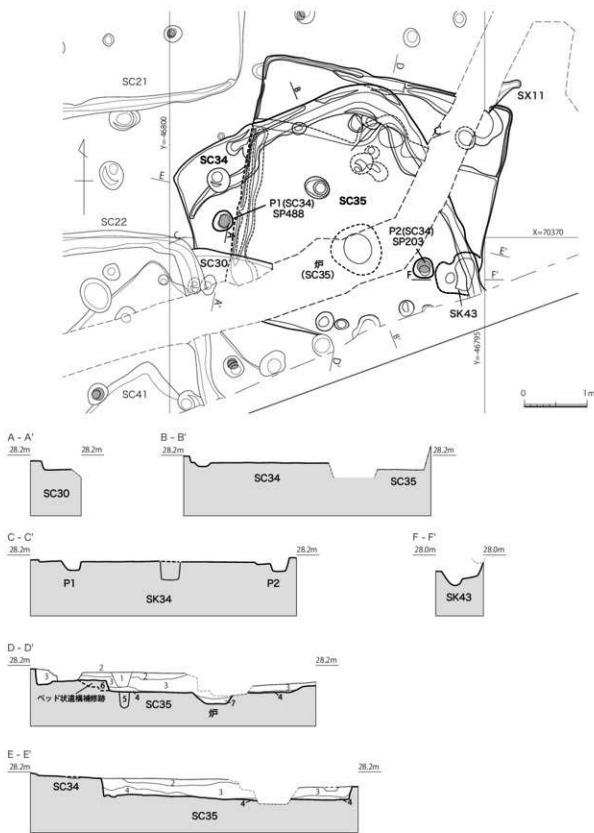
全体に SC23 に大きく切られ、南西コーナー部分は削平される。平面形は方形を呈し、西壁側にベッド状遺構が設置される。柱穴は判然としなが、SC23 の P1 に切られる状況で隅丸形状の屋内が存在する。南壁面に接するように隅丸長方形の屋内土坑が位置する。規模は、長さ 5.1 m、幅 4.15 m、深さ 0.22 m を測る。

SC31 出土遺物 (図 37)

1 鉄製品(不明)。長さ 3.45cm、幅 2.6cm、厚さ 1.75cm、主さ 12.9 g を測る。2 磨製石庖丁。外湾刃の半月形で、細身となっている。赤紫色の輝緑凝灰岩製。孔は背面近くに位置し、両面から穿たれるが、孔径、孔間、孔の位置からして、再生品の可能性が高いと考えられる。長さ 10.1cm、幅 3.1cm、厚さ 0.6cm を測る。3 砥石。破片資料で褐灰色の泥岩を使用。長さ 11.0cm、幅 2.9cm、厚さ 2.0cm を測る。

SC32 (図 36)

削平が著しく周溝部のみが残っており、南西コーナー以外は調査区外となる。平面形は隅丸形状と考えられるが、柱穴や炉跡等は不明である。規模は、長さ 3.25 m 以上、幅 0.9 m 以上を測る。



- 1.2.5Y4/6 オリーブ褐色土 粘性ややあり しまりあり ϕ 0.5cm ~ 1.0cm 大の礫が少量混じる 明黄褐色土粒が混じる
 2.2.5Y5/3 黄褐色土 粘性ややあり しまりあり 褐色土が塊状に混じる ϕ 0.5cm ~ 1.5cm 大の礫が混じる 明黄褐色土粒が混じる
 3.2.5Y5/6 黄褐色土 粘性ややあり しまりあり 褐色土が塊状に混じる ϕ 0.5cm ~ 2.0cm 大の礫が混じる 明黄褐色土粒が多量に混じる
 明赤褐色土粒が少量混じる (地山の土を多く含む埋土)
 4.2.5Y6/2 灰黄色土 粘性ややあり しまりあり 褐色土が塊状に混じる ϕ 0.5cm ~ 1.5cm 大の礫が少量混じる 明黄褐色土粒が混じる
 5.10YR3/3 緑褐色土 粘性ややあり しまりあり ϕ 0.5cm ~ 1.0cm 大の礫が少量混じる 明黄褐色土粒が混じる (主柱穴か?)
 6.2.5YR8/4 淡黄色土 粘性ややあり しまりあり 褐色土が塊状に混じる ϕ 0.5cm ~ 2.0cm 大の礫がわずかに混じる 砂礫こくわずかに混じる
 7.10YR3/1 暗赤灰色土 粘性ややあり しまりあり 炭粒多く混じる ϕ 0.5cm ~ 3.0cm 大の礫土塊が混じる (中央炉の埋土)

図 35 SC30, SC34, SC35, SK43 平面図、土層図、断面図(1/60)、SX11 平面図(1/60)

SC33 (図36)

全体の1/2が削平されており、南東コーナー部分を中心に検出。平面形は方形を呈し、東壁側にベッド状遺構が設置される。柱穴はP1 (SP490) と考えられるが、その位置からして、柱の構造は判然としない。床面には、屋内外が存在する。南壁面には、そこに接するように隅丸長方形の屋内土坑 (SK35) が位置する。規模は、長さ5.1m、幅4.15m、深さ0.22mを測る。

SC33 出土遺物 (図37)

1円盤状土製品 (弥生土器)。裏面に炭化物の付着。長さ4.8cm、幅4.8cm、厚さ1.3cmを測る。色調：橙色、胎土：砂粒を微量含む。焼成：良い。2円盤状土製品 (弥生土器)。調整は表面に細かなハケス、内面にはユビオサエを施す。長さ8.5cm、幅7.7、厚さ0.8～1.5cmを測る。色調：にぶい橙色、胎土：細かな砂粒を多く含む。焼成：良い。3磨製石廬丁。長方形を呈す。赤紫色の輝緑凝灰岩製。孔は両面から穿た

れ、背面寄りに位置する。長さ10.1cm、幅3.1cm、厚さ0.6cmを測る。

SC34 (図35)

中央と南壁側は削平され、SC35を大きく切る。平面形は方形を呈し、北壁から東壁にかけて周溝が見られる。柱穴はP1 (SP488)、P2 (SP203) と考えられるが、それらの配置から4本柱の構造と想定される。規模は、長さ3.9m以上、幅4m、深さ0.4mを測る。

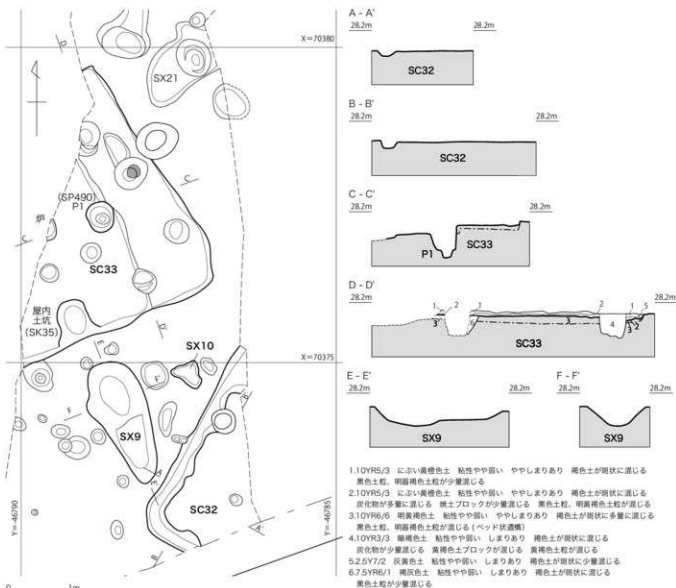


図36 SC32, SC33, SX9 平面図、土層図、断面図 (1/60), SX10 平面図 (1/60)

1. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 粘性やや弱い ややしりあり 褐色土が斑状に混じる 黒色土粒、明褐色土粒が少量混じる
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 粘性やや弱い ややしりあり 褐色土が斑状に混じる 炭化物が多量に混じる 黒土ブロックが少量混じる 黒色土粒、明褐色土粒が混じる
3. 10YR6/6 明黄褐色土 粘性やや弱い ややしりあり 褐色土が斑状に多量に混じる 黒色土粒、明褐色土粒が混じる (ベッド状遺構)
4. 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや弱い しりあり 褐色土が斑状に混じる 炭化物が少量混じる 黄褐色土ブロックが混じる 黄褐色土粒が混じる
5. 2.5Y7/2 灰黄色土 粘性やや弱い しりあり 褐色土が斑状に少量混じる
6. 7.5YR6/1 黄灰色土 粘性やや弱い しりあり 褐色土が斑状に混じる 黒色土粒が少量混じる

SC34 出土遺物 (図 37)

1 土師器鉢。口縁部は短く外反し、底部が丸底を呈す。調整は内外の両面ともにナデを施す。口径 11.8cm、器高 4.4cm を測る。胎土:1mm 以下の白色粒子を含む。焼成:良好。色調:赤褐色。2 土師器器台。脚部は大きく内湾気味に張り出し、受部は小ぶりの鉢に近い。調整は全体にナデを施す。残高 4.7cm を測る。胎土:1mm の白色粒を含む。焼成:良好。色調:明赤褐色。3 滑石製有孔円盤。ほぼ六角形を呈しており、端部を切断した未製品と考えられる。長さ 2.4cm、幅 2.6cm、厚さ 0.3cm を測る。

SC35 (図 35)

SC34 に大きく切られる。北壁付近に周溝とベッド状遺構が存在し、南壁の一部も確認される。平面形は方形を呈し、柱穴は不明だが、南寄りの位置に円形の屋内炉が位置する。長さ 4.22 m、幅 4.05 m、深さ 0.4 m を測る。

SC35 出土遺物 (図 37)

1 弥生土器壺。胴部は球形を呈し、1 条のコ字状突帯を配す。底部が丸底に近いレンズ状を呈す。調整は内外の両面ともにハケメを施す。残高 16.7cm を測る。胎土:1~3mm の黒色、乳白色の粒に、角閃石、石英が混在する砂粒を含む。焼成:良好。色調:にぶい橙色。2 ミニチュア土器。薄手の椀形を呈す。調整はユビナデとユビオサエを施す。口径 7.9cm、器高 3.5cm を測る。胎土:1~2mm の黒色、白色、赤色の砂粒を含む。焼成:良い。色調:赤褐色。3 打製石鏃。黒曜石製。無茎鏃。

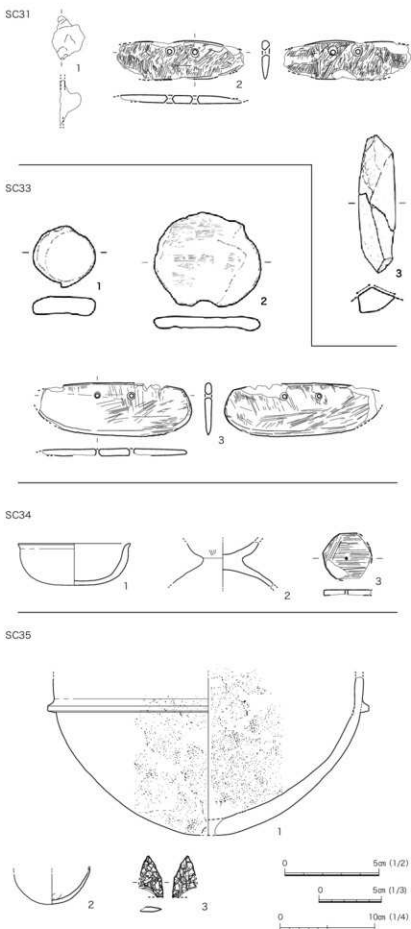


図 37 SC31、SC33、SC34、SC35 出土遺物実測図
(SC34-3、SC35-3:1/2) (SC31、SC33:1/3) (その他:1/4)

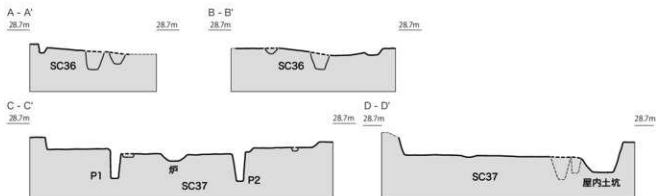
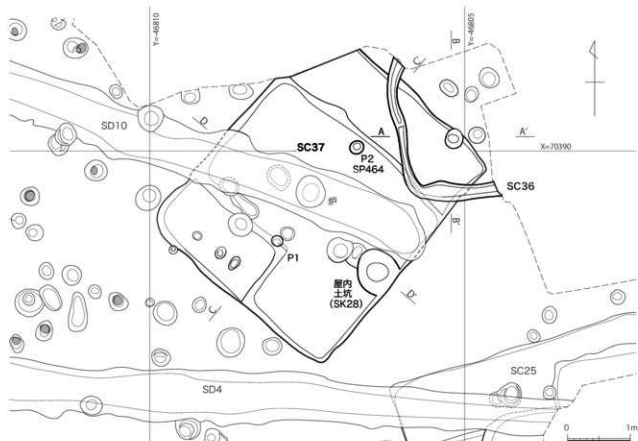


図 38 SC36、SC37 平面図、断面図 (1/60)

長 2.2cm、幅 1.3cm、厚さ 0.3cm を測る。

SC36 (図 38)

SC37 を切る。削平が著しく南西コーナー部分の周溝のみ検出。平面形は方形と考えられるが、柱穴や屋内炉等は不明。長さ 2.3 m 以上、幅 1.5 m 以上、深さ 0.12 m を測る。

SC37 (図 38)

SD10 と SC36 に切れ、北東コーナー部分は削平されている。平面形は方形を呈し、東西の両壁面にベッド状遺構が設置されるが、西壁側は壁長の 1/2 程度と短い。柱穴は P1 と P2 (SP464) の 2 本柱の構造で、両者間に円形の屋内炉が位置する。南側壁面に接する SK28 は、円形の屋内土坑と考えられる。規模は、長さ 4.38 m、幅 3.58 m、深さ 0.2 m

を測る。

SC37 出土遺物 (図 39)

1 弥生土器壺。口縁部は複合口縁で、端部は外湾気味で直立状を呈す。頸部はやや短く、1 条の三角突帯を配し、肩部はなで肩で胴部の張は弱い。調整は内外の両面ともにハケメを施す。口径 21.0cm、残高 21.9cm を測る。胎土:2mm 以上の白色、茶色、黒色の砂粒を含む。焼成:良好。色調:にぶい橙色。2 弥生土器壺。

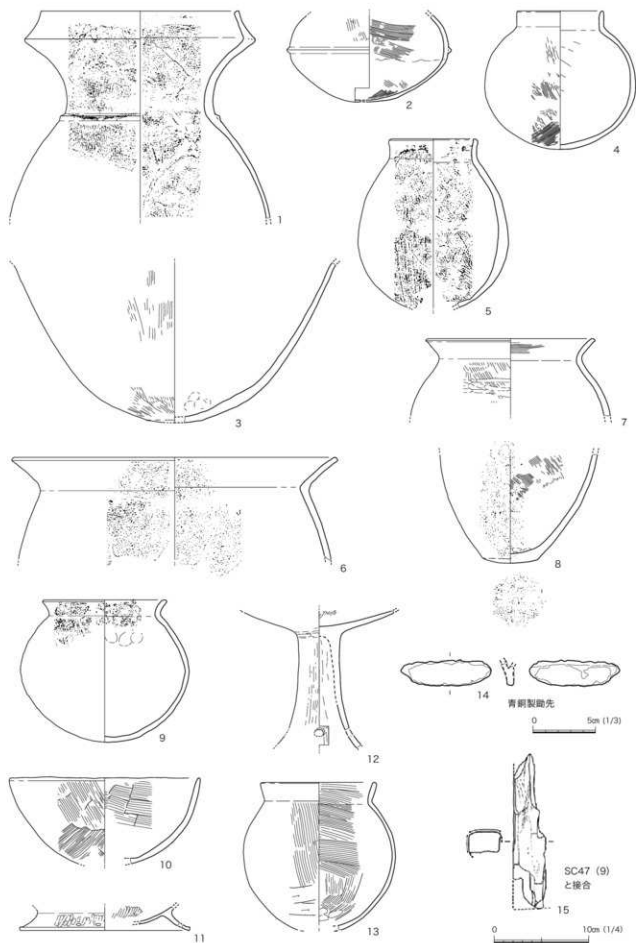
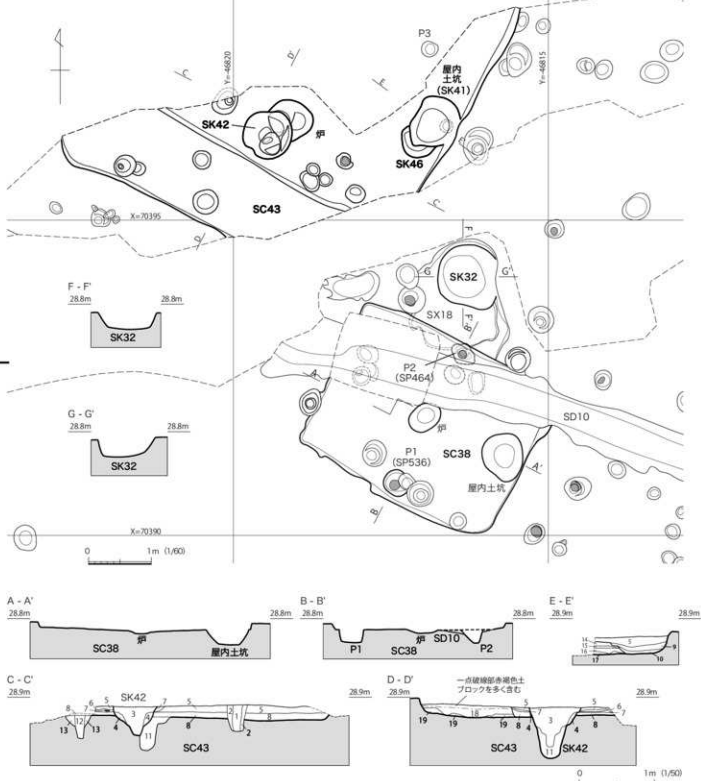


図 39 SC37 出土遺物実測図 (14 : 1/3) (1 ~ 13、15 : 1/4)



- 1.10YR4/3 にぶい黄褐色土 やや粘性あり しまりあり 焼土が混じる 炭化物粒、明黄褐色土粒が少量混じる
- 2.10YR4/4 褐色土 やや粘性あり しまりあり 焼土ブロックが少量混じる 焼土粒が混じる 明黄褐色土粒が混じる
- 3.10YR4/3 にぶい黄褐色土 やや粘性あり しまりあり ϕ 0.5cm~1.0cm 大の礫が混じる 焼土ブロック、焼土粒が混じる 炭化物が混じる 明黄褐色土粒が混じる (SK42 埋土)
- 4.10YR5/3 にぶい黄褐色土 やや粘性あり ややしりあり ϕ 0.5cm~2.0cm 大の礫が少量混じる 焼土ブロック、焼土粒が混じる 炭化物粒が混じる (SK42 埋土)
- 5.10YR4/4 褐色土 やや粘性あり しまりあり ϕ 0.5cm~1.0cm 大の礫が混じる 焼土ブロック、焼土粒が混じる 炭化物粒が混じる (住居埋土)
- 6.10YR5/2 反黄褐色土 やや粘性あり ややしりあり 焼土ブロック、炭化物が少量混じる 焼土粒が混じる 炭化物、明黄褐色土粒が混じる (住居埋土)
- 7.7.5YR3/3 暗褐色土 やや粘性あり ややしりあり 焼土ブロック、焼土粒が混じる 明黄褐色土粒が少量混じる (住居埋土)
- 8.10YR5/4 にぶい黄褐色土 やや粘性あり しまりあり ϕ 0.5cm~1.0cm 大の礫が混じる 焼土ブロック、焼土粒が混じる 炭化物、明黄褐色土粒が混じる (住居埋土)
- 9.10YR4/2 反黄褐色土 やや粘性あり しまりあり ϕ 0.5cm~1.0cm 大の礫が少量混じる 焼土ブロック、焼土粒が少量混じる 炭化物粒が混じる (SK41 埋土)
- 10.2.5YR6/8 褐色土 やや粘性あり しまりあり 反黄褐色土が混じる 反黄褐色土の中に炭化物、焼土ブロックが少量混じる (SK41 埋土)
- 11.2.5YR6/2 反黄褐色土 やや粘性あり しまりあり 明黄褐色土粒、明赤褐色土粒が混じる
- 12.10YR5/4 にぶい黄褐色土 やや粘性あり しまりあり 黄色土粒が少量混じる
- 13.2.5YR6/2 反黄褐色土 やや粘性あり ややしりあり ϕ 0.5cm~1.0cm 大の礫が少量混じる 明黄褐色土粒、明赤褐色土粒が混じる (ピット埋土)
- 14.1.0YR7/4 にぶい黄褐色土 やや粘性あり しまりあり 明赤褐色土粒が混じる 焼土粒が混じる (埴り床)
- 15.1.0YR7/4 にぶい黄褐色土 やや粘性あり しまりあり 明赤褐色土粒が混じる (埴り床)
- 16.1.0YR5/4 にぶい黄褐色土 やや粘性あり しまりあり 明赤褐色土粒が少量混じる 明黄褐色土粒、明赤褐色土粒が混じる (埴り床)
- 17.5YR6/6 褐色土 粘性あり しまりあり 明赤褐色土粒が混じる (埴り床)
- 18.1.0YR5/3 にぶい黄褐色土 やや粘性あり ややしりあり ϕ 0.5cm~1.0cm 大の礫が少量混じる 明赤褐色土ブロックが混じる (特に埋土の上部に多く含む) 炭化物が少量混じる 明黄褐色土粒、明赤褐色土粒が混じる (ピット状遺構)
- 19.5YR6/8 褐色土 粘性あり しまりあり 明黄褐色土粒、明赤褐色土粒が少量混じる (ピット状遺構)

図40 SC38、SC43、SK32、SK42 平面図、断面図 (1/60)、土層図 (1/50)、SK46 平面図 (1/60)

底部は尖底気味の丸底で穿孔の可能性がある。胴部は扁球形を呈し、最大径の位置に1条の三角突帯を配す。調整は風化のため判然としないが外面上半にミガキ、内面には横位のハケメが観察される。残高9.2cmを測る。胎土:4mmの石英と1mm以下の白色、赤色、黒色の粒子を含む。焼成:良好。色調:にぶい橙色。3弥生土器壺。底部は丸底を基本とするが、底面中央がわずかにレンズ状の平底を呈し、胴部下半は長胴の様相を示す。調整は外面に縦位のハケメ、内面には横位のハケメが施される。残高16.7cm、底径5.8cmを測る。胎土:1~4mmの白色、赤色の砂粒を多量に含む。焼成:良好。色調:にぶい黄橙色。4弥生土器直口壺。口縁部は短く直立し、胴部は球形で底部は丸底を呈す。調整は外面に縦位のハケメとナデを施し、内面には多方向にナデを施す。口径9.0cm、器高14.6cmを測る。胎土:1~3mmの白色、赤色の砂粒を含む。焼成:良好。色調:にぶい黄橙色。5弥生土器直口壺。胴部が楕円形状を呈し、底部は丸底と考えられる。調整は内外の両面に斜位のハケメを施し、後にナデを加える。6弥生土器甕。口縁部はくの字状を呈す。調整は外面に縦位のハケメ、内面には横位のハケメを施す。口径33.8cm、残高10.8cmを測る。胎土:1~1.5mmの砂粒、0.5mm以下の角閃石を含む。焼成:良好。色調:にぶい橙色。7弥生土器甕。口縁部はくの字状を呈し、頸部が緩やかに屈折する。胴部は球形に近いと考えられる。調整は外面にハケメと横位のミガキ、内面にはナデが施される。口径17.2cm、残高8.1cmを測る。胎土:1mmの黒色、赤色の粒子

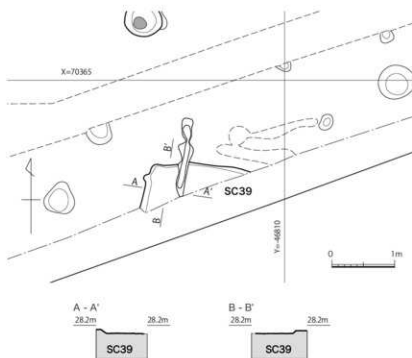


図41 SC39 平面図、断面図 (1/60)

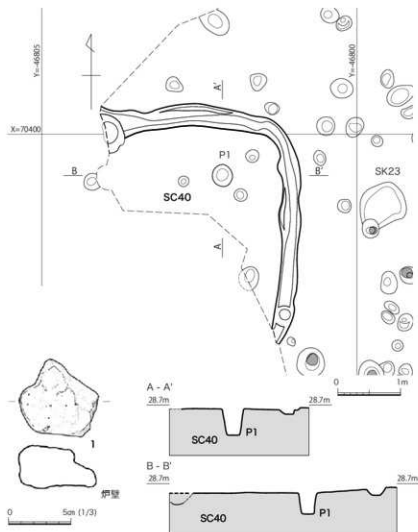


図42 SC40 平面図、断面図 (1/60)、出土遺物 (1/3)

を含む。焼成：良好。色調：橙色。8 弥生土器鉢。胴部は張が弱く、底部がレンズ状の平底を呈す。調整は外面に縦位のハケメ、内面にはハケメの後ナデを施す。残高 11.5cm、底径 5.9cm を測る。9 弥生土器鉢。口縁部は外反し、頸部が丸く緩やかに屈折する。胴部は球形で丸底を呈す。調整は外面に縦位のハケメ、内面にはハケメやユビオサエが施される。口径 12.8cm、器高 15.0cm を測る。胎土：1mm 以下の白色、黒色、赤色等の粒子を含む。焼成：良好。色調：橙色。10 弥生土器鉢。口縁部は開き気味で、底部は丸底を呈す。調整は内外の両面にハケメを施す。口径 20.0cm、器高 9.0cm を測る。胎土：1～3mm の白色粒を多量に含む。焼成：良好。色調：灰褐色を呈す。11 弥生土器脚付鉢。脚部は短脚で大きく開き、円孔 2 孔を穿つ。調整は内外の両面ともにミガキを施す。残高 2.5cm、底径 18.0cm を測る。胎土：2mm 以下の乳白色粒を含む。焼成：良好。色調：橙色。12 弥生土器高杯。長脚で裾部に円孔を穿つ。調整は外面にミガキを施し、内面にはシボリの後ナデを加える。残高 14.4cm を測る。胎土：1～2mm の乳白色粒を少量含む。焼成：良好。色調：ぶい橙色。残高 14.4cm を測る。13 土師器甕。口縁部は直立気味に立ち上り、球形の胴部に丸底と考えられる。調整は内外両面ともにハケメが施される。口径 11.8cm、残高 15.7cm を測る。胎土：1～1.5mm の金雲母、赤色、白色、黒色の砂粒を含む。焼成：良好。色調：ぶい黄橙色。14 青銅製鋤先。全体が緑青に覆われており、本体中央付近の刃部に近い破片。断面形には V 字状の剣込が残る。

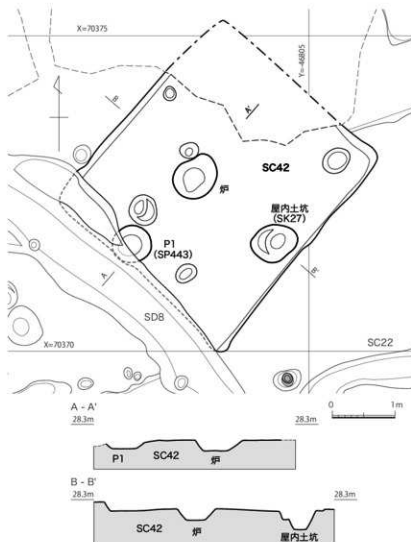


図 43 SC42 平面図、断面図 (1/60)

残長 1.3cm、残幅 4.8cm、厚さ 0.8cm を測る。15 砥石。破片資料で褐色の泥岩を使用。表面に多くのひび割れが生じており、その部分が割れたものである。長さ 16.5cm、幅 3.4cm、厚さ 2.1cm を測る。

SC38 (図 40)

SD10 に切られる。平面形は方形を呈し、柱穴は P1 (SP536) と P2 (SP464) の 2 本柱の構造で、両者間に楕円形の屋内炉が位置する。東壁に接して歪ながら、円形を呈す屋内土坑が存在する。なお、柱穴、炉跡、屋内土坑の位置関係に対し、東西方向に長い

形状からして、南北の両壁側にそれぞれベッド状遺構の存在を想定するが、削平のため消滅したと考える。規模は、長さ 3.38 m、幅 2.75 m、深さ 0.14 m を測る。

SC39 (図 41)

北西コーナー部分のみ検出。平面形は方形を呈すと考えられる。柱穴や屋内炉等は不明。規模は、長さ 1.6 m 以上、幅 0.8 m 以上、深さ 0.1 m を測る。

SC40 (図 42)

削平が著しく、北東コーナー部分を中心とする周溝部のみ検出。

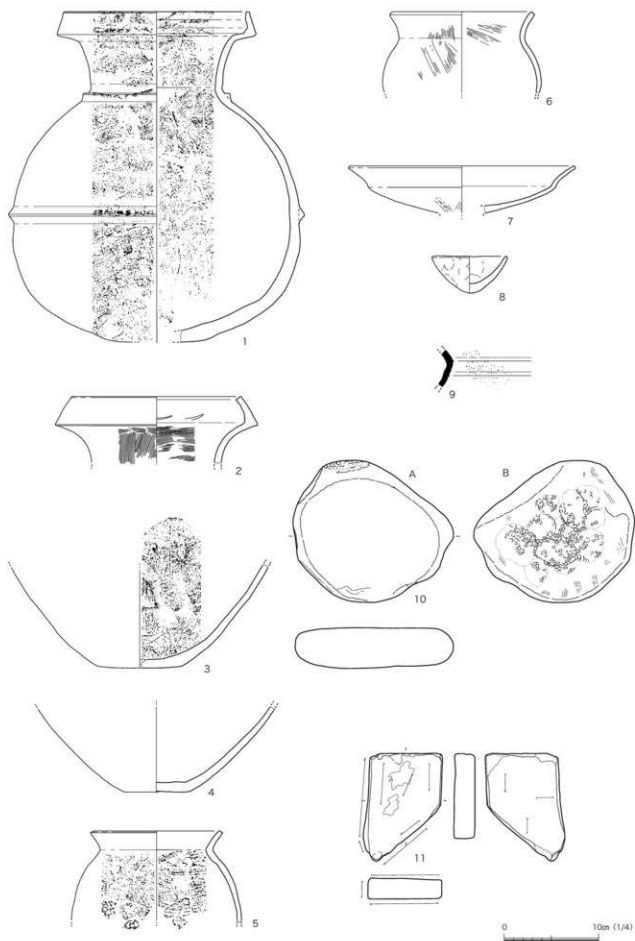


图44 SC42出土遺物実測図(1/4)

平面形は隅丸方形を呈すと考えられる。柱穴はP1が検出されており、その位置から4本柱の構造と想定される。屋内が等は不明。規模は、長さ3.75m以上、幅3.2m以上を測る。

SC40出土遺物(図42)

1 灰壁。不整形の破片で長さ6.2cm、幅6.0cm、厚さ2.9cmを測る。

SC41(図26)

SC22、SD8に切られており、北側コーナーから壁面部分が検出されるもの、ほとんど調査区外に位置する。北壁から東壁にかけてベッド状遺構が確認され、状況からコ字状に配置されたと想定される。柱穴や灰跡等は不明である。規模は、長さ5.8m以上、幅2.45m以上、深さ0.1mを測る。

SC42(図43)

建物の南西壁をSD8に切れ、北側コーナー部は削平される。平面形は方形を呈し、柱穴はP1(SP443)のみ検出されるが、その位置から2本柱構造と想定される。中央には楕円形状の灰跡が位置し、南東壁中央付近のSK27は屋内土坑と考えられる。長さ3.5m以上、幅4.05m以上、深さ0.15mを測る。

SC42出土遺物(図44)

1 弥生土器壺。口縁部は複合口縁で、端部がほぼ直立し、頸部に1条の三角突帯を配す。また、胴部は球形を呈すが、やや下膨れで1条の三角突帯を配し、底部はレンズ状の平底をなす。調整は内外の両面ともにハケメを施し、

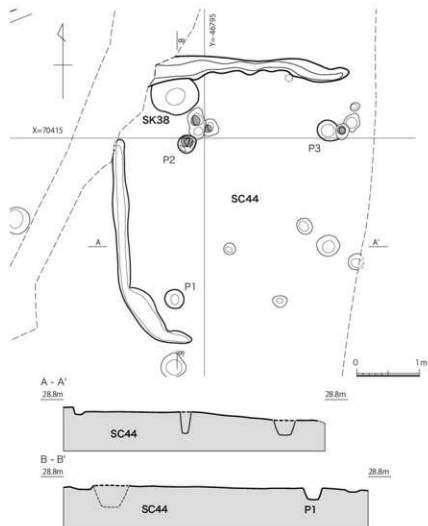


図45 SC44平面図、断面図(1/60)、SK38平面図(1/60)

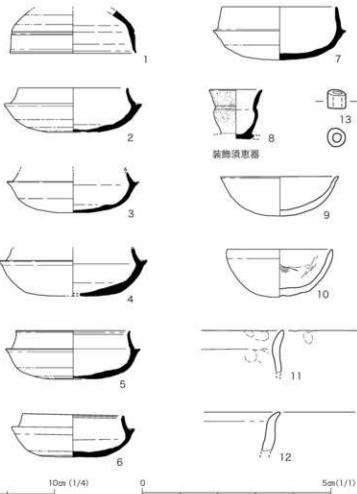
口縁部はハケメの後横ナデにより仕上げる。口径19.0cm、器高34.9cmを測る。胎土:5mm以下の黒色、褐色の砂粒を多量に含む。焼成:良好。色調:にぶい黄褐色。2 弥生土器壺。口縁部は複合口縁で、端部が内傾する。調整は内外の両面ともにハケメを施す。口径17.9cm、残高7.0cmを測る。胎土:1~2mmの乳白色、黒色の砂粒を含む。焼成:良好。色調:棕色。3 弥生土器壺。底部はレンズ状の平底を呈す。調整は内外の両面ともにナデを施す。残高10.9cm、底径9.1cmを測る。胎土:1~2mmの乳白色、黒色の砂粒を含む。焼成:良好。色調:にぶい棕色。4 弥生土器壺。底部は平底状を呈す。調整

は内外の両面ともにナデを施す。残高9.0cm、底径6.1cmを測る。胎土:1~2mmの白色、黒色の砂粒を含む。焼成:良好。色調:棕色。5 土師器甕か。口縁部はくの字状を呈し、端部が沈線状に窪み、肩部から胴部の張は弱い。頸部内面の屈折は強く、稜線となる。調整は外面にハケメ、内面には頸部より1cm以上下部からヘラケズリが施される。口径13.4cm、残高9.4cmを測る。胎土:1mmの灰色粒を含む。焼成:良好。色調:赤褐色。6 土師器甕か。口縁部はS字状を呈し、胴部がやや張る。調整は外面にハケメ、内面にはハケメの後ナデを施す。口径14.8cm、残高8.7cmを測る。胎土:1mmの乳白色粒を少量含



SC43 (図40)

建物の北側1/2と南側コーナー部を削平される。平面形は方形を呈し、柱穴不明。中央には、楕円形状の屋内が位置し、東壁中央付近のSK41は、屋内土坑と考えられる。規模は、長さ5m以上、幅5.4m以上、深さ0.38mを測る。



SC43出土遺物 (図46)

1 須恵器杯蓋。体部屈折部外面は、沈線状のくぼみとなり、口縁端部内面が段状となる。調整は内外の両面ともにヨコナデを施し、体部には回転ヘラケズリで仕上げる。口径14.2cm、残高3.5cmを測る。胎土：1mm以下の白色、黒色、赤色の砂粒を含む。焼成：良好。色調：灰色。2 須恵器杯身。口縁部は内傾し端部を丸く納め、底部は平底気味となる。調整は内外の両面ともにヨコナデを施し、底部付近は回転ヘラケズリで仕上げる。口径11.7cm、器高5.0cm、受部径14.0cmを測る。胎土：2mm以下の黒色粒を多量に含む。焼成：良好。色調：灰色。

図46 SC43、SC44出土遺物実測図 (SC44-13:1/1) (その他:1/4)

む。焼成：良好。色調：橙色。7 弥生土器高杯。口縁部は外反し体部との接点付近が屈折する。調整は内外の両面ともにヘラミガキを施す。口径23.7cm、残高5.0cmを測る。胎土：1mmの色粒を含む。焼成：良好。色調：赤褐色。8 手捏土器。尖底の椀形を呈す。調整はユビナデとユビオサエを施す。口径7.8cm、器高3.9cmを測る。胎土：1～2mmの黒色、白色の砂粒を含む。焼成：良好。色調：明赤褐色。9 須恵器甕。肩部で屈折する形態。胴部に2条

の凹線を配しその間に櫛描の刺突文を施す。肩部には突帯状の突出部が廻る。調整は内外の両面ともに横ナデを施す。残高3.8cmを測る。胎土：黒色微粒子を含む。焼成：良好。色調：褐灰色。10 石皿。花崗岩系の扁平な円礫を使用。A面の頂部に敲打痕。B面は敲打痕が著しく、円形状の窪みが複数観察される。長さ15.0cm、幅16.8cm、厚さ4.3cmを測る。11 砥石。板状の扁平な砂岩を使用。長さ110.4cm、幅7.5cm、厚さ2.3cmを測る。

SC44 (図45)

削平が著しく、北西両側の周溝のみ検出。柱穴はP1、P2、P3と考えられ、その配置から4本柱構造と想定される。炉跡等は不明。規模は、長さ4.55m、幅3.85m、深さ0.2mを測る。

SC44出土遺物 (図46)

1 須恵器杯蓋。器高は高く丸みを帯び、口縁部上部に1条の沈線を付す。口縁端部内面は、斜めに面取りされ、尖頭状を呈す。調整は内外の両面にヨコナデを施し、体部は回転ヘラケズリで仕上

げる。口径13.2cm、器高4.6cmを測る。胎土：1～3mmの灰色砂粒と長石粒を含む。焼成：良好。色調：灰色。2須恵器杯身。口縁部は内傾気味に立ち上り、端部を丸く納める。内面屈折部は丸みを帯びる。調整は内外の両面にヨコナデを施し、体部下半は回転ヘラズリで仕上げる。口径11.5cm、器高4.8cm、受部径14.3cmを測る。胎土：1～4mmの黒色砂粒を含む。焼成：不良。色調：灰黄色。3須恵器杯身。口縁部は内傾気味に立ち上る。内面屈折部はやや強くライン状となる。調整は内外の両面にヨコナデを施し、体部下半は回転ヘラズリで仕上げる。残高4.3cm、受部径14.0cmを測る。胎土：1～3mmの石英、褐色粒を含む。焼成：不良。色調：浅黄色。4須恵器杯身。口縁部は内傾し端部を丸く納め、底部は平底気味となる。調整は内外の両面ともにヨコナデを施し、底部付近は回転ヘラズリで仕上げる。口径12.6cm、器高5.0cm、受部径15.6cmを測る。胎土：1mm以下の粒子を含む。焼成：良好。色調：灰白色。5須恵器杯身。口縁部は直立気味に立ち上り、端部内面は沈線状の段を成す。立ち上りは高く2cmに達する。調整は内外の両面ともにヨコナデを施し、底部付近は回転ヘラズリで仕上げる。口径12.0cm、器高5.1cm、受部径14.2cmを測る。胎土：1mm以下の灰色粒子等を含む。焼成：良好。色調：灰～青灰色。6須恵器杯身。口縁部は内傾しており、端部内面は沈線状の段を成す。立ち上りは1.4cmと高い。調整は内外の両面ともにヨコナデを施し、底部付近は回転ヘラズリで仕上げる。口径10.6cm、器高4.5cm、受部径13.0cmを測る。

胎土：1mm以下の黒色粒子、石英、長石等を含む。焼成：良好。色調：灰白色。7須恵器杯身。口縁部は直立しており、端部を丸く納める。立ち上りは高く2.4cmを測る。調整は内外の両面ともにヨコナデを施し、底部付近は手持ちのヘラズリの後に全体をナデにより仕上げる。口径12.0cm、器高5.1cm、受部径14.2cmを測る。胎土：1mm以下の灰色粒子等を含む。焼成：良好。色調：灰～青灰色。8裝飾須恵器の裝飾小壺。広口壺で、口縁部は開き肩部がやや張る。全体には薄手のつくりで、内外の両面ともに丁寧なナデにより仕上げられており、底部まで作成した後に本体に貼付けている。その後、口縁部には柳描の波状文を施し、肩部から胴部にかけて柳描の刺突文を際間なく連続させている。刺突文の施文は、胴部を一巡させた後に肩部に移行する。底部には、厚さ0.6～0.7cmの裝飾付須恵器本体の破片が残っており、小壺は本体から剥がれたのではなく、本体が割れた後に採取されたものと考えられる。底部のラインは、口縁部、頸部のラインに並行し水平であることから、須恵器本体に貼付ける角度は、器壁に対し垂直に近い状況と考えられる。また、小壺の底部に張り付いた須恵器本体の破片を、周囲を打ち欠いて水平に据えられるよう調整されている。さらに、器面を観察すると、小壺の縦のラインで色調の違いがあり、文様もそのラインを境に上下に異なる。これは、貼り付けた本体に対し内側か外側かという違いを示しており、灰色でも灰白色に近い方が内側で、黄灰色の方が外側となると考えられる。焼成時の火のあたり具合による色調の差であろう。口径5.4cm、器高

5.2cmを測る。胎土：1mm以下の石英粒子を多く含む。焼成：良好。色調：灰色。9土師器杯。口縁部がやや外反し、底部は丸底を呈す。調整は一部にナデとユビオサエが観察される。口径12.4cm、器高4.1cmを測る。胎土：1mmの黒色、赤色砂粒を含む。焼成：良好。色調：橙色。10土師器杯。口縁部が直立しやや厚手となり、底部は丸底を呈す。調整は内側の両面ともにナデを施す。口径11.0cm、器高5.1cmを測る。胎土：1mmの黒色、赤色砂粒を含む。焼成：良好。色調：橙色。11土師器甕か、直口口縁で、内面に輪積み痕が観察される。調整は内外の両面にナデが施される。高4.4cmを測る。胎土：粗い石英や長石の粒を多く含む。焼成：良好。色調：ぶい赤褐色。12土師器直口壺か。内外の両面にナデを施す。残高4.1cmを測る。胎土：1～2mmの黒色粒等の砂粒を含む。焼成：良好。色調：赤褐色。13滑石製白玉。長さ0.32～0.45cm、幅0.53cm、孔径0.2～0.225cmを測る。

SC45 (図47)

SC46を大きく切っており、南側コーナーは攪乱によって削平される。平面形はやや歪な方形を呈し、柱穴は不明だが、北側コーナー部分にはSP518が位置しており柱穴の可能性を有す。中央より西側には、円形状の2段に掘り込まれた穴が存在する。しかし、SC45自体の存在が判然としない上に、²の位置がSC46の中央付近に位置することから、SC46に関連した遺構とも考えられよう。

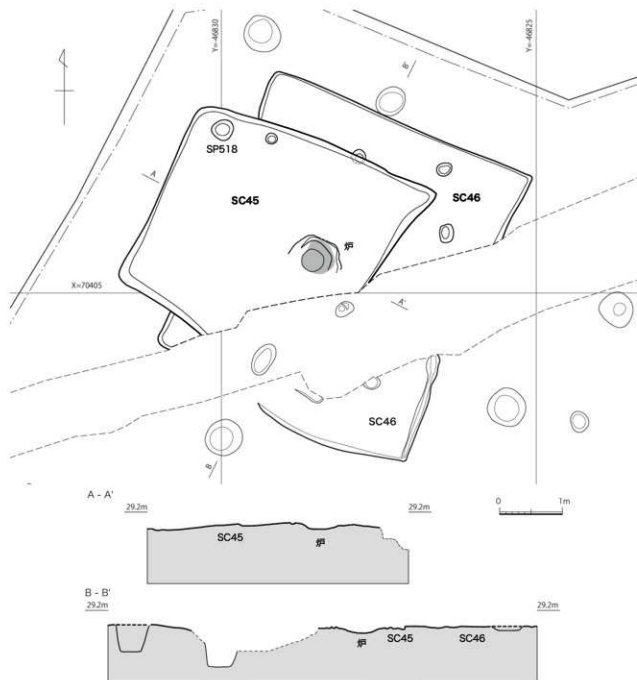


図47 SC45, SC46 平面図、断面図 (1/60)

SC46 (図47)

SC45に大きく切られ、南側には大きく攪乱が入っているが、SC45自体の存在が判然としない。屋内がSC45東壁側のがか。柱穴は不明。規模は、長さ5.2m、幅4.4mを測る。

SC46 出土遺物 (図48)

1 砥石。破片資料で褐灰色の泥岩を使用。長さ7.7cm、幅3.5cm、厚さ2.3cmを測る。

SC47 (図24)

SC21に切られ、周囲を攪乱により大きく削平されているが、床面とベッド状遺構の一部を検出。平面形は方形を呈し、柱穴はP1 (SP544) とP2の可能性があり、2本柱の構造と想定される。南側壁面付近には、一部L字状を呈したベッド状遺構が確認されており、削平以前は、全体がコ字状を呈したと考えられる。建物の中央には、ピットに切られるが隅

丸方形の屋内炉が存在し、西側のSK40は、その位置から屋内土坑の可能性が高い。規模は、長さ1.25m以上、幅3.4m以上、深さ0.2mを測る。

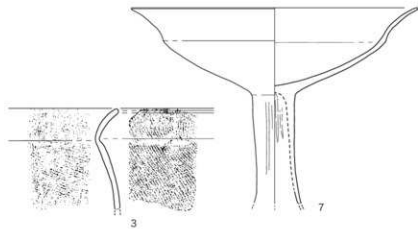
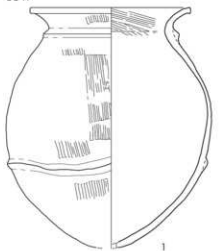
SC47 出土遺物 (図48)

1 弥生土器甕。口縁部は大きく外反し、頸部に1条の三角突帯を配す。胴部は楕円形状を呈し、下半に1条の三角突帯を配し、底部は尖底気味となろう。調整は外面に縦位の粗いハケメ、内面

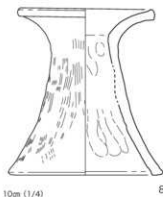
SC46



SC47

SC37(15)
と接合

0 10cm (1/4)



SC49



図 48 SC46, SC47, SC49 出土遺物実測図 (1/4)

にはナデを施す。口径 16.8cm、残高 25.4cm を測る。胎土：1～4mm の石英や長石等の砂粒を含み。焼成：良好。色調：にぶい橙色。2 弥生土器甕。口縁部はくの字状を呈し、頸部内面の屈折部は明瞭な稜線を描く。胴部は直線的で長胴を呈すと想定される。調整は内外の両面ともにハケメを施し、肩部内面付近にはヌビオサエが観察される。口径 22.4cm、残高 12.9cm を測る。胎土：1～2mm の石英、長石の粒を含む。焼成：良好。色調：にぶい褐色。

3 弥生土器甕。口縁部は外反し、頸部内面の屈折部は間延びする。胴部は直線的で長胴を呈すと考えられる。調整は内外の両面ともにハケメを施す。残高 10.6cm を測る。胎土：1mm 程度の黒色、茶褐色の砂粒を含む。焼成：良い。色調：にぶい橙色。4 弥生土器甕。口縁部はくの字状を呈し、頸部内面の屈折部は稜線を描く。調整は内外の両面ともにハケメが施される。残高 4.7cm を測る。胎土：1mm の乳白色粒を含む。焼成：良好。色調：灰褐色。5 弥生土器

甕。底部は貼付けにより厚底を呈し、底面はレンズ状の平底を呈す。調整は外面に粗い横位のタタキメを施し、内面には半円状の当具痕が残る。残高 4.5cm、底径 4.0cm を測る。胎土：1～2mm の白色粒を含む。焼成：良好。色調：にぶい黄橙色。6 弥生土器鉢。内面には丁寧なナデが施される。残高 5.3cm。胎土：1mm 以下の角閃石、白色、灰色粒子を含む。焼成：良好。色調：橙色。7 弥生土器高杯。口縁部は大きく開き、体部との接点

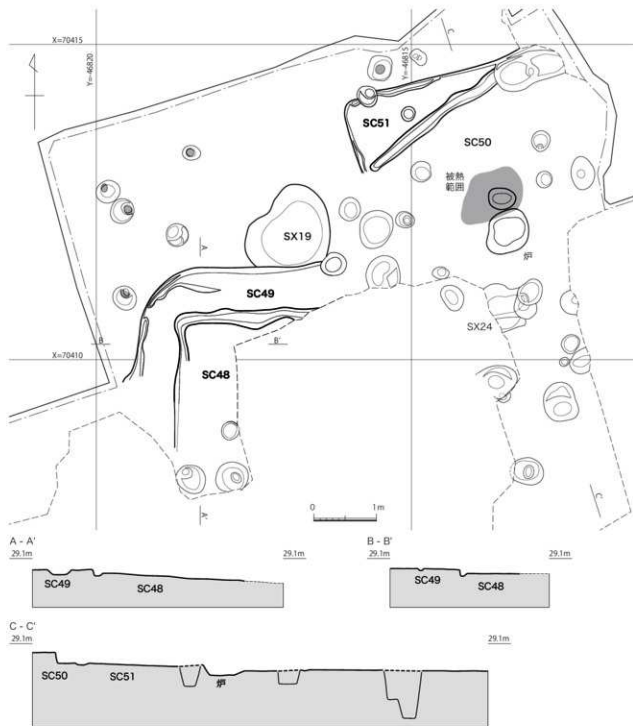


図49 SC48, SC49, SC50, SC51平面図、断面図(1/60), SX19平面図(1/60)

長脚を成すと想定する。調整は内外の両面ともにナデを施し、脚部外面には縦位のヘラナデ、内面にはしぼりが観察される。8 弥生土器器台。受部は端部がやや肥厚し、強く外反する。脚部は裾広がりがとなる。調整は外面に縦位のハケメ、内面にはユビナデ、ユビオサエが施される。受部径 14.0cm、器高 17.7cm、底径 14.9cm を測る。胎土：1mm の乳白色粒を含む。

焼成：良好。色調：にふい褐色。

9 砥石。破片資料で褐灰色の泥岩を使用。長さ 5.5cm、幅 1.9cm、厚さ 3.1cm を測る。

SC48 (図49)

SC49 を大きく切る。削平が著しく、北西コーナー部のみ検出。平面形は方形を呈すと考えられる。柱穴や屋内戸等不明。規模

は、長さ 2.3 m 以上、幅 2.2 m 以上、深さ 0.15 m を測る。

SC49 (図49)

SC48 に大きく切られる。削平が著しく、北西コーナー部のみ検出され、一部に周溝が確認される。平面形は隅丸方形を呈すと考えられる。柱穴や屋内戸等不明。規模は、長さ 2.95 m 以上、幅 1.8

m以上を測る。

SC49 出土遺物 (図 48)

1 砥石。上半部欠損資料で褐灰色の泥岩を使用。長さ 7.6cm、幅 3.7cm、厚さ 1.2cm を測る。

SC50 (図 49)

削平が著しく、北壁の周溝部の

み検出。平面形は方形か、柱穴は不明。南側には隅丸形状の屋内炉が位置する。規模は、長さ 3.05 m 以上を測る。

SC51 (図 49)

北壁と北西コーナー部を検出。平面形は方形を呈すが、柱穴は不明。屋内炉は SC50 の屋内炉の北

側に位置する被熱部分とも考えられる。規模は、長さ 3.0 m 以上、幅 1.25 m 以上、深さ 0.27 m を測る。なお、SC50 は、SC51 の周溝部とも考えられ同一遺構の可能性もある。その場合、SC50 の屋内炉は SC51 の遺構で、その北側の被熱部分は、屋内炉に関連するものとなろう。

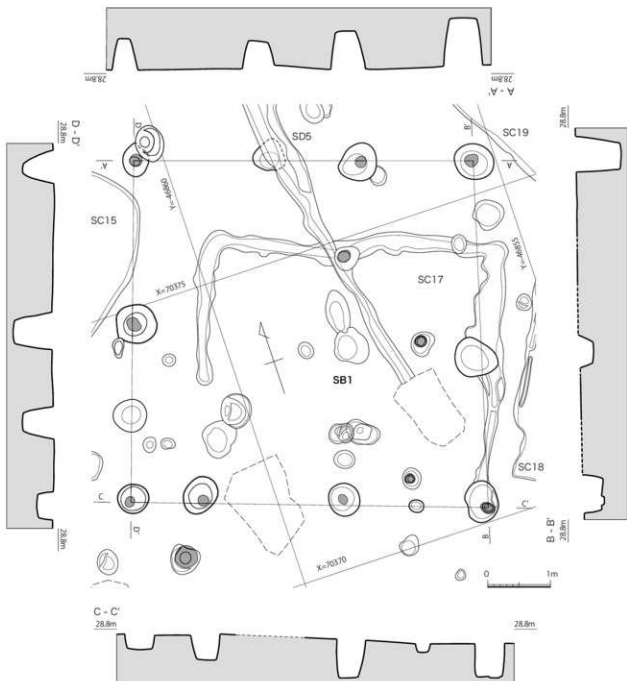


図 50 SB1 平面図、断面図 (1/60)

掘立柱建物 (SB)

SB1 (図50)

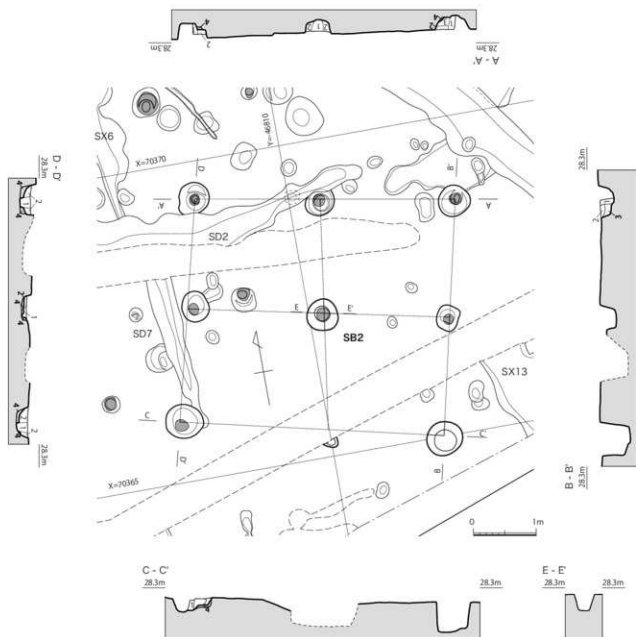
平面形状が正方形を呈す掘立柱建物で、SC17を切っており、SD5に切られる。建物の規模は、桁行 A-A' 5.4m、C-C' 5.57m、梁行 B-B' 5.4m、D-D'

D' 5.4mを測り、面積は約30㎡となる。柱穴の断面を観察すると、深さが一定しておらず、特に、南西側が浅くなっている。これは、旧地形と関連するものであろう。主軸方位はN-71.5°-Wを示す。

SB2 (図51)

桁行が梁行より1.05mほど長

い総柱の建物である。建物の規模は、桁行 A-A' 6.3m、C-C' 6.75m、梁行 B-B' 5.65m、D-D' 5.3mを測り、面積は約36㎡となる。柱穴の断面を観察すると、南東側は深く残りもよいが、それ以外は全て浅く旧地形との関連が考えられる。主軸方位はN-79.7°-Wを示す。



- 1.10YR4/2 灰黄褐色土 ややしまりあり 黒褐色土が斑状に混じる 明褐色土粒が少量混じる (柱跡)
- 2.10YR6/2 灰黄褐色土 ややしまりあり 黒褐色土が斑状に混じる 明黄褐色土ブロックが混じる
- 3.10YR6/2 灰黄褐色土 ややしまりあり 黒褐色土が斑状に混じる 明赤褐色土が多量に混じる 明赤褐色土粒が少量混じる
- 4.5YR6/8 褐色土 ややしまりあり しまりあり 暗灰色土が混じる φ1.0cm ~ 3.0cm 大の礫が少量混じる 黒色土粒が混じる

図51 SB2 平面図、断面図(1/60)

土坑 (SK)

調査時に遺構番号を付与した土坑のうち、堅穴建物を構成するものは16頁以降に記載の「堅穴建物」で取り扱っているため、本節では報告しない。また、形状・掘方が判然しないものは報告を割愛した。

SK1 (図4)

平面形は楕円形を呈し、底部西側隅に小ピットが存在する。規模は、長さ0.84m、幅0.59m、深さ0.21mを測る。

SK2 (図16)

平面形は楕円形を呈し、SC11を切っている。東側がもう1段掘り込まれた、2段掘り込みの構造である。規模は、長さ1.6m、幅1.15m、深さ0.17mを測る。

SK4 (図61)

平面形は円形を呈し、SPを切る。規模は、径0.57m、深さ0.28mを測る。

SK4 出土遺物 (図52)

1 砥石。欠損資料で褐灰色の泥岩を使用。長さ15.35cm、幅1.9cm、厚さ1.9cmを測る。

SK6 (図9)

平面形は円形を呈す。規模は、0.85m、深さ0.46mを測る。

SK7 (図9)

平面形は隅丸長方形を呈し、SC4を切る。規模は、長さ0.95m、幅0.65m、深さ0.15mを測る。

SK7 出土遺物 (図52)

1 赤焼土器甕。口縁部が大きく開く。残高4.1cmを測る。胎土:1mm以下の赤褐色、乳白色の粒子を含む。焼成:良好。色調:橙色。

SK8 (図8)

平面形は楕円形を呈し、SC3を切る。規模は、長さ0.6m、幅0.5m、深さ0.3mを測る。

SK10 (図18)

平面形は隅丸長方形を呈し、2段掘り込みの構造である。SC16を切る。規模は、長さ0.8m、幅0.6m、深さ0.14mを測る。

SK14 (図14)

平面形は円形を呈す。規模は、径0.9m、深さ0.35mを測る。

SK14 出土遺物 (図52)

1 土師器甕。口縁部がくの字状を呈し、端部が丸味を持つ。口径23.5cm、残高6.2cmを測る。胎土:1~2mmの砂粒を大量に含む。焼成:良好。色調:赤褐色。
2 土師器甕。口縁部は外反し、端部が肥厚する。口径21.0cm、残高6.1cmを測る。胎土:1~4mmの砂粒を多量に含む。焼成:良い。色調:にぶい橙色。

SK17 (図53)

平面形はやや歪ながら楕円形を呈す。規模は、長さ2.8m、幅2.05m、深さ0.15mを測る。

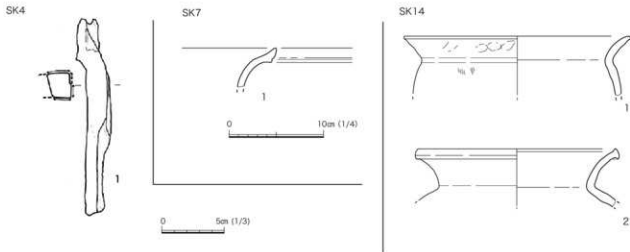


図52 SK4、SK7、SK11、SK14、SK15 出土遺物実測図 (SK4:1/3) (その他:1/4)

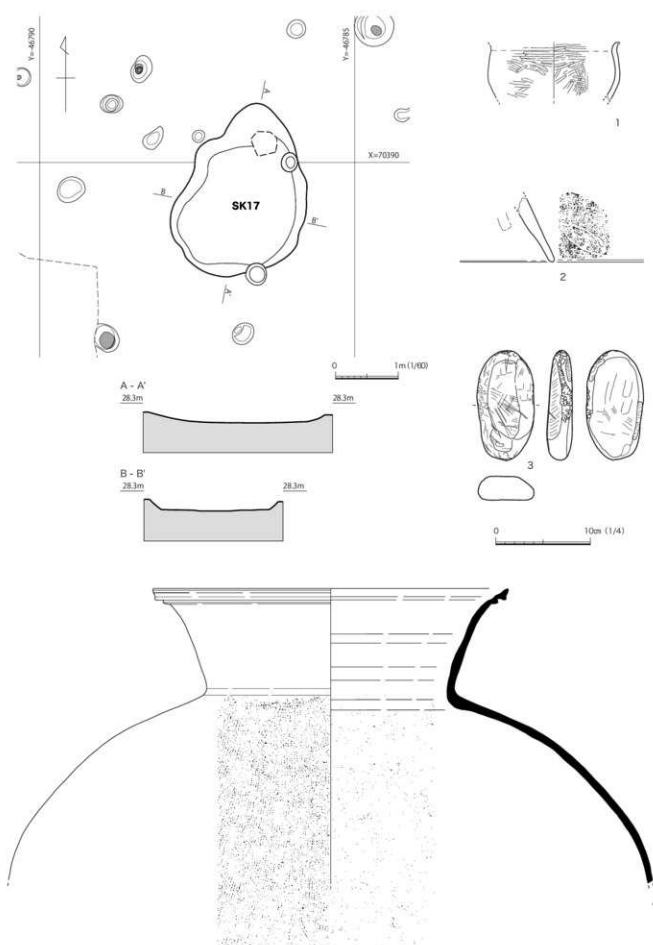


図 53 SK17 平面図・断面図(1/60)、出土遺物実測図(1/4)

SK17 出土遺物 (図 53)

1 土師器鉢。口縁部は短く頸部が緩やかに屈折する。胴部の膨らみは小さく、底部は丸底に近いと考えられる。頸部径 13.3cm、残高 5.9cm を測る。調整は内外両面ともにミガキを施す。胎土：雲母、赤褐色の粒を少量含む。焼成：良い。色調：黄褐色。2 土師器器台。脚部が直線的に開く。残高 6.7cm を測る。胎土：赤褐色粒、角閃石を微量含む、細砂粒を多量に含む。焼成：良い。色調：黄褐色。3 砥石。楕円形の扁平砂岩礫を使用し、両面を砥石面に使用。先端と末端、両側面に敲打痕あり。長 11.5cm、幅 6.0cm、厚 2.5cm を測る。4 須恵器大甕。口縁部は開き、端部は鋭利な三角形のつくりで、直下に鋭利な三角形の突帯を 1 条配す。肩部から胴部へと強く膨らむ。調整は、外面に縦位の細かなタキを加え、内部の当具痕は同心円の青海波であるが、ナデケシにより滑らかになる。内外面降灰、頸部の一部に自然釉が付着する。口径 37.4cm、残高 31.2cm を測る。胎土：白色の細砂粒を多量に含む。焼成：良好。色調：灰褐色。

SK20 (図 22)

平面形は円形を呈す。規模は、径 0.66 m、深さ 0.42 m を測る。

SK20 出土遺物 (図 54)

1 弥生土器壺。底部はレンズ状の平底を呈す。調整は外面にハケメを施す。残高 8.9cm、底径 9.8cm を測る。胎土：角閃石、赤褐色粒等の砂粒を含む。焼成：良い。色調：にぶい黄褐色。2 弥生土器甕。口縁部はくの字状

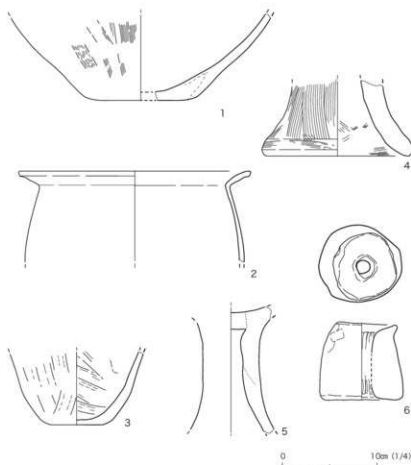


図 54 SK20 出土遺物実測図 (1/4)

で、胴部の張りが弱く長胴を呈すと想定する。調整は外面にハケメ、内面にはナデを施す。口径 24.6cm、残高 9.5cm を測る。胎土：赤褐色粒が多い細砂粒を多量に含む。焼成：良い。色調：橙色。3 弥生土器甕。底部は平底状を呈し、胴部への立ち上りは緩やか。調整は、内外の両面ともにハケメの工具によるナデを施す。残高 7.7cm、底径 5.6cm を測る。胎土：赤褐色粒、角閃石等の細砂粒を多量に含む。焼成：良い。色調：橙色。4 弥生土器器台。厚手の脚部で開きは弱く、端部を丸く納める。調整は外面にハケメ、内面にはナデを施す。残高 8cm、底径 15.0cm を測る。胎土：精良。焼成：良好。色調：茶褐色。5 弥生土器高杯。脚部のみで調整は磨滅のため不明。残高 13.2cm を測る。胎

土：1～3mm の長石まじりの砂粒を多量に含む。焼成：良い。色調：黄褐色。6 弥生土器支脚（杵形）。上部の一部が少し張り出し、頭部より底部へ円孔を穿つ。調整はナデを施す。上部径 5.7cm、器高 8.3cm、底径 7.5cm を測る。

SK26 (図 55)

平面形は不整形である。規模は、長さ 0.7 m 以上、幅 0.6 m、深さ 0.21 m を測る。

SK26 出土遺物 (図 55)

1 弥生土器器台。厚手の受部は開きが小さく、上端がわずかに窪む。調整は内外両面ともにユビナデが施される。受部径 8.4cm、残高 6.5cm を測る。胎土：1～

2mmの砂粒を多量に含み、赤褐色粒を含む。焼成：良好。色調：褐灰色。2弥生土器器台。受部はラッパ状に大きく開き、端部に1条の沈線が廻る。調整は外面にハケメ、内面にはユピナデが施される。受部径13.0cm、残高15.7cmを測る。胎土：1～3mmの砂粒を多量に含み、赤褐色粒を含む。焼成：良い。色調：にぶい橙色。3弥生土器器台。受部はラッパ状に大きく開く。調整は外面にヘラナデ、内面にはユピナデが施される。受部径13.0cm、残高16.5cmを測る。胎土：1～3mmの砂粒を多量に含む。焼成：良い。色調：浅黄橙色。

SK32 (図40)

平面形は不整形で、SX18を取り込む一体的なもので、2段掘り込み構造を呈す。規模は、長さ1.3m、幅1.6m、深さ0.31mを測る。

SK32 出土遺物 (図56)

1 砥石。きめ細かな花崗岩系の楕円形状を呈した河川礫を使用。使用面は1面のみで全体に自然面が多く残る。長さ11.3cm、幅5.3cm、厚さ4.0cmを測る。

SK36 (図55)

平面形は不整形である。規模は、長さ1.2m、幅1.2m、深さ0.06

mを測る。

SK37 (図57)

平面形は隅丸長方形を呈す。規模は、長さ1.8m以上、幅1m、深さ0.23mを測る。

SK37 出土遺物 (図56)

1 須恵器甕。頸部片で外面に櫛描波状文を描く。残高1.7cmを測る。胎土：精良。焼成：良好。色調：灰白色。2 朝鮮半島系の瓦質土器で、広口壺の胴部片か。外面は格子状のタタキメを施した後ナデを行なう。内面は板状工具によるヨコナデを用いて仕上げる。残高8.6cmを測る。胎土：1～

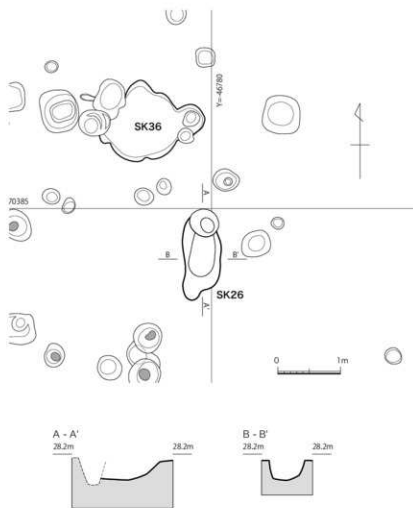
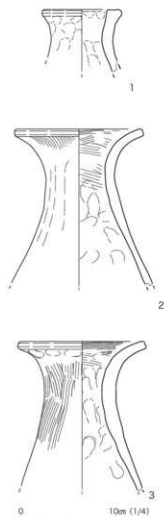


図55 SK26平面図、断面図(1/60)、SK36平面図(1/60)、SK26出土遺物実測図(1/4)



3mmの黒褐色を呈した粘土粒状のもの、白色、黒色の粒子を多く含む。焼成：良好。色調：灰白色。3滑石製有孔盤。長さ3.31～3.43cm、厚さ0.41～0.43cm、孔径0.15～0.19cmを測る。

SK38 (図45)

平面形は円形を呈す。規模は、径0.84m、深さ0.3mを測る。

SK42 (図40)

SC43を切り、平面形は円形を呈す。規模は、径0.77m、深さ0.56mを測る。

SK43 (図35)

平面形は不整形で、2～3段の掘り込みがある。規模は、長さ0.7m、幅0.7m、深さ0.21mを測る。

SK43出土遺物 (図59)

1 弥生土器壺。口縁部は外面に稜線を有す袋状口縁を呈す。内外両面ともに磨減が著しい。口径6.9cm、残高3.8cmを測る2 砥石。破片を再生か、褐灰色の泥岩を使用。規模は、長さ12.4cm、幅3.1cm、厚さ2.1cmを測る。

SK44 (図58)

平面形は楕円形を呈し、SX22に切られるが、SX23を切る。長さ0.8m以上、幅0.7m、深さ0.13mを測る。

SK44出土遺物 (図59)

1 弥生土器甕。丸底の鉢の形状に近く、外面に粗いタタキメ、内面には横位の幅広なハケメを施

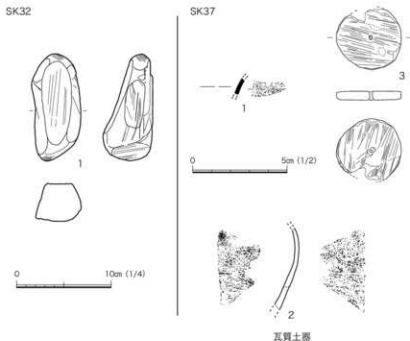


図56 SK32、SK33、SK37出土遺物実測図 (SK37-3:1/2) (その他:1/4)

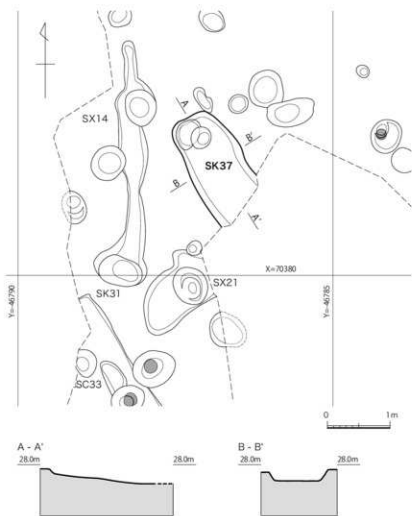


図57 SK37平面図、断面図(1/60)、SK31平面図(1/60)

す。残高8.1cmを測る。胎土：
粗い砂粒を含む。焼成：良い。色
調：明赤褐色。

SK45 (図3)

平面形は楕円形で、2段掘り込
みの構造を呈す。規模は、長さ1.1
m、幅0.82m、深さ0.15mを測る。

SK46 (図40)

平面形は円形を呈す。SC43の
土坑(SK41)に切られる。規模は、
径0.55mを測る。

SK47 (図3)

平面形は円形か。SPに切られ
ており、規模は、径0.5m、深さ
0.04mを測る。

SK47 出土遺物 (図59)

1 弥生土器の甕か、底部付近の
破片と考えられる。残高7.3cm
を測る。胎土：糊殻や植物片が多
量に含まれる。焼成：不良で軟質。
色調：黒褐色で、土器壁面内の焼
成不良部分が残っているような状
況。

SK48 (図3)

平面形は円形か。規模は、径
0.45m、幅0.82mを測る。

SK48 出土遺物 (図59)

1 砥石。破片を再生か、褐灰色
の泥岩を使用。長さ12.4cm、幅
2.4cm、厚さ1.4cmを測る。

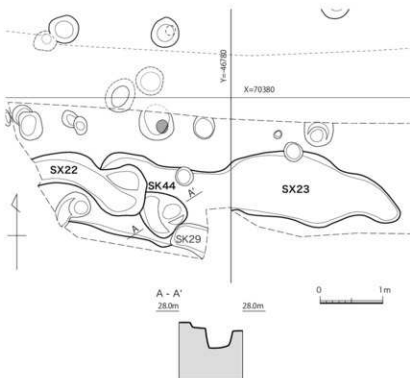
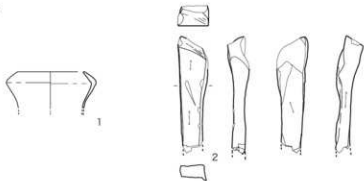
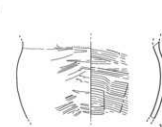


図58 SK44平面図、断面図(1/60)、SX22、SX23平面図(1/60)

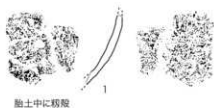
SK43



SK44



SK47



胎土中に粥殻

SK48



0 10cm (1/4)

図59 SK43、SK44、SK47、SK48 出土遺物実測図(1/4)

溝状遺構 (SD)

調査時に遺構番号を付与した溝状遺構のうち、形状及び掘方が判然としないものは報告を割愛した。

SD3・4 (図 61)

両者は、隣接して存在しており、一体のものと考えられる。それらの位置は、調査区南側の中央付近にあって、南北方向から東西方向へと、直角に近い状況で屈折しており、方形の区画状を呈し、全体に正方位を示している。SC21 (図 24)、SC22 (図 26) といっ

た堅穴建物は同じ方位を示すが、いずれの建物も弥生時代後期のもので、溝本体が古墳時代後期のSD8を切ることから、時間的に一致しない。内側のSD3は、規模が南北9.6 m以上、東西5 m、幅0.5 m、深さ0.07 mを測る。また、外側のSD4は、規模が南北9.8 m以上、東西42.7 m、幅1.0 m、深さ0.23 mを測る。

SD3・4 出土遺物 (図 60)

1 須恵器高杯。口縁部は外反し、体部に屈折の段を有す無蓋高杯である。残高3.2cmを測る。胎土：2mmの白色粒を含む。焼成：良好。色調：暗灰色。

SD5 (図 62)

流路は南北方向である。規模は、長さ20.5 m以上、幅0.56 m、深さ0.18 mを測る。

SD5 出土遺物 (図 60)

1 須恵器杯身。有蓋高杯の可能性あり。口縁部は直立気味で、立ち上りが1.8cmと高く、端部に弱い段を残す。内面の屈折は弱い。残高3.5cmを測る。胎土：1mm以下の白色、褐色の粒子を含む。焼成：良好。色調：灰色。2 須恵器杯身。口縁部は内傾し、端部を丸く納める。残高3.3cmを測る。

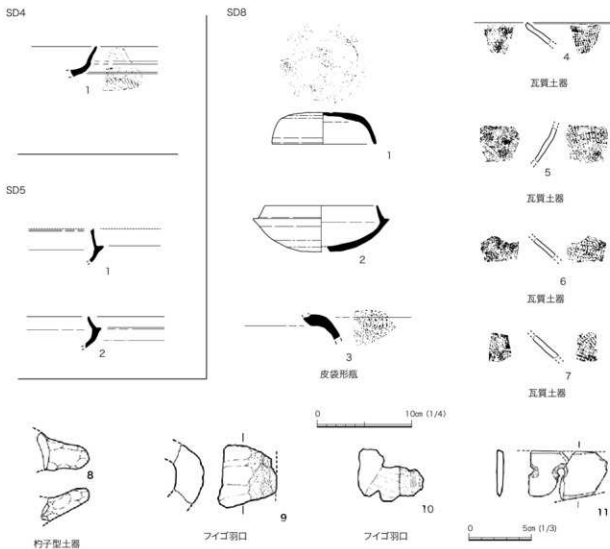


図 60 SD4、SD5、SD8 出土遺物実測図 (SD8-8～11:1/3) (その他:1/4)



図61 SD3,SD4平面図(1/200)、SD3,SD4断面図(1/50)、SK4平面図(1/200)

胎土：1mm以下の白色粒子を含む。焼成：良好。色調：暗灰色。

SD8 (図63)

流路は北西から南東方向にとる。長さ19.5m以上、幅0.54m、深さ0.21mを測る。

SD8 出土遺物 (図60)

1 須恵器杯蓋。口縁部はやや外反し、端部を丸く納める。調整は内外の両面ともにヨコナデを施し、回転ヘラケズリの範囲は天井部付近の外面と狭くなる。口径10.7cm、器高3.9cmを測る。胎土：3mm以下の乳白色、灰色の砂粒を含む。焼成：やや不良。色調：灰褐色。2 須恵器杯身。口縁部は内傾し、端部は丸みを呈す。内面の屈折は緩やかで、体部は丸みを帯びる。調整は内外の両面ともにヨコナデを施し、回転ヘラケズリは体部下方に行なわれる。胎土：1～2mmの乳白色、灰色等の砂粒を含む。焼成：良好。色調：灰色。3 須恵器皮袋形瓶か。外面の前面に円形と半円形の竹管文が施されている。調整は内面に丁寧な横ナデが施される。残高2.7cmを測る。胎土：1mm以下の黒色、乳白色の粒子を含む。焼成：良好。色調：青灰色。4～7 朝鮮半島系の瓦質土器。それらは広口壺の胴部片で、同一個体と考えられる。外面は格子状のタタキメを施した後ナデを行なう。内面は板状工具によるヨコナデを用いて仕上げる。4 残高2.3cmを測る。胎土：1～3mmの黒褐色を呈した粘土粒状のもの、白色、黒色の粒子が多く含む。焼成：良好。色調：灰白色。8 杓子形土器の把手部分。全体をユビナデとユビオサエで仕上げる。長さ4.1cm、幅2.5cm、

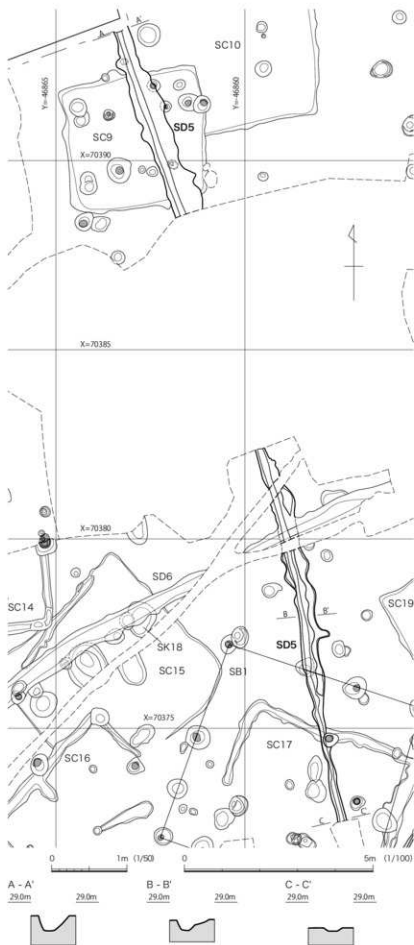


図62 SD5平面図(1/100)、断面図(1/50)

厚さ1.4cmを測る。胎土：砂粒を多く含む。焼成：良好。色調：9ファイゴの羽口。先端に黒色の付着物。表面は強いナデを施す。長さ4.35cm、幅5.0cm、厚さ2.3cmを測る。胎土：砂粒を多く含む。色調：明褐色。10ファイゴの羽口で、9と同一個体と考えられる。11磨製石砲丁。外湾方の半月形を呈し、片岩系の軟質材を使

用。長さ6.2cm、幅3.6cm、厚さ0.5cmを測る。孔は中央部に位置し、両面から敲打の後に穿孔している。双孔に紐ずれと考えられる使用痕が観察される。

SD10 (図64)

流路は北西から南東方向をとっている。長さ20.06m以上、幅0.8

m、深さ0.19mを測る。

SD10 出土遺物 (図66)

1弥生土器甕。口縁部はくの字状を呈すが、内面の屈折が少し緩やかになる。胴部の張は弱く、底部は厚底でレンズ状の平坦面をなす。調整は外面にハケメ、内面にはユビナデを施す。器高15.4cm、底径3.3cmを測る。胎土：

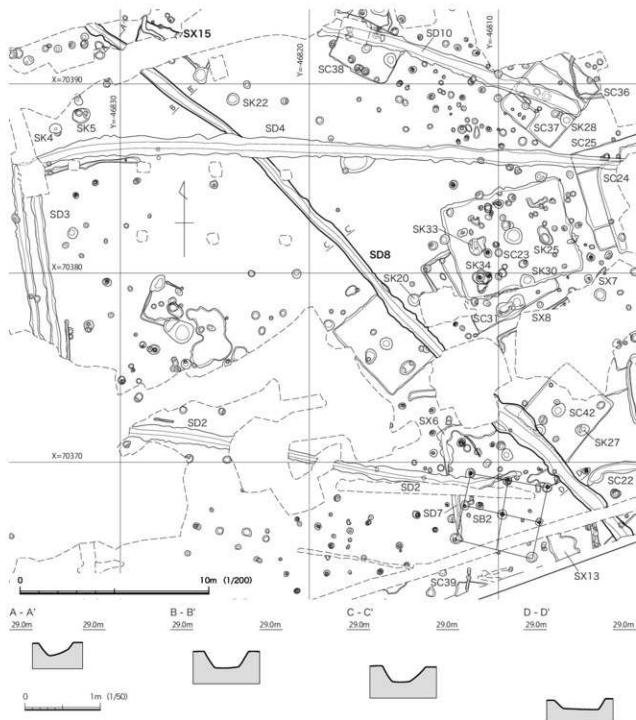


図63 SD8, SX15 平面図 (1/200), SD8 断面図 (1/50)



A - A'
29.0m



B - B'
29.0m



C - C'
29.0m



図64 SD10平面図 (1/100)、断面図 (1/50)

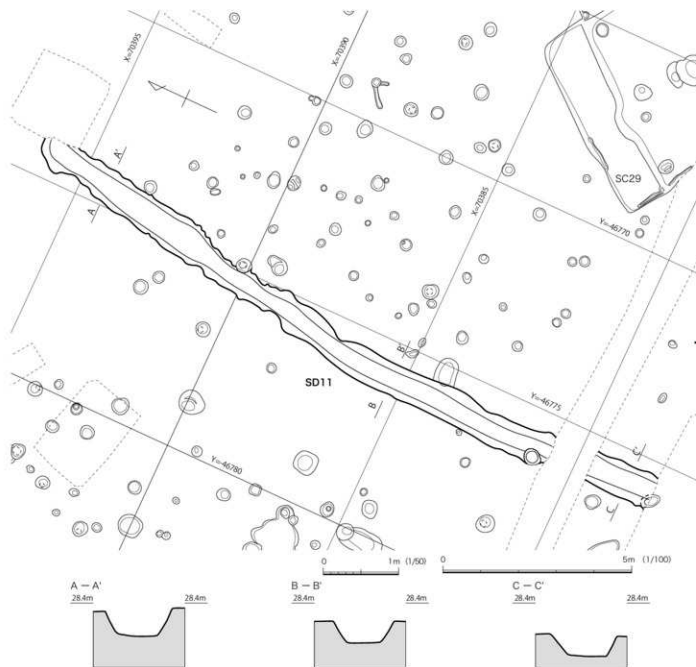


図65 SD11 平面図(1/100)、断面図(1/50)

2～6mmの粗い石英を多く含む。焼成：良好。色調：にぶい黄橙色。2 弥生土器脚付鉢、もしくは高杯。口縁部が大きく外反し、体部は半球状を呈す。脚部は短脚でラッパ状に大きく開く。口径22.4cm、器高15.2cm、底径13.2cmを測る。胎土：1～2mmの石英粒を多量に含む。焼成：良好。色調：橙色。3 鉄製鋸か。0.2cmほどの薄い鉄板を使用する。柄に相当する部分が短く、短冊形の可能性がある。長さ3.1cm、幅3.9cm、厚さ0.2cmを測る。4 フィゴの

羽口。先端にガラス質の溶解した付着物が観察される。表面は強いナデを施す。長さ5.4cm、幅4.3cm、厚さ0.9cmを測る。胎土：砂粒を多く含む。色調：明褐色。先端は熱によりにぶい橙色に変化している。

SD11 (図65)

流路は北から南にとる。規模は、長さ18.6m以上、幅0.9m、深さ0.3mを測る。

SD11 出土遺物 (図66)

1 須恵器高杯。脚部は端部が鋭利で直立し、その上方は三角突帯状に突出する。残高2.4cmを測る。胎土：1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。色調：褐色。2 土師器甕。長胴化傾向が観察され、やや厚手となる。調整は外面にハケメとナデ、内面にはナデが施される。口径14.4cm、器高24.3cmを測る。胎土：乳白色や黒色等の微粒子を含む。焼成：良好。色調：にぶい橙色。3 土師器甕、

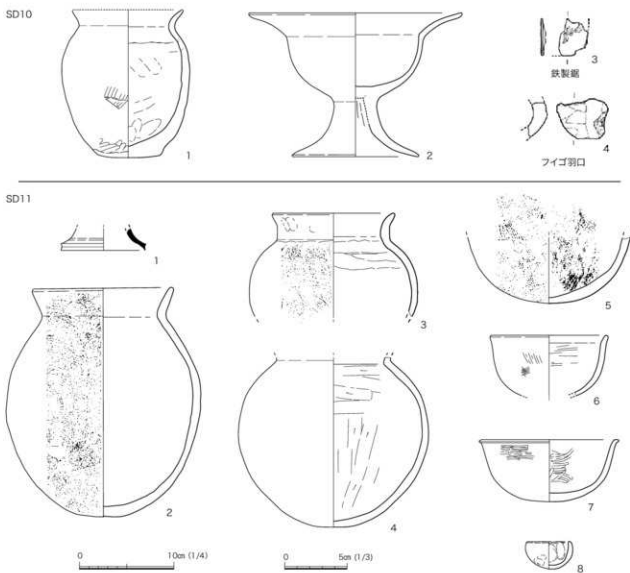


図66 SD10、SD11 遺物実測図 (SD10: 3、4: 1/3) (その他: 1/4)

または直口壺か。口縁部は直立気味に立ち上がり、胴部は球形を呈す。調整は外面にハケメを施す。口径12.6cm、器高10.9cmを測る。胎土:1mmの白色、乳白色の砂粒を含む。焼成:良好。色調:明赤褐色。4土師器甕。布留系甕で、胴部は球形、底部は丸底を呈し、全体に厚手をなす。調整は内面にヘラケズリが確認される。残高17.9cm、胴部最大径20cmを測る。胎土:1~2mmの黒色、白色、灰色の砂粒を含む。焼成:良好。色調:にぶい褐色。5土師器甕。底部は丸底で、全体に厚手をなす。調整は内外両面にハケメ

が確認される。残高7.0cmを測る。胎土:1mmの白色、灰色の砂粒を含む。焼成:良好。色調:赤褐色。6土師器鉢。口縁部がわずかに外反し、底部は丸底を呈す。調整は内外面の両方ともにハケメの後ナデを施す。口径12.0cm、器高6.4cmを測る。胎土:1mm以下の赤褐色粒子を含む。焼成:良好。色調:明赤褐色。7土師器鉢。口縁部がわずかに外反し端部が肥厚する。底部は丸底を呈す。調整は内外面の両方ともに横位のミガキを施す。口径14.0cm、器高6.5cmを測る。胎土:1mm以下の黒色、灰色の粒子を含む。焼成:

良好。色調:明赤褐色。8手捏鉢。調整はユビナデとユビオサエを施す。口径4.7cm、器高2.9cmを測る。胎土:1mm以下の黒色粒子を含む。焼成:良好。色調:明黒褐色。

SD12 (図3)

流路は南北方向である。規模は、長さ8.8m以上、幅0.3m、深さ0.9mを測る。

不定形土坑 (SX)

調査時に遺構番号を付与した不定形土坑のうち、形状及び掘方が判然としないものは報告を割愛した。

SX1 (図4)

平面形は溝状をなしており、溝状遺構の一部とも考えられる。規模は、長さ2.5m以上、幅1.0m、深さ0.4mを測る。

SX6 (図67)

平面形はコーナー状を呈し、竪穴建物の一部と考えられ、SD7はSX6と同一遺構と考えられる。規模は、南北の長さ2.5m以上、東西の長さ2.96m以上、幅0.2~0.7m以上、深さ0.62mを測る。

SX6 出土遺物 (図68)

1 須恵器壺、もしくは壺の胴部片。調整は外面に縦位の平行タタキメを施した後に、カキメを施す。内面の当具痕は半円状を呈す。残高4.2cmを測る。胎土:0.5mm以下の黒色粒子を多量に含む。焼成:やや不良。色調:灰白色。
2 土師器甕。口縁部は緩やかに外反し、胴部は張る。調整は内外の両面ともにナデを施すが、外面には工具痕、内面には指オサエが観察される。口径11.4cm、器高10.0cmを測る。胎土:2mmの石英粒を多量に含む。焼成:良好。色調:にぶい褐色。

SX7・8 (図4)

SX7・8は一連の遺構で、竪穴建物の北壁周溝部の一部と考えら

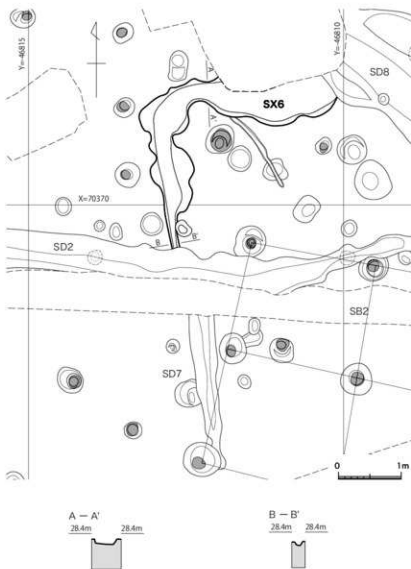


図67 SX6平面図、断面図(1/60)

れる。長さ3.86m以上、幅0.18m、深さ0.03mを測る。

SX9 (図36)

平面形は楕円形を呈し、構造は2段掘り込みをなす。長さ2.0m、幅0.93m、深さ0.32mを測る。

SX9 出土遺物 (図68)

1 弥生土器器台。受部は開き、端部下方が少し突出する。調整は外面にハケメ、内面にはユビナデ、ユビオサエが施され、受部内面は横位のハケメで仕上げる。受部径15.8cm、残高15.1cmを測る。

胎土:1mm大の白色、赤色の粒を含む。焼成:良好。色調:にぶい褐色。

SX10 (図36)

平面形は楕円形を呈す。長さ0.55m、幅0.25mを測る。

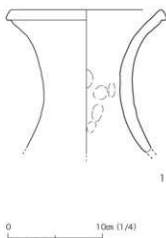
SX11 (図35)

平面形は溝状を呈す。長さ0.35m以上、幅0.2mを測る。

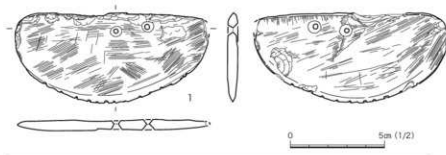
SX6



SX9



SX16



SX17

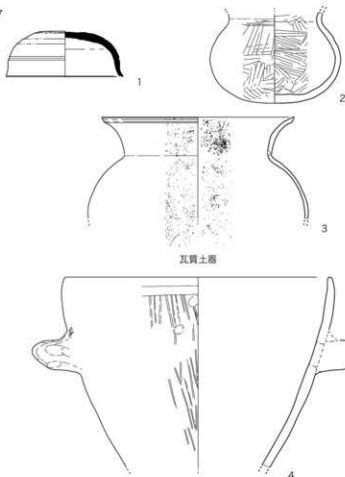


図68 SX6、SX9、SX16、SX17 遺物実測図 (SX9: 1/2) (その他: 1/4)

SX12 (図5)

平面形は不整形、あるいは溝状を呈す。長さ1.55 m以上、幅0.7m、深さ0.11mを測る。

SX15 (図63)

平面形は不整形を呈す。長さ2.3 m以上を測る。竪穴建物の一部か。

SX16 (図30)

平面形は不整形を呈す。規模は、長さ1.02 m以上、幅0.6 m以上、幅0.06 mを測る。溝状遺構の一部か。

SX16 出土遺物 (図68)

1 磨製石庖丁。輝緑凝灰岩製で外湾刃半月形を呈す。孔は両側より穿たれるが、その位置が正面中心より右にずれる。また、背面に

近い孔の位置と正面上部に見られる打製の加工痕から、背面は上方にもう少し幅をもった形と考えられ、本来は、現状より大きな製品であったが、破損等により再生品とした可能性がある。なお、刃部側縁は鋸歯状を呈しており、10箇所以上の細かな抉りが観察される。長さ10.2cm、幅4.75cm、厚さ0.55cm、孔径0.25cmを測る。

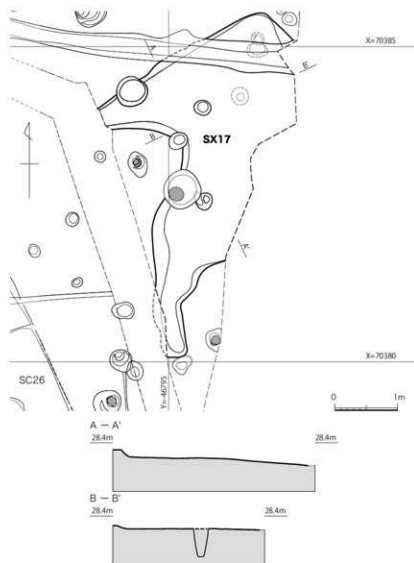


図69 SX17平面図、断面図(1/60)

SX17 (図69)

平面形は不整形を呈す。規模は、長さ1.02m以上、幅0.6m以上、幅0.06mを測る。溝状遺構の一部か。

SX17 出土遺物 (図68)

1 須恵器杯蓋。口縁部は端部が開き、内面に段を有す。器高は高く天井部が丸みを帯びる。口縁部の上部には、1条の沈線を付す。口径12.3cm、器高4.8cmを測る。胎土:0.5~3mmの石英粒を多量に含む。焼成:良好。色調:灰色。2 弥生土器短頸壺。口縁部は緩やかに大きく外反し、胴部は

扁球状を呈すが、底部は平底風となる。調整は、胴部上半にヘラ状工具で縦方向に強いナデを加え、その後、ヨコナデを行う。そのため、工具面の強くへこんだ部分が残し、それが沈線状に見える。胴部下半はナデやミガキが施される。残高9.6cm、胴部最大径15.6cmを測る。胎土:1mmの石英粒を多量に含む。焼成:良好。色調:明褐色。3 朝鮮半島系の瓦質土器広口壺で脚付の可能性もある。口縁部は緩やかに外反し、端部外面に凹線状のラインが2条観察され、断面形が三角形を呈す。胴部は大きく扁球状に膨らむようである。調整は内外の両

面ともにナデにより消されている上に摩滅が進んで判然としない。ただ、表面には斜方向にタタキメのような筋状のラインが見え、内面には円形状の当具痕らしきものも観察される。口径20.5cm、残高6.8cm、胴部最大径23.5cmを測る。胎土:1mm以下の乳白色、黒色粒子を含む。焼成:良好(軟質)。色調:浅黄色。原三国後期のものか。4 土師器甕。口縁部はわずかに内湾し、短めの把手は直線状を呈す。調整は外面に粗い幅広のハケメの後にナデ、内面にはハケメの後にナデを施す。口径14.1cm、残高20.0cmを測る。胎土:1mm以下の褐色粒子を含む。焼成:良好。色調:橙色。

SX19 (図49)

平面形は円形状を呈す。SC49に切られる。規模は長さ2.0m以上、幅2.1m、深さ0.13mを測る。

SX20 (図4)

平面形はいびつな方形を呈すが、攪乱により遺構の大半が失われている。長さ1.7m以上、幅2.8m以上、深さ0.13mを測る。

SX22 (図58)

溝状の遺構で、SX23を切る。西側を攪乱が大きく切っている。長さ1.7m、幅0.5m、深さ0.14mを測る。

SX23 (図58)

溝状の遺構で、SX22に西側を切られている。長さ2.18m、幅4.3m、深さ0.10mを測る。

SP 出土遺物

SP2 (図70)

1 弥生土器壺。胴部は球形をなすが長胴気味となる。胴部中央よりやや下方に1条の三角突帯を配す。残高20.7cmを測る。胎土:1~3mmの灰褐色、褐色の砂粒を含む。焼成:良好。色調:橙色。
2 弥生土器壺。胴部は球形をなす。胴部に1条のコ字状突帯を配す。残高5.3cmを測る。胎土:1~3mmの灰褐色、褐色の砂粒を含む。焼成:良好。色調:橙色。

SP23 (図70)

弥生土器甕。底部はレンズ状の平底を呈す。調整は外面にハケメ、内面にはナデを施す。残高8.3cm、底径5.2cmを測る。胎土:3mm以下の黒色、灰色の砂

粒を含む。焼成:良好。色調:灰黄褐色。

SP29 (図70)

須恵器甕。頸部に櫛描波状文を施す。残高2.0cmを測る。胎土:2mm大の灰白色粒を含む。焼成:良好。色調:灰色。

SP32 (図70)

弥生土器甕。底部は丸みを帯びた平底を呈す。調整は外面にハケメとナデを施し、内面にはハケメとユビオサエが観察される。残高2.1cm、底径3.0cmを測る。胎土:1mm以下の黒色、乳白色粒子を含む。焼成:良好。色調:にぶい赤褐色。

SP97 (図70)

弥生土器鉢。口縁部は短く、く

の字に強く開く。調整は摩滅のため判然としないが一部に丹塗りの痕跡が観察される。残高4.8cmを測る。胎土:1mm以下の赤色、黒色、白色の粒子を含む。焼成:良好。色調:赤褐色。

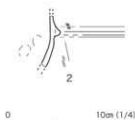
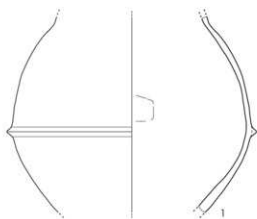
SP99 (図70)

縄文土器深鉢。調整は胴部外面に横位の条痕文、内面にはナデが施される。残高5.7cmを測る。胎土:2mm以下の黒色、乳白色の砂粒を含む。焼成:良好。色調:灰黄褐色。

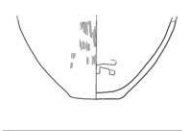
SP141 (図70)

1 弥生土器甕。底部は若干丸みのある平底を呈す。調整は内外の両面ともにナデを施す。残高7.7cm、底径5.8cmを測る。胎土:1~2mmの黒色、白色の砂粒を含む。焼成:良好。色調:灰

SP2



SP23



SP29



SP97



SP99



SP32



SP141

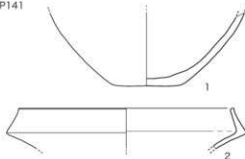


図70 SP2、SP23、SP29、SP32、SP97、SP99、SP141 出土遺物実測図(1/4)

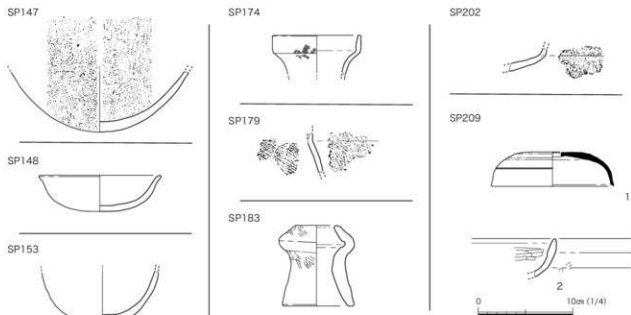


図71 SP147, SP148, SP153, SP174, SP179, SP183, SP202, SP209 出土遺物実測図 (1/4)

黄褐色。2 弥生土器壺。口縁部は内傾し複合口縁を呈す。調整はナデを施す。口径 22.8cm、残高 4.3cm を測る。胎土: 1 ~ 2mm の白色、灰褐色の砂粒を多量に含む。焼成: 良好。色調: 明赤褐色。

SP147 (図 71)

土師器甕。底部は丸底を呈す。調整は内外の両面にハケメを施す。残高 6.4cm を測る。胎土: 1 ~ 3mm の白色、乳白色、赤色の砂粒を含む。焼成: 良好。色調: 橙色。

SP148 (図 71)

土師器杯。口縁部がわずかに外反し、底部は丸底を呈す。調整は摩滅のため不明。口径 10.5cm、器高 3.8cm を測る。胎土: 1 ~ 2mm の黒色、白色の砂粒を含む。焼成: 良好。色調: 明赤褐色。

SP153 (図 71)

土師器甕。底部は丸底を呈す。

SP174



SP179



SP183



調整は摩滅のため不明。残高 5.2cm を測る。胎土: 1mm 以下の黒色、白色粒子を含む。焼成: 良好。色調: 橙色。

SP174 (図 71)

土師器壺。口縁部は直立する複合口縁を呈す。調整は外面にハケメ、内面にはナデを施す。口径 9.2cm、残高 4.1cm を測る。胎土: 1mm 以下の半透明粒子を含む。焼成: 良好。色調: にぶい黄橙色。

SP179 (図 71)

弥生土器、もしくは土師器の甕。肩部は緩やかなで肩をなす。調整は内外の両面にハケメを施す。残高 4.1cm を測る。胎土: 1mm 以下の白色粒子を含む。焼成: 良好。色調: 黒褐色。

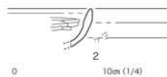
SP183 (図 71)

弥生土器器台。袋状口縁で短脚を呈す。調整は外面にナデを施し

SP202



SP209



後にミガキを加え、内面にはナデを施す。口径 4.3cm、器高 8.5cm を測る。胎土: 1 ~ 2mm の乳白色、赤色粒等を含む。焼成: 良好。色調: にぶい橙色。

SP202 (図 71)

弥生土器高杯。口縁部と体部の接点が屈折する。調整は外面にハケメを施した後ミガキを加え、内面にはナデの後にミガキを施す。残高 2.5cm を測る。胎土: 雲母、角閃石を微量含む。焼成: 良好。色調: 浅黄橙色。

SP209 (図 71)

1 須恵器杯蓋。全体に扁平気味で、口縁部と体部の境に 1 条の沈線有し、端部内面が段状を呈す。調整は天井部外面には回転ヘラケズリ、口縁部付近にはヨコナデを施す。内面には横ナデ、天井部にはナデを施す。口径 12.9cm、器高 3.6cm を測る。胎土: 2mm 以下の白色粒を含む。焼成: 良好。色調: 青灰色。2 土師器碗。口縁

SP214



SP218

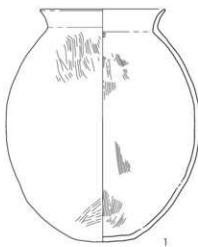


SP241

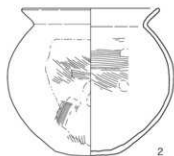


甕内系

SP244



1

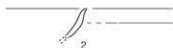


2

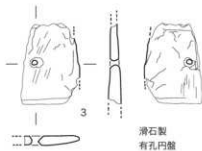
SP300



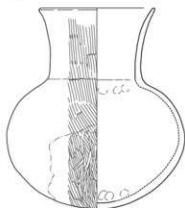
1



2

滑石製
有孔円盤

SP307



SP315



SP319



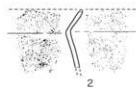
SP387



SP385



1



2

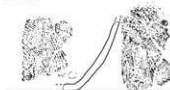
SP392



SP424



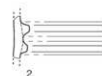
SP433



SP450



1



2

図72 SP214、SP218、SP241、SP244、SP300、SP307、SP315、SP319、SP385、SP387、
SP392、SP424、SP433、SP450 出土遺物実測図 (SP300-3: 1/1) (その他: 1/4)

部がやや肥厚する。調整は外面にナデ、内面にはナデとミガキを施す。残高4.05cmを測る。胎土：微砂粒を含む。焼成：良好。色調：赤褐色。

SP214 (図 72)

弥生土器高杯。大きく外反した脚部片で、端部が屈折する。調整は外面にハケメの後にナデを加え、内面にはハケメを施す。残高4.2cmを測る。胎土：1mm以下の微砂粒を含む。焼成：良い。色調：褐色。

SP218 (図 72)

フイゴの羽口片。先端部に鉄分の付着。長さ5.3cm、幅3.3cm、厚さ1.6cmを測る。

SP241 (図 72)

土師器甕（織内系）。口縁部はくの字状で、肩部はなで肩をなす。調整は外面にハケメの後ナデを施し、内面には頸部直下よりヘラケズリを行う。口径12.0cm、残高7.2cmを測る。胎土：1～2mmの半透明、白色、赤色の砂粒を含む。焼成：良好。色調：橙色。

SP244 (図 72)

1 土師器壺。口縁部は外反し、胴部は楕円形状で長胴気味となる。底部はレンズ状の平底を呈す。調整は内外の両面にハケメを施した後、ナデを加える。口径13.0cm、器高24.6cmを測る。胎土：1～2mmの赤褐色、黒灰色の粒を含む。焼成：良好。色調：にぶい黄橙色。2 土師器甕。口縁部はくの字状で、胴部が球形

をなす。底部は丸底気味の平底を呈す。調整は内外の両面にハケメを施す。口径14.6cm、器高15.6cm、底径7.0cmを測る。胎土：1～2mmの長形を含む。焼成：良好。色調：にぶい橙色。

SP300 (図 72)

1 土師器甕。口縁部片で、外反する。調整は、外面に斜位のハケメ、内面にはナデを施す。残高3.1cmを測る。胎土：1～3mmの白色、乳白色粒を含む。焼成：良好。色調：明赤褐色。2 土師器鉢。口縁部はやや開き、端部が細く鋭利となる。調整は外面にナデを加える。残高3.1cmを測る。胎土：1mmの白色粒を少量含む。焼成：良好。色調：黒色。3 滑石製有孔円盤の未製品。長軸側の両端は擦切りの状態で未研磨。孔は連結状を呈し、穿孔が2度行なわれたようである。長さ2.2cm、幅1.5cm、厚さ0.2cmを測る。

SP307 (図 72)

土師器長頸壺。口縁部は外反し、胴部は扁球状で、底部は丸底を呈す。調整は外面に縦位のハケメ、内面にはナデを施す。頸部内面の屈折部には、ユビオサエが観察される。口径12.0cm、器高21.2cmを測る。胎土：1mm以下の微粒子と2mmの灰白色粒を含む。焼成：良好。色調：浅灰色。

SP315 (図 72)

弥生土器甕か。口縁端部が若干肥厚する。調整は内外の両面ともにナデを施し、外面下方にはミガキを加える。残高2.4cmを測る。胎土：1mmの白色砂粒を微量含

む。焼成：良好。色調：黒色。

SP319 (図 72)

弥生土器甕。底部は丸底風の平底を呈す。調整は外面にハケメを施す。残高4.8cm、底径4.6cmを測る。胎土：1～3mmの白色粒を含む。焼成：良好。色調：にぶい橙色。

SP385 (図 72)

1 弥生土器甕。底部はレンズ状の平底を呈す。調整は磨滅により不明。残高3.4cm、底径5.2cmを測る。胎土：1～2mmの白色、茶色の砂粒を含む。焼成：良好。色調：橙色。2 土師器甕。口縁部はくの字状を呈し、器壁は薄い。調整は外面にハケメ、内面にはナデを施す。残高5.9cmを測る。胎土：1～1.5mmの赤色、黒色の粒を含む。焼成：良好。色調：明赤褐色。

SP387 (図 72)

弥生土器壺。底部は平底を呈し、胴部がかなり張ると想定する。調整は外面にナデ、内面にはハケメを施す。残高4.8cm、底径9.0cmを測る。胎土：1～2mmの赤色、白色の砂粒を含む。焼成：良好。色調：黄橙色。

SP392 (図 72)

土師器鉢。胴部上半がやや屈折し、丸底を呈すと想定する。調整は内外の両面ともにナデを施す。残高4.5cmを測る。胎土：1mm以下の乳白色粒子を含む。焼成：良好。色調：橙色。

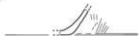
SP473



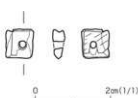
SP514



SP524



SP525



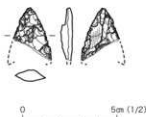
SP483



SP527



SP540



SP545



SP547



SP552

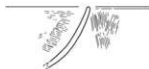


図 73 SP473、SP483、SP514、SP524、SP525、SP527、SP540、SP545、SP547、SP552
(SP525 : 1/1) (SP540 : 1/2) (その他 : 1/4)

SP424 (図 72)

須恵器高杯。脚部は屈折して開き、端部が上下に突出する。調整は内外の両面ともにヨコナデを施す。残高1.2cmを測る。胎土:1mmの乳白色粒を含む。焼成:良好。色調:灰色。

SP433 (図 72)

弥生土器甕。底部は平底を呈し、胴部が脹るものと想定する。調整は内外の両面ともにハケメを施す。残高7.3cmを測る。胎土:1mmの白色粒を微量含む。焼成:良好。色調:灰黄褐色。

SP450 (図 72)

1 弥生土器甕。底部は平底を呈す。調整は内面にナデが観察され

る。残高3.4cmを測る。胎土:1mmの白色粒を微量含む。焼成:良好。色調:灰黄褐色。2 弥生土器壺。胴部に2条のコ字状突帯を配す。調整は内外の両面にナデを施す。残高4.4cmを測る。胎土:1~4mmの乳白色粒を多量に含む。焼成:良好。色調:浅黄橙色。

SP473 (図 73)

弥生土器の器台か、台付鉢の脚部。調整は外面上部にユビナデ、下半にハケメを施し、内面にはハラケズリの後ナデを加える。残高8.25cmを測る。胎土:1mm以下の白色粒子を含む。焼成:良好。色調:橙色。

SP483 (図 73)

弥生土器高杯。口縁部は外反し、

体部との接点が屈折する。調整は磨減して不明。口径31.8cm、残高6.4cmを測る。胎土:1mm以下の白色粒子を含む。焼成:良好。色調:橙色。

SP514 (図 73)

手握杯。全体が半球状を呈す。調整は内外の両面ともにユビナデ、ユビオサエを施す。口径4.1cm、器高3.9cmを測る。胎土:1~3mmの白色粒を含む。焼成:良好。色調:明赤褐色。

SP524 (図 73)

弥生土器甕。底部は平底か。調整は外面にハケメ、内面にはナデを施す。残高2.7cmを測る。胎土:1mmの雲母、乳白色、半透明の粒を含む。焼成:良好。色調:

B区包含層

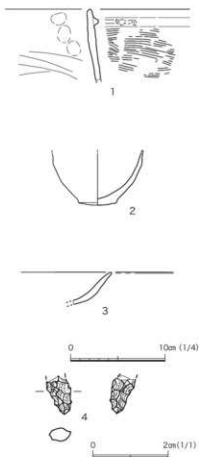


図74 B区・C区包含層、客土出土遺物実測図
(B区包-4: 1/1) (C区: 1/2) (客土: 1/3) (その他: 1/4)

にぶい橙色。

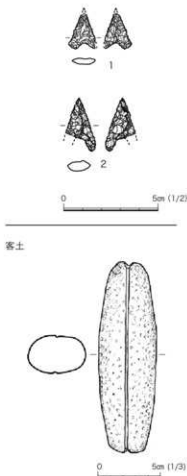
SP525 (図73)

滑石製平玉の未製品。四方を擦切って方形に仕上げる。長さ0.76cm、幅0.75cm、厚さ0.35cm、孔径0.20～0.23cmを測る。

SP527 (図73)

弥生土器器台か。受部は脚の上部を肥厚させたもので、脚部径も小さく全体に細い。そのスタイルから高杯脚部の可能性もある。受部径4.8cm、残高6.2cmを測る。胎土:1mm以下の赤色、半透明の粒子を含む。焼成:良好。色調:

C区包含層



客土

橙色。

SP540 (図73)

打製石鏃。黒曜石製。脚部を失っているが、厚みがあってやや大型の部類になるうか。長さ2.8cm、幅2.3cm、厚さ0.6cmを測る。

SP545 (図73)

弥生土器器台。脚部は外方に開き、端部が咽丸形状を呈す。調整は外面にハケメを施し、内面にはハケメの後ナデを加える。残高7.5cm、底径12.4cmを測る。胎土:1mmの赤色、白色の粒を含む。焼成:良好。色調:橙色。

SP547 (図73)

土師器壺。口縁部は外反し、頸部内面が緩やかに湾曲する。調整は内外の両面ともにナデを施す。口径8.6cm、残高5.0cmを測る。胎土:1mmの乳白色の粒を含む。焼成:良好。色調:橙色。

SP552 (図73)

土師器鉢。口縁部は緩やかに外湾し、端部を丸く納める。調整は内外の両面ともにハケメを施す。残高6.4cmを測る。胎土:1mmの乳白色の粒と雲母の微粒子を含む。焼成:良好。色調:橙色、黒褐色。

| その他出土遺物

包含層は調査区の中央から南側約3分の1程に堆積しており、厚さは最大で約30cmを測る。検出箇所によってB区とC区に区分しているが、同一の包含層である。

B区包含層 (図74)

1 縄文土器突帯文甕。口縁部は、わずかに内傾し、端部から1cm下方にキザミメ突帯文を配す。調整は、内外の両面ともに横位の条痕文を施すが、内面の上部はナデやユビオサエが観察される。残高7.4cmを測る。胎土1mm以下の白色、乳白色粒子を多く含む。焼成:良好。色調:褐灰色。2 弥生土器鉢。底部が突出したレンズ状を呈す。調整は、内外の両面ともにナデを施す。残高5.5cm、底径4.0cmを測る。胎土:1mm以下

の赤色等粒子を多量に含む。焼成：良好。色調：明赤褐色。3 弥生土器鉢。口縁部は大きく開き、体部外面が緩やかに屈折する。調整は、内外の両面ともにナデを施す。残高 2.5cm を測る。胎土：1mm 以下の赤色等粒子を多量に含む。焼成：良好。色調：明赤褐色。4 打製石鏡。黒曜石製の脚部片。先端は鋭利。長さ 0.9cm、幅 0.6cm、厚さ 0.3cm を測る。

C 区包含層 (図 74)

1 打製石鏡。黒曜石製の無茎鏡。脚部は非対称で、一方は先端が角張り、もう一方は三角形状を呈す。長さ 1.9cm、幅 1.4cm、厚さ 0.3cm を測る。2 打製石鏡。黒曜石の無茎鏡で、脚部先端は丸みを帯び、挟りがやや幅広を呈す。長さ 2.8 cm、幅 1.6cm、厚さ 0.55cm を測る。

客土中 (図 74)

石鍾。粗悪な滑石、あるいは蛇紋岩系の石材使用か。胴部が張る紡錘形を呈し、長軸に沿って 1 条の溝を全周させた、無孔一溝タイプで、全体を敲打によって仕上げている。長さ 15.2cm、幅 4.5cm、重さ 336 g を測り、大型の部類となるうか。

調査に直接携わっていないため、客土と判断された土壌が、調査区内やその近郊のもの、あるいは、全く異なる地域のものか不明だが、資料として提示すべきものと判断し掲載した。

おわりに

今回、調査区内では方形プランの竪穴建物 (SC) を中心に、掘立柱建物 (SB) 群、土坑 (SK) 群、溝状遺構 (SD)、その他の遺構 (SX)、ピット (SP) 群が検出されている。検出遺構の中心となる竪穴建物は、調査区の中央部と西側に集中するようで、特に、中央部の建物の切り合いは著しい。溝状遺構は、竪穴建物群や土坑群を切っており、比較的后出の遺構と考えられる。

なお、調査区東側は比高がやや高く、残存する遺構もほとんどピット群である。そのように、竪穴建物や土坑等が存在しない状況は、その範囲が集落の東側を画す領域であったと考えられる。したがって、竪穴建物群等の集中は、中央部から西側にかけての範囲に限定することは可能であろう。掘立柱建物は、2 棟のみ検出されており、両者の方位はやや異なるようである。柱穴の位置からすると、SB1 は側柱、SB2 は総柱の建物となる。

土坑については、一部に竪穴建物の屋内土坑を含んでおり、小規模なものが大多数を占める。多くは竪穴建物群とともに生活遺構として捉えられる。

1. 出土遺物について

①朝鮮半島系の土器

当遺跡では、SX17 をはじめ、SK37・SD8 の 3 箇所出土しており、全て破片資料であるが、3 個体ほど確認される。最も確実な SX17 (3) [図 68] は、口縁部が大きく外反する広口壺で、脚付の

可能性を有す。色調が浅黄色を呈した軟質の瓦質土器で、表面は丁寧なナデによりタタキメの痕跡がわずかに観察される程度である。原三国の後期に位置付けられようか⁽⁷⁾。共伴した弥生土器 (SX17-2) [図 68] は、扁球形の胴部で丸底に近い形状の短頸壺である。福岡県筑後市狐塚遺跡 1 号竪穴建物出土の丸底壺⁽⁸⁾ に類似するもので、弥生後期後半～終末頃に位置付けられる。

SK37 (2) [図 56] は、表面をナデ消しているが、一部に格子状のタタキメが観察され、内面にはヘラ状工具等による丁寧なナデを施す。

また、SD8 (4～7) [図 60] は、格子状のタタキメが表面に見受けられ、内面には丁寧なナデを施す。いずれも、灰白色で軟質気味のものである。

SC23 (6) [図 29] は、弥生土器壺の把手と考えられ、横長の把手に円孔を穿つものである。時期は弥生後期末頃に属しており、朝鮮半島系のもを真似て作成した模倣土器⁽⁹⁾の可能性を考えたい。

以上、半島系土器の時期について、SX17 例、及び SC23 例から弥生時代後期末頃としておく。

粕屋町が位置する多々良川中流域では、1983 年～1984 年に福岡市東区多々良の多々良田遺跡の調査において、軟質土器と縄文文の瓦質土器の破片が出土⁽¹⁰⁾した。2016 年の戸原寺田遺跡第 1 地点⁽¹¹⁾の調査において、平底の鉢底部片が出土。2020 年の阿恵古屋敷遺跡第 2 地点⁽¹²⁾では、薬浪系瓦質土器の鉢や無文系土器等が出土した。また、1989 年長者原屋敷前遺跡や 2020 年戸原寺田遺跡第 2 地点⁽¹³⁾の調査において、陶質土器が出土してい

る。

近年、多々良川沿いの低丘陵や微高地を対象に調査する機会が増えるとともに、半島系遺物の出土が増加しており、多々良川流域と朝鮮半島との交流を示す資料が発見されつつある。

② 柄殻入りの弥生土器片

SK47 出土 (1) [図 59] で、弥生時代後期末頃の甕の下半部片か。供伴資料はなく時期は判断しがたい。周辺遺構の出土土器はいずれも弥生時代後期末頃のもので、SK47 自体はピットに切られるが、弥生時代後期後半以降の可能性が高い。

胎土には、多量の初殻片が混入しており、初殻を混和剤として使用している可能性がある。焼成は不良で軟質。色調は黒褐色で、焼成不良土器の断面で観察される黒色の壁面に近い。同様に初殻を混和剤に使用した土器資料は、内橋坪見遺跡 3 次調査⁽¹⁴⁾で出土した弥生土器の底部資料がある。時間的には弥生時代後期かやや遡る可能性があり、貴重な資料である。今後、SK47 出土土器も専門的な観察と分析が必要となる。

③ 青銅製鋤先

SC37 出土 (14) [図 39] で、弥生時代後期末頃と考えられる。刃部中央の破片で、長さ 4.8cm 程の小片である。長さ 16.5cm の、泥岩製の砥石が共存する。

柏屋町では過去に 2 点の青銅製鋤先が出土している。1 点目は、内橋登り上り遺跡第 1 地点⁽¹⁵⁾で、7 号石棺墓内から勾玉 1 点、管玉 9 点とともに出土した。1/2 程度の残存で、長さ 4.4cm を測

る。全体的に脆弱で、袋部と刃込部の一部が残る。2 点目は、内橋坪見遺跡 1 次調査⁽¹⁶⁾で、SD1 から出土した。1/2 程度の残存で、長さ 4.9cm を測る。全体的に脆弱で袋部と刃込部が残る。

④ 鉄製穂摘具 (手鎌)

SC21 出土 (11) [図 25] で、本体は、2～3mm の薄い鉄板の両端を折り曲げて作成しており、下部は本体に接し袋状を呈す。長さ 7.9cm を測り、途中より折れているが、ほぼ完形で復元できる。全体のサイズや鉄板の厚さから、穂摘具と見込んでいるが、両端部が袋状を呈すことから鋤先の可能性も残す。

SC21 は出土遺物から古墳時代後期後半と考えられるが、当遺物の形状等は弥生期の特徴⁽¹⁷⁾を示し、出土した弥生土器 (7) [図 25] とともに、弥生時代後期末頃の時期と判断される。

なお、当遺跡からは同時期頃と考えられる石廂丁を 4 点検出しており、穂摘具としての割合は、石廂丁 4 に対して鉄器 1 となる。弥生時代後期末頃の当地域における鉄製穂摘具の普及状況を示す 1 例となろう。

⑤ 獣脚状土製品

SC20 出土 (14) [図 23] で、共存遺物から弥生時代後期末頃と考えられる。しかし、遺構の東側を SD8 (古墳時代後期後半～末頃) に切られており、調査時に遺物が混入した可能性も有するが、SC20 出土遺物を全て確認しても古墳時代後期に属する遺物の混入は確認されなかった。

当遺物は、獣脚状を呈し、4 つ

足で立つ動物を模した可能性があり、立像本体の右前脚に相当すると思われる。外面と内面で、仕上げ技術の違いが確認される。目に触れる外面側には、右前方にユビオサエによる整形が見られるが、中央と左下部に複数の筋目状の沈線が施され、筋肉や毛並を表現しているように見える。対して、目に触れにくい内側に当たる内面は、ユビオサエ等による単純な整形のみであり、その違いは明確である。形状は、体部に接合する肩部分、脛付近、足首から下の三つ部分が表現される。足裏の表現は、楕円形状の輪郭の内面はわずかに凹面をなし、蹄状にも見える。長さ 6.5cm という寸法は、長足の動物で、形状や長さから馬の右前脚に近似するが、弥生時代後期末という時期は、馬の存在に結びつかない。鹿の足では形状が異なり⁽¹⁸⁾、疑問が残る資料であり、今後の検討を要する。

⑥ 褐灰色泥岩製の砥石

当遺跡から 17 点の砥石が出土している。それらを大きく分けると、褐灰色の泥岩 12 点、褐灰色の砂岩 1 点。灰白色や浅黄色の砂岩や花崗岩系のもので 4 点となる。いずれもきめ細か仕上げ砥石である。それらの中で、褐灰色泥岩製の砥石が 12 点と最も多く、褐灰色砂岩とした 1 点も同類と考えられる。SC3 出土 (5, 6) [図 7] の 2 点は、長軸に沿った自然のヒビがライン状に存在する。特に、SC3 (6) は、発掘用具の打撃を 3 箇所に受けたようで分割状態にあるが、衝撃によって本体内のヒビからも砕けており、砥石に使用した褐灰色泥岩素材自体、内部にヒビが存在する材質と判断される。

そこで、SC3出土の2点を除く、褐灰色泥岩製10点を観察すると、SC49(1) [図48]を除く9点が、本体のヒビから破損した破片状で、しかも、SC37(15) [図39]とSC47(9) [図48]の接合が判明した。また、接合例を除く7点については接合関係が明確ではないが、本来、同一個体であったものが、本体のヒビから砕けたものと判断される。下記に同一個体と考えられる砥石の破片出土遺構(接合資料を含む)を示す。

SC20(16) [図23]、SC23(15) [図29]、SC31(3) [図37]、SC37(15) [図39] ⇔ SC47(9) [図48]、SC46(1) [図48]、SC49(1) [図48]、SK4(1) [図52]、SK43(2) [図59]、SK48(1) [図59]

上記は、いずれも破片資料で、破砕面を砥石として使用した痕跡がなく、破砕後の破片をそのまま所持していた可能性も考えられる。ただし、SK43、SK48の2点に関しては、破砕面に研磨痕が見受けられるため、一部使用例も存在するとことになる。それらの分布を観察すると、中央部の竪穴建物群でも、南側に集中するようである。基本的に建物1軒、土坑1基から各1点ずつ出土しており、それらは同時期の遺構群である可能性が高い⁽¹⁹⁾。

問題は、内部にヒビを有し破損し易いような粗悪な砥石を使用する理由と、一旦破損した砥石片を分散所有する意味で、今後の課題として吟味する必要がある。

⑦特殊な須恵器について

SC44出土(8) [図46]は極

めて珍しい資料で、装飾須恵器の装飾小壺である。通常、古墳に副葬されるべき器種で、集落から発見されることは極めて稀と考えられる。当資料は、器壁から小壺のみが剥がれたのではなく、本体が破損して割れた状態の中、小壺のみを採取したものであろう。その後、小壺の底部に張り付く本体側の器壁を、その周囲から打ち欠いて、小壺の底部と同じ大きさの平底状に仕上げ、自立するよう調整し、壺として小形の容器に再生している。しかし、SC44の住人が小壺をどのような形で、何のために入手したかについては不明である。

装飾須恵器出土の地名表⁽²⁰⁾によれば、福岡県糟屋郡久山町久原で装飾須恵器の小壺が採集されており、現在「田中幸雄寄贈品」として九州歴史資料館に所蔵されている⁽²¹⁾。その画像と比較すると、形状は近いが、無文で底部が傾斜することから、異なる装飾須恵器の装飾小壺と分かる。出土地等の詳細は不明だが、部木原遺跡を含む周辺に、装飾付須恵器が2個体存在した可能性が考えられる。

なお、先の地名表によれば、福岡県内で34点出土しており、30点古墳、1点が窯跡、3点が不明となっており、住居跡の出土例はない。そのため、当遺跡周辺で装飾付須恵器を埋納した古墳が存在していた可能性が浮上する。

2. 遺構の時期と集落の動向

A 各遺構の時期

・弥生時代の竪穴建物

SC1: 弥生時代後期中頃～後半。

SC12: 弥生時代後期後半～末。

SC4・SC5・SC20・SC24・

SC26・SC29・SC35・SC37・SC47: 弥生時代後期末。

SC42: 弥生時代後期末～古墳時代初頃。

・弥生時代の土坑

SK20: 弥生時代後期中頃。

SK11・SK26: 弥生時代後期後半～末。

SK15: 弥生時代後期末～古墳時代初頃。

・弥生時代の溝状遺構

SD10: 弥生後期末。

・古墳時代の竪穴建物

SC6・SC16・SC34: 古墳時代中期。

SC9・SC44: 古墳時代後期中頃前後。

SC3・SC10・SC21・SC43: 古墳時代後期後半。

・古墳時代の土坑

SK7・SK14・SK17: 古墳時代後期後半。

・古墳時代の溝状遺構

SD11: 古墳時代中期後半。

SD5: 古墳時代後期中頃～後半。

SD1・SD8: 古墳時代後期後半～末。

・その他の遺構

SX9: 弥生時代後期後半。

SX6: 古墳時代後期後半。

SX16: 弥生時代後期後半～末。

SX17-2・3: 弥生時代後期後半～末。

SX17-1・4: 古墳時代後期後半～末。

以上、竪穴建物群の造営は、弥生時代後期後半前後に開始され、後期末頃に最盛期となる。しかし、古墳時代初頃頃には減少し、終焉を迎える。土坑群は、竪穴建物群の周囲を中心に分布しており、互いに関連する生活関連の遺構と考えられる。また、ピット群は調査区全体を覆うように無数に存在するが、多くは遺構を切って存在しており、全体的に弥生時代以降の所産であろう。

竪穴建物群の造営は、古墳時代

初頭をもって一旦終了するが、古墳時代中期頃から再び開始される。そして、古墳時代後期の後半頃には造営のピークとなり、後期末頃に終焉を迎える。溝状遺構は、古墳時代後期後半頃の堅穴建物群造営のピークと連動するようで、ともに同様の展開を辿る。

ここで注目されるのは、集落形成期において古墳時代前期の遺構が見つかっていない点であろう。具体的には、古墳時代前期の畿内・山陰系といった外来系土器を伴う遺構がなく、わずかにSP241、SP244出土の土器2点がその候補となるか。

当遺跡から出土する土器構成は在地系で、外来系をほぼ含まない状況にある。これは、外来系土器群の浸透以前を示すものではなく、弥生時代後期末～古墳時代初頭期における地域的な在り方と考えられる。それは、在地系土器群の壺や甕の特徴として、底部がほぼ丸底化したもの、複合口縁壺の口縁部形状に山陰系の影響を示すものが存在しており、すでに、外来系土器群の影響が進んでいる状況下にある。つまり、部木原遺跡の古墳時代前期は、空白期間と捉えることが出来る。やがて、古墳時代中期になると、再び集落の形成が始まり、古墳時代後期後半～末頃まで継続する。

B 周辺の集落遺跡

当遺跡西側地区に、蒲田部木原遺跡A・B・Cの3地点⁽²²⁾、蒲田部木原遺跡群6次調査地点があり、西北地区には、蒲田・水ヶ元遺跡⁽²³⁾が位置する。

蒲田部木原遺跡C地点は、県道35号線を挟んで西側200m付近とほぼ隣接する。4軒の堅穴建

物が検出され、いずれも古墳時代中期末～後期前半に位置付けられる。弥生時代後期後半～末頃の遺構は確認されていない。

蒲田部木原遺跡B地点は、県道35号線を挟んで南西側250m付近に位置する。堅穴建物12軒、掘立柱建物6棟、土坑等22基が検出される。8号堅穴建物1軒のみが、弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器を出土しており、当遺跡のSC14、SC23の時期と重なる。しかし、その他はいずれも古墳時代中期～後期前半に位置付けられる。

蒲田部木原遺跡A地点は、県道35号線を挟んで南西側450m付近に位置する。堅穴建物7軒、土坑10基、溝7条が検出される。1・2号堅穴建物から古墳時代後期前半の土器が検出されるが、その他は、古墳時代後期後半～末頃に位置付けられる。

当遺跡の西側に隣接する蒲田部木原遺跡では、堅穴建物の1軒のみ弥生時代後期末～古墳時代初頭に位置付けられるが、堅穴建物を含め大多数の遺構は、古墳時代中期～後期に属する。集落全体としては、部木原遺跡より後出の遺跡で、古墳時代中期における部木原遺跡の再形成時において関係深い集落となろう。

蒲田・水ヶ元遺跡は、蒲田部木原遺跡の北側に位置しており、当遺跡の北西300m付近に位置する。

蒲田・水ヶ元遺跡I地点は、堅穴建物4軒、掘立柱建物3棟が検出される。3号堅穴建物が弥生時代後期末頃に位置付けられ、1号堅穴建物は古墳時代前期の土器器を伴う。

蒲田・水ヶ元遺跡II地点は、複数の堅穴建物や環濠を伴う掘立柱

建物が存在する。堅穴建物28軒、掘立柱建物2棟、土坑等が検出された。堅穴建物のほとんどは、弥生時代後期後半～末頃に所属するが、23・28・31号の3軒については、古墳時代前期の土器器を伴うことが分かる。中でも、環濠を伴う掘立柱建物は、弥生時代後期中期に相当し、遺構群の形成初期に位置付けられよう。

蒲田・水ヶ元遺跡III地点は、弥生時代後期後半～末と古墳時代初頭前後の方形周溝墓2基のみが検出された。

蒲田・水ヶ元遺跡IV地点は、堅穴建物5軒、掘立柱建物1棟、甕棺墓34基等が検出された。建物は全て古墳時代後期末以降のものである。甕棺墓は弥生時代中期中頃の須玖式に相当しよう。

蒲田部水ヶ元遺跡では、II地点を中心に弥生時代後期末前後の堅穴建物が集中し群を形成しており、部木原遺跡や水ヶ元両遺跡は、同様の集落と捉えられる。

C 弥生集落の展開

集落の展開を見ると、部木原遺跡と隣接する蒲田・水ヶ元遺跡II地点が中核となり、弥生時代後期後半頃に集落の形成が開始され、弥生時代後期末頃に最盛期となる。両遺跡は隣接しており、ともに拡大化するが、集落規模において、2群の堅穴建物群から構成される部木原遺跡の方が大きく、より中心的と考えられる。

部木原遺跡では、弥生時代後期末の最盛期を過ぎて古墳時代初頭頃になると、集落の形成は下火となり、終焉期を迎える。この時期の堅穴建物から得られる土器は、畿内や山陰系外来土器の影響を示しながらも、いずれも在地系土器

に限られ、外来系の土器群を伴う竪穴建物は検出されない。その後、古墳時代前期の遺構は検出されず集落は廃絶し、その頃の様相を追うことは出来ない。

一方、蒲田・水ヶ元遺跡は、中心集落ではないが、I、II地点を中心に外来系の土師器によって構成される竪穴建物が存在しており、古墳時代初頭から前期へと集落の継続が認められる。さらに、集落の領域内であるIII地点には、墳墓の形成が認められるが、そこには在地系の石棺墓ではなく、方形周溝墓という新たな墳墓様式を採用する。特に、その時期の建物として、環濠内掘立柱遺構(24)と称される、特殊な構造の掘立柱建物が確認されている。それは、幅1.6m、深さ0.5mの周溝が環濠状に廻りその中に、2間×6間の掘立柱建物が建てられる。建物は総柱の様相で、桁行7.47m、梁行2.67mを測る。周溝の形状は方形を呈し、南側が途切れており、出入口と考えられている。また、建物と周溝の途切れた部分との間には空間があり、広場的な状況を呈す。建物北側の環濠内から多くの土器が出土するが、全て在地系土器群で構成される。

このように、蒲田・水ヶ元遺跡では、弥生時代後期後半～末頃に、特殊な建物や新しい墳墓様式を採用しており、部木原遺跡には見受けられない展開が見られる。その後、蒲田・水ヶ元遺跡では、竪穴建物等の継続が認められるが、中心的な集落であった部木原遺跡は、廃絶の道をたどるようである。

なお、集落の動向を探るには、周辺の墳墓の様相と展開を踏まえ

る必要があるが、現段階ではそこまで取り込むことが出来ない。後日、改めて述べたいと考える。

本報告に際し、福岡大学名誉教授 武末純一氏、春日市教育委員会 井上義也氏には、貴重なご意見やご教示を賜りました。末筆ながら、記して感謝申し上げます。

註

- (1) 福岡市教育委員会・蒲田・水ヶ元遺跡調査会 1996「蒲田の水ヶ元遺跡—九州自動車道福岡インターチェンジ東隣(株) 駒井鉄工所用地の調査」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第491集
- (2) 粕屋町教育委員会 1985「蒲田部木原遺跡」『粕屋町文化財調査報告書』第2集、福岡市教育委員会 2000「部木古墳群」『福岡市埋蔵文化財報告書』第623集
- (3) 久山町教育委員会 2004「原石棺群—原古墳群」『久山町文化財調査報告書』第10集
- (4) 福岡市教育委員会文化課 1975「粕田部木原遺跡」『現地説明会資料I』
- (5) 粕屋町文化財専門委員会 1982「籾栗町誌」籾栗町役場
- (6) 籾栗町教育委員会 2017「鬼ヶ浦横穴墓群」『籾栗町文化財調査報告書』第9集
- (7) 福岡大学名誉教授武末純一先生のご教示による。
- (8) 武末純一 1991「[3] 西日本の瓦質土器—州を中心に」『日韓交渉の考古学—弥生時代編』株式会社六興出版
- (9) 森本幹彦 2020「女界瀧沿岸城周辺の中国系・楽浪系土器と瓦質土器」『新・日韓交渉の考古学—弥生時代—(最終報告書論考編)』『新・日韓交渉の考古学—弥生時代—』研究会、「新・日韓交渉の考古学—青銅器—原三国時代—」研究会
- (10) 福岡市教育委員会 1985「多々良田遺跡III」『福岡市埋蔵文化

財調査報告書』第121集

- (11) 粕屋町教育委員会 2017「戸原寺田遺跡」『粕屋町文化財調査報告書』第41集
- (12) 粕屋町教育委員会 2021「阿恵古原敷遺跡第2地点」『粕屋町文化財調査報告書』第54集
- (13) いずれも、未報告資料である。長者原屋敷前遺跡では、縄路文に平行条線を廻らせた陶質土器等が出土している。戸原寺田遺跡の第2地点では、朝鮮半島系陶質土器の杯身等が出土しており、令和4年度に報告予定である。
- (14) 粕屋町教育委員会 2015「内橋坪見遺跡3次」『粕屋町文化財調査報告書』第38集
- (15) 粕屋町教育委員会 1994「内橋坪見遺跡1次・2次」『粕屋町文化財調査報告書』第8集
- (16) 粕屋町教育委員会 2019「内橋坪見遺跡1次・2次」『粕屋町文化財調査報告書』第44集
- (17) 寺沢知子 1985「鉄製穂摘具」『弥生文化の研究』第5巻道具と技術雄山閣株式会社
- (18) 古墳時代後期のSD8の遺物が1点まぎれ込んだとすれば、土馬(土師質)の右前脚となろう。
- (19) なお、切り合い関係にあるSC23とSC31はそれぞれから砥石が出土する。SC23出土砥石は屋内土坑であるSK30出土である。両建物は切り合い関係にあるため、SC23、SK30掘削時にSC31の遺物が混ざり込んだ可能性もあり、SC31に砥石2点が存在した可能性も残る。なお、SC3は砥石が2点出土する。
- (20) 石田為成 2001「装飾須恵器出土地名表(下)」『考古学ジャーナル』10月臨時増刊号ニューサイエンス社
- (21) 「田中幸雄寄贈品」九州歴史資料館所蔵品の画像資料による。九州歴史資料館 進村真之氏にご協力いただいた。
- (22) 註2と同じ
- (23) 註1と同じ
- (24) 註1と同じ

図版



那木原道路全体写真〔航空レーザー測量による作成〕（上が北）





調査区全景（南西から）



調査区全景 (南から)



調査区全景 (北から)



SC2 完掘状況 (東から)



SC3 完掘状況 (南から)



SC4 完掘状況 (南東から)



SC5 遺物出土状況 (南東から)



SC6 [真ん中]、SC7 [左奥] 完掘状況 (西から)



SC8 完掘状況 (南から)



SC9 [左], SC10 [右] 完掘状況 (南から)



SC11 完掘状況 (東から)



SC12 完掘状況 (西から)



SC13完掘状況(南6-5)



SC14完掘状況(南6-5)



SC15完掘状況(南東6-6)



SC16完掘状況(南東6-6)



SC17完掘状況(南西から)



SC18完掘状況(南東から)



SC19床面掘出状況(南東6-5)



SC19床面(東側)掘出状況(西6-5)



SC20 遺物出土状況(南東から)



SC20 完掘状況(南東から)



SC21 カマド遺物出土状況(南から)



SC21 カマド完掘状況(南から)



SC21 完掘状況(南から)



SC22 完掘状況(東から)



SC23 土層状況(南東から)



SC23 土層状況(北西から)



SC23 完掘状況 (南から)



SC23 中央部平截状況 (西から)



SC23 中央部完掘状況 (西から)



SC24 完掘状況 (南から)



SC25完掘状況(東から)



SC26完掘状況(南から)



SC27 中央部平截状況(南から)



SC27 中央部完掘状況(南から)



SC27完掘状況(北から)



SC28完掘状況(南から)



SC29焼土面検出状況(南西から)



SC29中央部平截状況(北東から)



SC29完掘状況(東から)



SC31完掘状況(西から)



SC31中央部半掘状況(西から)



SC31中央部完掘状況(西から)



SC33完掘状況(南西から)



SC32完掘状況(南西から)



SC33中央部半掘状況(西から)



SC33中央部完掘状況(西から)



SC33 完掘状況(西から)



SC34 完掘状況(南西から)



SC35 土層状況(南西から)



SC35 土層状況(北東から)



SC35完掘状況(東から)



SC36完掘状況(南から)



SC37遺物出土状況(南西から)



SC37 完掘状況(南東から)



SC38 中央部半截状況(南東から)



SC38 中央部完掘状況(南東から)



SC38 完掘状況(南東から)



SC40 完掘状況(南西6-5)



SC41 完掘状況(南西6-5)



SC42 遺物出土状況(北西6-5)



SC42完掘状況(南西から)



SC43完掘状況(北西から)



SC44完掘状況(南东c-5)



SC44遺物出土状況(西b-5)



SC44裝飾道惠部(図46-8)出土状況(西b-5)



SC45完掘状況(南东c-5)



SC46完掘状況(南西6-5)



SC47遺物出土状況(西6-5)



SC47完掘状況(西6-5)



SC48, SC49 完掘状況 (東から)



SC50, SC51 完掘状況 (南から)



SB2 完掘状況 (西から)



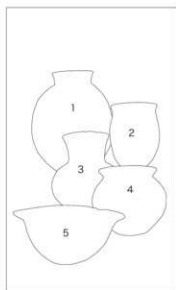
SK17 完掘状況 (西から)



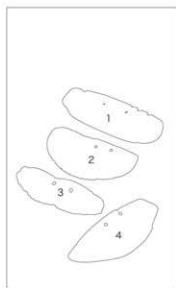
SK26 遺物出土状況(西から)



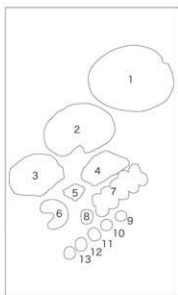
SK9 遺物出土状況(東から)



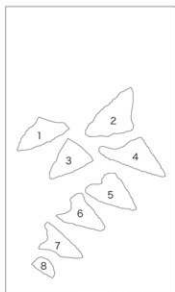
- 1, SC5-2 [图 10]
- 2, SC5-3 [图 10]
- 3, SP307 [图 72]
- 4, SP244-2 [图 72]
- 5, SC5-17 [图 11]



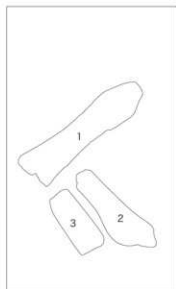
1. SC33-3 [図 37]
2. SX16-1 [図 68]
3. SC31-2 [図 37]
4. SC20-15 [図 23]



- 1, SC28-1 [図 33]
- 2, SK37-3 [図 56]
- 3, SC34-3 [図 37]
- 4, SP300-3 [図 72]
- 5, SP525 [図 73]
- 6, SC23-11 [図 29]
- 7, SC22-5 ~ 14 [図 27]
- 8, SC44-13 [図 46]
- 9, SC23-12 [図 29]
- 10, SC23-13 [図 29]
- 11, SC1-4 [図 7]
- 12, SC1-3 [図 7]
- 13, SC23-14 [図 29]



- 1, SP540 [図 73]
- 2, SC35-3 [図 37]
- 3, SC23-10 [図 29]
- 4, C区包含層-2 [図 74]
- 5, SC23-9 [図 29]
- 6, C区包含層-1 [図 74]
- 7, SC25-1 [図 31]
- 8, B区包含層-4 [図 74]



1. SC3-6 [图 7]
2. SK43-2 [图 59]
3. SC3-5 [图 7]



上, SD11-8 [図66] 中, SP514 [図73] 下, SC23-5 [図29]



SC6-1 [図13]



SC5-27 [図11]



SC15-1 [図19]



SC21-11 [图 25]



SC20-14 [图 23]



SC21-10 [图 25]



SC23-6 [図 29]



SC42-11 [図 44]



SC37-14 [図 39]



SC44-8 [図 46]



SK20-6 [图 54]



SD11-2 [图 66]



SD8-3 [图 60]



青土 [图 74]

報告書抄録

| ふりがな | へきぼるいせき | | | | | | | |
|--------|--|-----------|--------------------|-----------------------------|--------------|-----------------------------|-----------|------|
| 書名 | 部木原遺跡 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 粕屋町文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第 59 集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 福島日出海、朝原泰介、高橋幸作 | | | | | | | |
| 編集機関 | 粕屋町教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒 811-2314 福岡県糟屋郡粕屋町若宮一丁目 1 番 1 号 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2022 年 3 月 31 日 | | | | | | | |
| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 部木原遺跡 | 福岡県糟屋郡粕屋町 大字上大隈 758 | 403491 | 280028 | 33°38'19" | 130°29'41.2" | 2020.7.20 ～ 2021.1.26 | 6,097.1mf | 物流倉庫 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 部木原遺跡 | 集落 | 縄文時代～奈良時代 | 竪穴建物、竪立柱建物、土坑、溝状遺構 | 縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器、鉄器 | | | | |
| 要約 | <p>調査では、竪穴建物 (SC) 51 棟、竪立柱建物 (SB) 2 棟、土坑 (SK) 48 基、溝状遺構 (SD) 12 条、その他の遺構 (SX) 47 基、多数のピット等を検出した。ただし、遺構を整理する中で、土坑 (SK)、その他の遺構 (SX) については、竪穴建物に伴う屋内土坑やが跡と見られるもの、また、その他の遺構 (SX) についても、竪穴建物 (SC) の削平後の状態のものが存在しており、両者の合計数は上記の数より減少する。</p> <p>遺物は、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭頃の弥生土器や土師器を中心に、一部古墳時代中期～後期頃の須恵器や土師器を含む。なお、遺構は方形の跡遺土坑を配した竪穴建物をはじめ、遺物では弥生時代後期末～古墳時代前期初頭頃の青銅製鋤先片、鉄製穂鎌具、平島系の瓦質土器、古墳時代の子持壺(甔)の子(小形壺)等が注目される。</p> <p>最後に、弥生時代後期末 SC20 出土の獣脚状土製品は、土馬脚部の可能性もあり検討すべき遺物である。また、弥生時代後期末 SC23 出土の器種不明の把手も外來系遺物の可能性を持つものとして特記されよう。</p> | | | | | | | |
| | | | | | | | | |

部木原遺跡 粕屋町文化財調査報告書第 59 集

令和 4 (2022) 年 3 月 31 日 発行

発行 粕屋町教育委員会

〒 811-2314 福岡県糟屋郡粕屋町若宮一丁目 1 番 1 号 (粕屋町立歴史資料館)

印刷・製本 株式会社 博多印刷

〒 812-0028 福岡県福岡市博多区須崎町 8-5